

黒百合

泉鏡花

青空文庫

序

越中の国立山たてやまなる、石瀆いわたきの奥深く、黒百合となんいうもの
 ありと、語るもおどろおどろしや。姫百合、白百合こそなつかし
 けれ、鬼と呼ぶさえ、分けてこの凄すさまじきを、雄々しきは打笑い、
 さらぬは袖そでぎちよう几帳しやうしたまうらむ。富山の町の花売は、山やま賤がつたぐいの類
 にあらず、あわれに美しき女なり。その名の雪の白きに愛でて、
 百合の名の黒きをも、濃い紫と見たまえかし。

明治三十五年寅壬三月

一

「島野か。」

ひる
午少し過ぐる頃、富山県知事なにがしの君が、
あえものちようやしきの邸
の門で、活潑に若い声で呼んだ。

よっかく
呼ばれたのは、知事の君が遠縁の法学生、この邸に奇寓する食
客であるが、立寄れば大樹の蔭で、涼しい服装、身軽な夏服
を着けて、帽を目深に、洋杖も細いので、獵犬ジャム、のほう
ずおおきに耳の大きいのを後うしろに従え、得々として出懸ける処、澄ところましてい
たのが唐突だしぬけに、しかも呼棄よびすてにされたので。

およそ市中において、自分を呼棄てにするは、何等なにらの者である
うと、且つ怪あやしみ、且つ憤うらつて、目を尖とがらして顔を上げる。

「島野。」

「へい、」と思わず恐入おそつて、紳士は止やむことを得かず頭かしらを下さげた。
「勇美ゆみさんは居いるか。」と言いいさま摺すれ違ちがい、門かどを入いらうとし
て振向むかいて言いつたのは、十八九の美少年である。絹セルの单衣ひとえ、
水色ちりめん縮緬ちりめんの帯おびを背うしろ後に結むすんだ、中背なかつせの、見るから蒲柳ほりゆうの姿すがたに
似にないで、眉まゆも眦まなじりもきりりとした、その癖口くちもと許ゆるの愛あいくるしいの
が、パナマの帽子ぼうしを無造作むぞうさくに頂あいで、絹の手巾ハンケチの雪ゆきのような白
いのを、泥どろに染しめて、何か包くるんだものを提あげている。

成程なるほどこれならば、この食客的紳士しょくたてきしんしが、因よつてもつて身みの金箔きんぱく

とする処の知事の君をも呼棄てにしかねはせぬ。一国の門閥もんぱつ、先代があまねく徳を布しいた上に、経済の道宜よろしきを得たので、今も内福の聞えの高い、子爵千破ちはや矢家の当主、すなわち若君滝太たきたろ郎うである。

「お宅でございます、」と島野紳士は渋々ながら恭うやうやしい。

「学校は休やすみかしら。」

「いえ、土曜日はんどんなんで、」

「そうか、」と謂いい棄てて少年はずつと入った。

「ちよッ。」

その後を見送って、島野はつくづく舌打をした。この紳士の不平たるや、単に呼棄てにされて、その威嚴その幾分を殺がれたばか

りではない。誰も誰も一見して直ちに館の飼犬だということを知つて、これを従えた者は、知事の君と別懇の者であるということを示す、活きた手形のようなジャムの奴が、連れて出た己を棄てて、滝太郎の後から尾を振りながら、ちよろちよると入つたのであつた。

「恐れるな。小天狗め、」とさも悔しげに口の内に呟いて、洋杖をちよいとついて、小刻に二ツ三ツ地の上をつついたが、懶げに帽の前を俯向けて、射る目を遮り、淋しそうに、一人で歩き出した。

「ジャム、」

真先に駈けて入つた獵犬をまず見着けたのは、当館の姫様

で勇美子ゆみこという。襟は藤色で、白地にお納戸で薩摩縞さつましまの単衣ひとえ、目のぱつちりと大きい、色のくつきりした、油気の無い、さらさらした癖せなの無い髪を背へ下げて、蝦茶えびちやのりボン飾かざり、簪かざしは挿さず、花はな 畠はなばたけの日向ひなたに出ている。

二

この花畠は——門を入ると一面の芝生、植込のない押開おっぴらいた突つきあたり 当あが玄関、その左の方が西洋造づくりで、右の方が廻廊まわり下で、そこが前裁まへざいになっている。一体昔の大名の別邸を取払った幾分の造作まが残ったのに、件くだんの洋風の室数まかずを建て増したもので、桃色の窓

を見着けた。

「おや、」

同時に少年も振返つて、それと見ると、芝生を横截よこぎつて、つかつかと間近に寄つて、

「ちよいとちよいと、今日はね、うんと礼を言わすんだ、拝んで可いな。」と莞爾にこにこ々々しながら、勢いきおいよく、棒を突出したようなものいいで、係かけかまい構かまなしに、何か嬉しそう。

言葉つきなら、仕打なら、人の息女とも思わぬを、これがまた気に懸けるような娘でないから、そのまま重たげに獵犬かしうしろの頭を後に押遣おしやり、顔を見て笑つて、

「何？」

「何だつて、大變だ、活いきてるんだからね。お姫様なんざあ学者の先生だけれども、こいつあ分らない。」と件くだんの手ハンケチ巾の包を目の前へ撮つまんでぶら下げた。その泥にじが染にじんでいる純まっしろ白しろなのを見て、傾かたいて、

「何です。」

「見ると驚びっくりくぜ、吃びっくり驚びっくりすらあ、草くさだね、こりや草くさなんだけれど活いきてるよ。」

「は、それは活いきていますよとも。草くさでも樹きでも花はなでも、皆みんな活いきてるではありませんか。」という時、姫芥子ひめかじこの花はなは心こころありげに袂たもとに触ふれて閃ひらめいた。が、滝太郎たきたろうは拗すねたような顔かお色つぎで、

「また始めたい、理窟りくつをいつたつてはじまらねえ。可いいからまあ

難^{ありがと}有うと、そういつてみねえな、よ、厭^{いや}なら止^よせ。」

「乱暴ねえ、」

「そつちアまた強情だな、可いじやあないか難有う……と。」

「じやアまああつちへ参りましょう。」

と言いかけて勇美子は身を返した。塀の外をちらほらと人の通るのが、小さな節穴^{すか}を透^{はる}して遙^{はるか}に昼の影燈籠^{かげどうろう}のように見えるのを、熟^{じつ}と瞻^{みまも}つて、忘れたように跪居^{つひい}る犬を、勇美子は掌^{てのひら}ではたと打つて、

「ほら、」

ジャムは二三尺飛退^{とびすさ}つて、こちらを向いて、けろりとしたが、衝^つと駈出^{かけだ}して見えなくなつた。

「活きてるんだな。やつぱり。」といって滝太郎一笑す。

振向いて見たばかり、さすがこれには答えないで、勇美子は先に立って鷹揚おうようである。

三

「いらつしやいまし。」

縁側つかに手を支えて、銀杏いちようがえし返かへの小間使しとやかが優容しとやかに迎えている。

後あとさき先あになつて勇美子の部屋むろに立向うと、たちまち一種い身に染みるかおりような快い薫かおりがした。縁の上も、床の前も、机この際も、と見ると芳かんばしい草と花とで満みたされているのである。ある物は乾燥紙の上に

半ば乾き、ある物は圧板おしいたの下に露を吐き、あるいは台紙に、紫、紅あか、緑、樺かば、橙だいだいいろ色の名残なごりを留とどめて、日あたりに並んだり。壁に五段ばかり柵を釣つて、重ね、重ね、重ね、重ねてあるのは、不残のこらず種類の違つた植物の標本で、中には壇びんに密閉してあるのも見える。山、池、野原、川岸、土堤どて、寺、宮の境内、産地々々の幻をこの一室こに籠めて物凄ものすごくも感じらるる。正面には、紫の房々とした葡萄ぶどうの房を描いて、光線を配あしらつた、そこにばかり日の影が射さして、明るいようで鮮かな、露垂るばかりの一面の額、ならべて壁に懸けた標本の中なる一輪の牡丹ぼたんの紅くれなゐは、色はまだ褪あせ果てぬが、かえつて絵のように見えて、薄暗い中へ衝つと入つた主あるじの姫が、白と紫を襲かきねた姿は、一種言うべからざる色彩があつた。

「道、」

「は、」と、答こたへをし、大人しやかな小間使は、今座に直つた勇美子と対さしむかい向むかひに、紅革べにかわの蒲団ふとんを直して、

「千破矢様の若様、さあ、どうぞ。」

帽子も着たままで沓くつぬぎ脱つたに突立つてた滝太郎は、突いきなり然縁縁に懸かけて後うしろざまに手を着いたが、不思議に鳥の鳴く音ねがしたので、驚おどろいて目を睜みはつて、また掌てのひらでその縁の板の合せ目をおさえてみた。

「何だい、鳴るじゃあないか、きゆうきゆういつてやがら、おや、可訝おかしいな。」

「お縁側が昔のまままでございますから、旧もとは好事ものずきでこんなに仕懸かけました。鶯うぐいすばり張はと申すのでございますよ。」

小間使が老実まめだ立っていうのを聞いて、滝太郎は恐入かおつきった顔色で、

「じゃあ声を出すんだらう、木だの、草だの、へ、色々なものが生きていら。」

「何をいつてるのよ。」と勇美子は机の前に、整然ちやんと構えながら苦笑する。

「どう遊とりばしましたの。」
取とり為な顔がの小間使に向って、

「聞きねえ、勇さんが、ね、おい。」

「あれ、また、乱暴おっしやなことを有おっしや仰おっしやいます。」と微笑ほほえみながら、
道なれなれは馴なれなれ々たしなしく窘たしなめるがごとくに言った。

「御容子にも御身分にもお似合い遊ばさない、ぞんざいな言ばつかし。不可えだの、居やがるだのツて、そんな言は御邸の車夫だつて、部屋へ下つて下の者同士でなければ申しません。本当に可ませんお道楽でございますねえ。」

「生意気なことをいったつて、不可えや、畏つてるなあ冬のこつた。ござつたのは食物でみねえ、夏向は恐れるぜ。」

「そのお口だものを、」といつて驚いて顔を見た。

「黙つて、見るこつた、折角お珍らしいのに言句をいつてると古くしてしまふ。」といいながら、急いで手巾を解いて、縁の上に拵げたのは、一掴、青い苔の生えた濡土である。

勇美子は手を着いて、覗くようにした。眉を開いて、艶麗に、

「何です。」

滝太郎は背せなを向けてぐつと澄まし、

「食いつくよ、生きてるから。」

四

「まあ、若様、あなた、こつちへお上り遊ばしました。」と小間使は一塊の湿った土をあえて心にも留めないのであつた。

「面倒臭いや、そこへ入り込むと、かしこま畏らなけりやならないから、

沢山だい。」といつて、片足を沓くつぬぎ脱に踏伸ばして、片膝を立て

おとがて頤いを支えた。

「また、そんなことを有^{おつしや}仰らないでさ。」

「勝手にございますよ。」

「それではまあお帽子でもお取り遊ばしましな、ね、若様。」
黙っている。こころやすだ心易立てに小間使はわざとらしく、

「若様、もし。」

「堪忍しねえ、まぶし炫いやな。」

滝太郎はさも面倒そうに言い棄てて、再び取合わないといった容子を見せたが、うつむ俯向いて、足に近い飛石の辺をほとりきつ屹と見た。渠はかれ渠は炫いといつて小間使に謝したけれども、今瞳を据えた、パナマの夏帽の陰なるまなこ一双の眼は、極めて冷静なものである。小間使は詮せ方んかたなげに、向直つて、

「お嬢様、お茶を入れて参りましょう。」

勇美子は余念なく滝太郎の贈物をなが視めていた。

「珈琲コオヒイにいたしましょうか。」

「ああ、」

「ラムネを取りに遣わしましょうか。」

「ああ、」とばかりで、これも一向に取合わないのので、小間使は誠に張合がなく、

「それでは、」といって我ながら訳も解らず、あやふやに立とうとする。

「道、」

「はい。」

「冷水おひやが可いいぜ、汲立くみたてのやつを持つて来てくんねえ、後生だ。」

「といいも終らず、滝太郎はつかつかと庭に出て、飛石の上からいきなり地つちの上へ手を伸ばした、疾はやいこと！ 掴つかまえたのは一疋の小さな蟻あり。」

「おいらのせいじゃあないぞ、何だ、蟻のような奴が、譬たとえにも謂いわあ、小さな体をして、動いてら。おう、堪忍しねえ、おいらのせいじゃあないぞ。」
 「といいいい取つて返して、縁側うつむに俯向うつむいて、勇美子が前髪を分けたのに、眉を隠して、瞳くだんを件の土産に寄せて、

「見ねえ。」

勇美子は傍目わきめも触ふらないでいた。

しばらくして滝太郎は大得意の色を表して、莞爾にっこと微笑ほほえみ、

「ほら、ね、どうだい、だから難^{ありがと}有うツて、そう言いねえな。」

「どこから。」といつて勇美子は嬉しそうな、そして頭^{つむり}を下げていたせいであろう、耳^{みみもと}朶に少し汗が染^{にじ}んで、眶^{まぶち}の染まった顔を上げた。

「どこからです、」

「え、」と滝太郎は言^い淀^{よど}んで、面^{かお}の色が動いたが、やがて事も無げに、

「何、そりや、ちゃんと心得てら。でも、あの余計にやあ無いもんだ。こいつあね、蠅^はじゃあ大きくなって、駄^だ目なの、小さな奴^{やつ}なら蜘蛛^{くも}の子位は殺^{やっ}つけるだろう。こら、恐^{こわ}いなあ、まあ。」

心なく見たらば、群がった苔の中で気は着くまい。ほとんど土

の色と紛まがう位、薄樺うすかばい色で、見ると、柔かそうに湿しめりを帯びた、小さな葉かさなが累り合なめらつて生えている。葉尖はさきにすすくと針を持つて、滑なめらかに開いていたのが、今蟻を取つて上へ落すと、あたかも意識したように、静々と針を集めて、見る見る内に蟻とりこを擒とにしたのである。

滝太郎は、見て、その駭げんあるを今更に驚いた様子で、「ね、特別に活きてるだろう。」

五

「何でも崖裏がけか、藪やぶの陰といった日陰の、湿った処で見着けたの

ね？」

「そうだ、そうだ。」

滝太郎は邪慳じゃけんに、無愛想にいつて目も放さず見ていたが、

「ヤ、半分ばかり食べやがった。ほら、こいつあ溶けるんだ。」

「まあ、ここに葉のまわりの針の尖さきに、一ツずつ、小さな水玉のような露を持つててね。」

「うむ、水が懸かかつて、溜たまっているんだあな、雨上りの後だから。」

「いいえ、」といいながら勇美子は立つて、室へやを横よこぎり、床柱とこばしらに

黒塗の手提の採集筒と一所にある白金巾しろかなきんの前懸まえかけを取つて、襟

へあてて、ふわふわと胸膝むねひざを包んだ。その瀟灑しょうせい洒しやな風采ふうさいは、

あたかも古武士が鎧よろいを取つて投懸なげかけたごとく、白拍子まいぎぬが舞衣まいぎぬを

絡うたごとく、自家の特色を發揮して余あるものであつた。

勇美子は旧の座に直つて、机の上から眼鏡を取つて、件の植物の上に翳し、じつと見て、

「水じゃあないの、これはこの苔が持つている、そうね、まあ、あの蜘蛛が虫を捕える糸よ。蟻だの、蚋だの、留まると遁がさないう道具だわ。あなた名を知らないでしょう、これはね、モウセンゴケというんです、ちよいとこの上から御覧なさい。」と、眼鏡を差向けると、滝太郎は何をという仏頂面で、

「詰らねえ、そんなものより、おいらの目が確だいな。」といつて傲然とした。

しかし、名も形も性質も知らないで、湿地の苔の中に隠れ生え

て、虫を捕獲するのを発見した。滝太郎がものを見る力は、また多とすべきものである。あらかじめ書籍ほんに就いて、その名を心得、その形を知つて、且つかかなる処で得らるるかを学んでいるものにも、容易あさに求獵あさられない奇品であることを思い出した勇美子は、滝太郎がこの苔いに就いて、いまだかつて何等の知識もないことに考え到いたつて、越中の国富山の一箇所いで、しかも薄暗い処でなければ産しない、それだけ目に着きやすからぬ不思議な草を、不用意にして採集して来たことに思い及ぶと同時に、名は知るまいといつて誇つたのを、にわかいに恥じて、差さ翳しかざした高慢な虫眼鏡を引込めながら、行儀悪くほとんど匍匐はらばいになつて、頬ほおづえ杖えを突いて、いる滝太郎の顔みまもを瞻みまもつて、心から、

「あなたの目は恐こわいのね。」と極めて真面目まじめにしみじみといった。勇美子は年とし紀も二ツばかり上である。去年父母に従うてこの地に来たが、富山より、むしろ東京に、東京よりむしろ外国に、多く年月を経た。父は前さきに仏蘭西フランスの公使館づきであつたから、勇美子は母とともに巴里パリイに住んで、九ツの時から八年有余、教育も先方こうで受けた、その知識と経験とをもて、何等かこの貴公子に見所があつたのであろう、滝太郎といえばかねてより。……

六

「よく見着けて採つて来てねえ、それでは私に下さるんですか、

頂いておいても宜よろしいの。」

「だから難ありがと有ありがとうツて言いねえれば、はじめから分つてら。」と
滝太郎は有したりがお為顔で嬉しそう。

「いいえ、本当に結構でございます。」

勇美子はこういつて、猶ためら予あたつて四辺を見たが、手をその頬あたりの辺へ齎もたらして唇を指に触れて、媽えんぜん然ぜんとして微笑ほほえむと斉ひとしく、指環ゆびわを抜き取つた。玉の透通つて紅あかい、金こんじき色の燦さんたるのをツツと出して、

「千破矢さん、お礼をするわ。」

頤あごづえ杖さきした縁側の目の前さきに、しかき贈物を置いて、別こころに意にも留めない風で、滝太郎はモウセンゴケを載せた手巾ハンケチの先を――

ここに耳を引張るべき獵犬も居ないから——摘んでは引きながら、片足は沓脱を踏まえたまま、左で足太鼓を打つ腕白さ。

「取っておいて下さいな。」

まるで知らなかったのでもないかして、

「いりやしねえよ。さあ、とうとう蟻を食つちやった、見ねえ、

おい。」

勇美子は引手繰られるように一膝出て、わずかに敷居に乗らな
いばかり。

「よう、おしまいなさいよ。」といったが、端なくも見えて、急
き込む調子。

「欲かアありませんぜ。」

「お厭いや。」

「それにや及ばないや。」

「それではお礼としないで、あの、こうしましょうか、御褒美。」
と莞爾にっこりする。

「生意氣を言っていら、」

滝太郎は半ば身を起して腰をかけて言い棄てた。勇美子は返すべき言葉もなく、少年の顔を見るでもなく、モウセンゴケに並べたある贈物を見るでもなく、目の遣やり処に困った風情。年上の澄ました中うちにも、仇あどけ気なさが見えて愛々しい。顔を少し赤らめながら、

「ただ上げては失礼ね、千破矢さん、その指環。」

「え、」と思わず手を返した、滝太郎の指にも黄金のきん一ひとすじ条の環わが嵌はまっている。

「取替ツこにしましょうか。」

「これをかい。」

「はあ、」

勇美子は快活に思い切った物言いである。

滝太郎は目を円つぶらにして、

「不可いけねえ。こりや、」

「それでは、ただ下さいな。」

「うむ。」

「取替えるのがお厭なら。」

「止しねえ、お前めえ、お前さんの方がよッぽど可いいや、素晴らしいんじゃないか。俺おいらのこの、」

ななめと斜ななめに透ななめかして、

「こりや、詰つまらない。取替かえると損こだから、悪いことは言いわないぜ、はははは、」と笑わつたが、努こめて紛まらそうとしたらしい。

勇美子は燃もゆるがごとき唇くちびるを動うかして、動うかして、

「惜あしいの、大事だいじなんですか。」

「うむ、大事だいじなんだ。」といい放はなつて、縁ゆかりを離はなれてそのまますすくと立たつた。

「帰かえつたら何か持もたして寄越よこさあ、邸ていでも、庫くらでも欲ほしかあ上げよう、こいつあ、後生ごせいだから堪忍かんなんしねえ。」

勇美子も慌あわただしく立つ処へ、小間使は来て、廻縁の角へ優容しとやかに現れた。何にも知らないから、小腰を屈かがめて、「お嬢様、例いつぞの花売の娘が参っております。若様、もうお忘れ遊ばしたでしょう、冷水おひやは毒でございますよ。」

七

場末ではあるけれども、富山にぎやで賑かなのは総曲輪そうがわという、大手先。城の外壕そとほりが残った水溜みずたまりがあつて、片側町こあきゆうどに小商賈みせものが軒を並べ、壕に沿つては昼夜交代ほしみせに露店みせものを出す。観世物小屋が、氷こおりみせ店まじに交まじつていて、町外まちはずれには芝居もある。

ここに中空を凌いで椶が一本、梢にははや三日月が白く斜に懸
 つた。蝙蝠が黒く、見えては隠れる横町、総曲輪から裏の旅
 籠町という大通に通ずる小路を、ひとしきり急足の往
 来があつた後へ、もの淋しそうな姿で歩行いて来たのは、大人し
 やかな学生風の、年配二十五六の男である。

久留米の蚊飛白に兵児帯して、少し皺になつた紬の黒の紋着
 を着て、紺足袋を穿いた、鉄色の目立たぬ胸紐を律義に結んで、
 懐中物を入れてあるが、夕涼から出懸けたのであろう、帽は
 被らず、髪かぶの短かいのが漆うるしのようで、色の美しく白い、細面の、
 背のすらりとしたのが、片手に帯を挟んで、俯向いた、紅絹の切
 で目を軽く押えながら、物思ひをする風で、何か足許も覚束

ないよう。

静かに歩を移して、もう少しで通へ出ようとする、二間幅の町の両側で、思いも懸けず、喚わっ！ といつて、動揺どよめいた、四五人の小児こどもが鯨波ときを揚げる。途端に足を取られた男は、横様にはたご地つちの上。

「あれ、」という声、旅籠町の角から、白い脚絆きやはん、素足わらじに草鞋穿ばきの裾すそを端折はしよつた、中形の浴衣しゆすに縹あざ子の帯おびの幅はば狭せまなのを、引懸ひっかけに結んで、結んだ上へ、桃色の帯揚おびあげをして、胸高に乳の下へしつかとメ《し》めた、これへ女扇とうちりめんをぐいと差して、膝の下てぬぐいの隠れるばかり、甲斐々々しく、水色唐縮緬とうちりめんの腰巻で、手拭てぬぐいを肩に当て、縄からげにして巻いた莫ござ座かろを軽かろげに荷になつた、商あきない帰り。

町や辻では評判の花売が、曲角から遠くもあらず、横町の怪我けがを見ると、我を忘れたごとく一ひととび飛に走り着いて、転んだ地つちへ諸共に膝を折敷いて、扶たすけ起そうとする時、さまでは顛動てんどうせず、力なげに身を起して立つ。

「どこも怪我はしませんか。」と人目も構わず、紅絹を持った男の手に縋すがらぬばかりに、ひたと寄つて顔を覗のぞく。

「やあい、やあい。」

「盲目めくらやあい、按摩針あんまはり。」と囃はやしたので、娘は心着いて、屹きつと

見て、立直つた。

「おいらのせいじゃあないぞ、」

「三年先の鳥のせい。」

甲走かんばしった早口に言い交わして、両側から二列に並んで遁にげ出した。その西の手から東の手へ、一ひとすじ条の糸を渡したので町幅を截きつて引張合ひっぱりつて、はらはらと走り、三ツ四ツ小さな顔が、交かわる交かわる見返り、見返り、

「雁がんが一羽懸かかった、」

「懸かかった、懸かかった。」

「晩のお菜かずに煮て食おう。」と囃はしぎま、糸つなに繫なつたなり一ひとかた団まりになつたと見ると、大おおきな廂ひさしの、暗い中へ、ちよろりと入つて隠れてしまつた。

新庄しんじよ通れば、茨いばらと、藤と、

藤が巻附く、茨が留める、

茨放せや、帯や切れる、

さあい、さんさ、よんさの、よいやな。

と女の子のあどけないのが幾人たりか声を揃えて唄うのが、町を隔てて彼方あなたに聞える。

二人は聞いて立並んで、黙つて、顔を見て吻ほっと息。

八

「小児衆こどもですよ、不可いけません。両方から繩ひつぱを引張つて、軒下に隠れていて、人が通ると、足へ引懸ひっかけるんですもの、悪いことをしますねえ。」

「お雪さん、」と言いかけて、男はその淋しげな顔を背けた。声は、足を搦からんで僵たおされた五分を経のちない後にも似ず、落着いて沈んでいる。

「はい、どこも何ともなさいませんか。」

お雪と呼ばれた花売の娘は、優しく男の胸の辺りで百合の姿のしおらしい顔を、傾けて仰いで見た。

「いえ、何、擦すりむき剥はたもしないようだ。」と力なく手を垂れて、膝の辺りを静しずかに払はたく。

「まあ、砂がついて、あれ、こんなに、」と可うらめ恕めしそうに、袖についた埃ほこりを払おうとしたが、ふと気を着けると、袂たもとは冷ひや々ひやと湿りを持って、塗まみれた砂も落尽くさず、またその漆黒な髪もしつと

りと濡れている。男の眉は自から顰ひそんで、紅絹もみきれの切で、赤々と押えた目の縁ふちも潤んだ様子。娘は袂すがに縋すがったまま、荷を結えた縄の端を、思わず落そうとしてしっかり取った。

「今帰るのかい。」

「は……い。」

「暑いのに随分だな。」

思入ねぎらつて労う言葉。お雪は身に染み、胸こたに伝えて、

「あなた。」

「ああ、」

「お医者様は、」

問われて目をおさ圧えた手がかすか微に震え、

「悪い方じゃあないツていうが、どうも^{はかばか}捌々しくは行かぬそう
 だ。なりたけまあ大事にして、ものを見ないようにする方が可い
 つていうもんだから、ここはちようど人通の少い処、^{そつ}密と目を塞
 いで探つて来たので、ついとんだ^{わな}羅に^{ふみこ}踏込んださ、^{いくじ}意気地はない
 な、^{いまいま}忌々しい。」

とさりげなく^{うちほほえ}打頬笑む。これに心を安んじたか、お雪もやや
 色を直して、

「どうぞまあ、お医者様を内へお呼び申すことにして、あなたは
 お寝^よつて、何にもしないでいらつしやるようにしたいものでござ
 いますね。」

「それは何、懇意な男だから、^{さき}先方でもそう言つてくれるけれど

も、上手なだけ流行るので隙ひまといつちやあない様子、それも気の毒じゃあるし、何、寝ているほどの事もないんだよ。」

「でも、随分お悪いようですよ。そしてあの、お帰途かえりに湯にでもお入りなすったの。」

考えて、

「え、なぜね。」

「お頭っむりが濡れておりますもの。」

「む、何ね、そうか、濡れてるか、そうだろう。医者が冷ひやしてくれたから。」と、詰なじられて言いいひらき開ひらをする者のような弱い調子で、努めて平気を装って言った。

「冷しますと、お薬になるんですか。」と袂を持つ手に力が入る

と、男は心着いて探つてみたが、苦笑して

「おお、湿つた手拭を入れておいたな、だらしのない、袂が濡れた。成る程女房おかみさんには叱られそうなこツた。」

「あれ、あんなことをいつていらつしやるよ。」と嬉しそうに莞爾つこりしたが、これで愁眉しゆうびが開けたと見える。

「御一所に帰りましょうか。」

「別々に行こうよ、ちつと穩おだやかでないから。いや、大丈夫だ。」

「氣を着けて下さいませよ。」

九

ふたり
男女が前後して総曲輪へ出て、この町の角を横切つて、往来の
早い人中に交つて見えなくなると、小児がまた四五人一団になつ
て蹶れたが、ばらばらと駈けて来て、左右に分れて、旧のごとく
軒下に蹲んで隠れた。

月の色はやや青く、蜘蛛はその罫を営むのに忙しい。

その時旅籠町の通の方から、同じこの小路を抜けようとして、
薄暗い中に入って来たのは、一人の美少年。

パナマの帽を前下り、目も隠れるほど深く俯向いたが、口笛を
吹くでもなく、右の指の節を唇に当て、素肌に着た絹セルの単衣
の衣紋を緩げ——弥蔵という奴——内懐に落した手に、何か持つ
て一心に瞻めながら、悠々と歩を移す。小間使が言った千破矢の

若君という御容子はどこへやら、これならば、不可えの、居やがるのと、いけぞんざいなことも言いそうな滝太郎。

「ふん。」

かたほえみ

片微笑をして、また懐の中を熟と見て、

「おいらのせいじゃあないぞ。」と仇口あだぐちに呟つぶやいた。

「やあい、やい」

「盲目やあい。」

こごも 小児は一時いちどきに哄どっと囃したが、滝太郎は俯向いたまま、突当つ

たようになつて立停たちどまったばかり、形も崩さず自若としていた。

膝の辺りへ一ひとすじ条の糸が懸かつたのを、一生懸命両方から引張ひっぱつ

て、

「雁が一羽懸った、」

「懸った、懸った、」と夢中になり、口々に騒ぎ立つのは、大方獲物が先刻のごとく足を取られたと思つたろう。幼いものは、驚破わというと自分の目を先に塞ぐのであるから、敵の動静はよくも認めず、血迷つてただ燥はぐ。

左右みまわをして、叱りもしない、滝太郎の涼しやかな目は極めて優しく、口許くちもとにも愛嬌あいきようがあつて、柔和な、大人しやかな、気高い、可懐なつかしいものであつたから、南無三仕損じたか、逃後にげおくれて間拍子を失つた悪戯者いたずらもの。此奴羽搏こいつはばたきをしない雁だ、と高を括くくつて図々しや。

「ええ、そつちを引張んねえ。」

「下へ、下へ、」

「弛^{ゆる}めて、潜^{くぐ}らせやい。」

「巻付けろ。」

遊軍に控えたのまで手を添えて、搦^{から}め倒そうとする糸が乱れて、網の目のように、裾、袂、帯へ来て、懸^{はず}つては脱れ、また纏^{まと}うのを、身動きもしないで、糸^たたずで、目も放さず、面白そうに見ていたが、やや有^{ねらい}つて、狙^{ねらい}を着けたのか、ここぞと呼吸を合わせた気^け勢^{はい}、ぐいと引く、糸が張った。

滝太郎は早速に押当てていた唇を指から放すと、薄^{うすづき}月にきらりとしたのは、前^{さき}に勇美子に望まれて、断乎^{さっし}として辞し去った指環である。と見ると糸はぷつりと切れて、足も、膝も遮るものな

く、滝太郎の身は前へ出て、見返りもしないで衝と通った。

そのまま総曲輪へ出ようとする時、背後ではわツといつて、我がちに遁げ出す登音。

蜘蛛の子は、糸を切られて、驚いて散々なり。

「貰ったよ。」

滝太郎は左右を、し、今度は憚らず、袂から出して、掌に据えたのは、薔薇の薫の蝦茶のリボン、勇美子が下髪を留めていたその飾である。

土地の口碑こうひ、伝うる処に因れば、総曲輪のかの榎えのきは、稗史はいしが語る、佐々成政さつさなりまさがその愛妾あいしよう、早百合を枝に懸けて惨殺した、三百年の老樹おいきの由。

髪を掴つかんで釣つるし下げた女の顔の形をした、ぶらり火というのが、今も小雨の降る夜が更けると、樹またの股かかに懸るといふから、縁起を祝よあきんどう夜商人は忌み憚はばかつて、ここへ露店を出しても、榎の下は四方を丸く明けて避ける習ならわし慣。

片側の商あきないみせ店の、夥おびただしい、瓦斯がす、洋燈ランプの灯と、露店のかんてらが薄くちらちらと黄昏たそがれの光を放つて、水打った跡を、浴衣着うちわ、団扇うちわを手にした、手拭を提げた漫歩そぞろあるきの人通、行交ゆきちがい、立たちか換わって賑にぎやかな明あかるい中に、榎こずえの梢ぼうぼうは蓬々としてもの寂しく、風

が渡る根際に、何者かこれ店を拵げて、薄暗く控えた商人あきんどあり。

ともすると、ここへ、瘦枯やせがれた坊主の易者が出るが、その者は、

何となく、幽霊を濟度しそうな、怪しい、そして頼母たのもしい、呪文

を唱える、堅固な行者のような風采ふうさいを持つてゐるから、衆ひとの忌む

処、かえつて、底の見えない、靈驗ある趣を添えて、誰もその易

者が榎の下に居るのを怪しまぬけれども、今夜のはそれではない。

今灯を点つけたばかり、油煙も揚らず、かんでらの火も新しい、

店の莫藎ござの端に、汚れた風呂敷を敷いて坐り込んで、物馴なれた軽

口で、

「召どなたしませぬか、さあさあ、これは阿蘭陀オランダトツパイ産の銀流し、

何方どなたもお煙管きせるなり、お簪かんざしなり、真しんちゆう鍮あかがね、銅あかがね、お試あかがねしなさい。鍍め

金つき、ガラハギをなさいましても、鍍金、ガラハギは、鍍金ガラハギ、やつぱり鍍金、ガラハギは、ガラハギ。」

と尻ぽねツ刎の上調子で言つて、ほほと笑つた。鉄漿かねを含んだ唇赤く、細面で鼻筋通つた、引ひきしま緊つた顔立の中年増ちゆうどしま。年紀としは二十八九、三十でもあろう、白地の手てぬぐい拭を姉あねさん被かぶりにしたのに額は隠れて、あるのか、無いのか、これで眉が見えたらたちまち五ツばかりは若やぎそうな目につく器量。垢あかぬけ拔ぬして色の浅黒いのが、絞しぼりの浴衣のりの、糊のりの落ちた、しつとりと露うるさに湿つたのを懊惱まどげに纏まとつて、衣紋えもんも緩くつろげ、左の手を二の腕の見ゆるまで蓮葉はすはに捲まくつたのを膝なに置いて、それもこの売物の広告か、手に持つたのは銀の斜な子打なこうちの女煙管である。

こおりみせ
氷店の白粉首にも、桜木町の赤襟にもこれほどの美なるは

あらじ、ついで見懸けたことのない、大道店の掘出しもの。流れ

渡りの旅商人が、因縁は知らずここへ莫塵を広げたらしい。も

つとも総曲輪一円は、露店も各自に持場が極つて、駈出しには

割込めないから、この空地へ持つて来たに違いない。それにして

も大胆な、女の癖にと、珍しがるやら、怪むやら。ここの国も物

見高で、お先走りの若いのが、早や大勢。

おんな
婦人は流るるような瞳を廻らし、人だかりがしたのを見て、得

意な顔色。

「へい、鍍金は鍍金、ガラハギはガラハギ、品物に品が備わりま

せぬで、一目見てちゃんと知れる。どこへ出しても偽物でござ

いますが、手前商いまする銀流しを少々、「と言いかけて、膝に着いた手を後へ引き、煙管を差置いて箱の中の粉を一捻し、指を仰向けて、前へ出して、つらりと見せた。

「ほんの纒ばかり、一撮み、手巾、お手拭の端、切ツ屑、お鼻紙、お手許お有合せの柔かなものにちよいとつけて、」

婦人は絹の襪褌切に件の粉を包んで、俯向いて、真鍮の板金を取った。

お掛けなさいまし、お休みなさいましと、間近な氷店で金切声。夜芝居の太鼓、どろどろどろ、遙に聞える観世物の、評判、評判。

「訳のないこと、子供衆しゆでも誰でも出来る。ちよいと水をつけて
おいて、柔かにぐいぐいとこう遣りやさえすりや、あい、鷹たか化して
鳩はととなり、傘からかさ変わって助六となり、田鼠でんそ化して鶉うずらとなり、真鍮まね変
じて銀となるツ。」

「すずめかいちゆうにいつてはまぐりとなる雀入海うみ中なかつ為な蛤かきか。」と、立合うちあの中から声を懸け

るものがあつた。

おんな婦人はその声ぬしの主を見透ぬそうとするごとく、人顔をじろりと見
廻まわわし、黙もくつて莞爾にっこりして、また陳立のべたてる。

「さあさあ召して下さい、召して下さいよ。御当地は葉が名物、
津々浦々までも効能が行渡るんでございますがね、こればかりは

看板を掛けちや売らないのですよ。一家秘法の銀流ぎんながし、はい、やい、お立合のお方は御遠慮なく、お持合せのお煙管なり、お簪かんざしなり、これへ出してお験ためしなさいまし、目の前で銀にしてお慰なぐさみ見せましょう、御遠慮には及びません。」

といつてちよいと句切り、煙管を手にして、莨たばこを捻ひねりながら、動静を伺つて、

「さあさあ、誰方どなたでもどうでござんす。」

若い同士耳打をするのがあり、尻つを突ついて促すのがあり、中には耳ひっぱを引張るのがある。止せ、と退しきる、遣着やっける、と出る、ざまあ見ろ、と笑うやら、痛え、といつて身悶みもえするやら、一斉に皆うようよ。有触れた銀流し、汚い親仁おやしなら何事もあるまい、いず

れ器量が操る木偶でくであろう。

「姉ねえや。」

この時、人の背後うしろから呼んだ、しかしこれは、前に黄な声を発して雀海中に入いつてを云々うんぬんしたごとき厭味いやみなものではない。清すずしい活潑なものであつた。

婦人おんなは屹きつと其方そなたを見る、トまた悪怯わるびれず呼懸よけて、

「姉や、姉や。」

「何でございますか、は、私わたくし、」

「指環でも出来るかい。」

「ええ、出来ますとも、何でもお出いしなさいませよ。」

「そう、」と極めてその意を得たという調子で、いそいそと

出て、店前の地へ伝法に屈んだのは、滝太郎である。遊好の若様は時間に関らず、横町で糸を切つて、勇美子の頭飾をどうして取つたか、人知れず掌に弄んだ上に、またここへ来てその姿を顕した。

滝太郎は、さすがに玉のような美しい手を握つて、猶予わず、売物の銀流の粉の包、お験しの真鍮板、水入、絹の切などを並べた女の膝の前に真直に出した。指環のきらりとするのを差向けて、

「こいつを一つ遣つてくんねえな。」

立合の手合はもとより、世擦れて、人馴れて、この榎の下を物ともせぬ、弁舌の爽な、見るから下つ腹に毛のない姉御も驚いて

目を睜みはつた。その容貌ようぼう、その風采ふうさい、指環は紛うべくもない純金であるのに、銀流しを懸けると言うから。

「これですかい。」

「ちよいと遣つておくんな。」

「結構じゃありませんかね。」

「お銭あしがなくなつちやあ不可いけねえか、ここにや持つていねえんだが、可よかつたらつけてくんねえ。後で持たして寄越よこすぜ。」

と真顔でいう、言葉つき、顔形、目の中うちをじつと見ながら、

「そんな吝けちじやありませんや。お望のぞみなら、どれ、附けて上げましょう。」と婦人おんなは切の端に銀流を塗まぶして、滝太郎の手を密そつと取つた。

「ようよう、」とまた後うしろの方で、雀海中に入った時のごとき、奇なる音声を発する者あり。

十二

「可いいぜ、可いいぜ、沢山だ、」と滝太郎はやや有つて手を引こうとする、ト指さきの尖を握つたのを放さないで、銀流きれの切すりつを摺着すりつけながら、

「よくして上げましょう、もう少しですから。」

「沢山だよ。」

「いいえ、これだけじゃあ綺麗にはなりません。」と婦人おんなは急に

止めやそうにもない。

「さあ、大変。」

「お静しずかに、お静しずかに。」

「構わず、ぐつと握るべしさ、」

「しつかり頼むぜ。」

などと立合はわやわやいうのを、澄すましたもので、

「口切くちきりの商あきないでございます、本ほん磨みがきにして、成程これならばと

いう処を見せましょう、これから艶布つやぶきん巾をかけて、仕上げます

から。」

「止せ。」

滝太郎の声はやや激して、振放そうとして力を入れる。押えて

動かさず、

「ま、もうちつと辛抱をなさいましな、これから裏の方を磨きましようね。」

おんな

婦人はこういつつ、ちらちらと目をつけて、指環の形、顔、

みなり

あたま

つまさき

きつ

服装、天窓から爪先まで、屹と見てはさりげなく装うのを、滝

太郎は独り見て取つて、何か憚る処あるらしく、一度は一度、婦

んな

にら

かさな

はばか

り

おのれ

人が黒い目で睨む数の重るに従うて、次第に暗々裡に己を襲うも

きた

ちかづ

かきた

たえがた

のが来り、近いて迫るように覚えて、今はほとんど耐難くなつ

たと見え、知らず知らず左の手が、片手その婦人に持たれた腕に

かか

かか

おんな

懸つて、力を添えて放そうとする。肩は聳え、顔には薄く血を染

めて、滝太郎は眉を顰めた。

ひそ

ひそ

ひそ

そび

「可いつてんない。」

「お待ち！」とばかりで婦人おんなも商売を忘れて、別に心あつて存するごとく、瞳を据えて面おもてを合せた。

ちようどその時、四五十歩を隔てた、夜店の賑かな中を、背後うしろの方で、一声高く、馬の嘶いななくのが、往來の登あしおと音を圧して近々と響いた。

と思うと、滝太郎は、うむ、といつて、振向いたが、吃驚びっくりしたように、

「義作だ、おう、ここに居るぜ。」

「ちよいと、」

「ええ、」

「あれ、」といって振返された手を押えた。指の間には紅くれない一滴、見る見る長くなつて、手首へ掛けて糸を引いて血が流れた。

「姉ねえさん、」

「どうなすつた。」

押魂おつたまげ消た立合は、もう他人ではなくなつて、驚いて声を懸け

る。滝太郎はもう影も見えない。

おんな 婦人は顔の色も変えないで、切きれで、血を押えながら、姉ねえさん被かぶり

のまま真仰まあおの向けに榎を仰いだ。晴れた空も梢こずえのあたりは尋常ただなら

ず、木精こだまの氣勢けはい暗々として中空を籠こめて、星の色も物もの凄すごい。

「おや、おや、おかしいねえ、変だよ、奇体なことがあるものだ

よ。露か知らん、上の枝から雫しずくが落ちたそうで、指ひやが冷りとした

と思つたら、まあ。」

「へい、引搔ひっかいたんじやありませんか。」

「今のが切つたんじやないんですかい。」

「指環で切れるものかね、御常談を、引搔ひっかいたつて、血が流れる
ものですか。」

「さればさ。」

「厭いやだ、私は、」と薄気味の悪そうな、悄しよげた様子で、婦人おんなは人
の目に立つばかり身み顫ふるをして黙つた。榎の下寂せきとして声なし、
いずれも顔を見合せたのである。

「何だね、これは。」

「叱、」と押えながら、島野紳士のセル地の洋服の脇を取って、

——奥を明け広げた夏座敷の灯が漏れて、軒端には何の虫か一個
うなり 唸を立ててはたと打着かつてはまた羽音を響かす、蚊が居ないと

いう裏町、俗にお園小路と称える、遊廓桜木町の居まわりに在り、

夜更けて 門かどすずみ 涼の団扇が招くと、黒板塀の陰から 頬ほおかぶり 被ほ のぬ

つと出ようという凄すこい寸法の処柄、宵の口はかえつて寂ひっそり寞して

いる。——一軒の格子戸を背後へ退すきつた。

これは雀部多磨太ささべといつて、警部長なにかし氏の令息で、島野

とは心こころあい 合あの朋友である。

箱を差したように両人氣はしっくり合ってるけれども、その為ひととなり

人は大いに違つて、島野は、すべて、コスメチック、香水、

シガレット、ステッキ、ゴムぐつ、
巻 蓆、洋杖、護謨靴という才子肌。多磨太は白薩摩しろさつまのや

や汚れたるを裾すそ短みじかに着て、紺染の兵児帯へこおびを前下りの堅かたむすび結むすび、

両方腕うで捲まくりをした上に、裳もすそを撮つまみ上げた豪傑造り。五分刈にし

て芋なのようにころころと肥えた様子は、西郷の銅像にに肖にて、そし

て形なりの低い、年とし紀は二十三。まだ尋常中学を卒業しないが、試験

なんぞをあえて意とするような吝けちなのではない。

島野を引張ひっぱり着けて、自分もその意気な格子戸うしろを後に五六歩。

「見たか。」

島野は瘠やせぎすで体も細く、釣棹つりざおという姿で洋杖ステッキを振った。

「見た、何さ、ありや。門札の傍へ、白で丸い輪を書いたのは。」

「井戸でない。」

「へえ。」

「飲用水の印ではない、何じや、あれじや。その、色事の看板目印というやつじや。まだ方々にあるわい。試みに四五軒見しよう、一所に来う、歩きながら話そうで。まずの、」

才子と豪傑は、鼠のセル地と白薩摩で小路の黄昏たそがれの色に交り、まじくつ着いて、並んで歩く。

ここに注意すべきは多磨太が穿物はきものである。いかに辺幅を修せずといつて、いやしくも警部長の令息で、知事の君の縁者、勇美子には再従兄またいとこに当る、紳士島野氏の道伴みちづれで、護謨靴と歩を揃

えながら、何たる事！ 藁草履わらぞうりの擦切れたので、埃ほこりをはたはた。

歩きながら袂を探つて、手帳と、袂たもと草とくそと一所くたに掴つかみ出した。

「これ見い、」

紳士は軽く目を注いで、

「白墨かい。」

「はははは、白墨じゃが、何と、」

「それで、」と言懸けて、衣兜かかしうずだかに堆たかく、挟かんでおく、手巾ハンケチの白

いので口の辺あたりをちよいと拭ふいた。

「うむ、おりや、近頃博愛主義になつてな、同好の士には皆見せみんなてやる事にした。あえてこの慰なぐさを独擅どくせんにせんのじやで、到いたる処

俺が例の觀察をして突留めた奴の家には、必ず、門札の下へ、これ、ちよいとな。」

「ふん、はてね。」

「貴様今見たか、あれじゃ、あの形じゃ。目立たぬように丸い輪を付けておくことにしたんじゃ。」

「御趣向だね。」

「どうだ、今の家には限らずな、どこでも可いぞ、あの印の付いた家を随時窺って見い。殊に夜な、きつと男と女とで、何かしら、演劇にするようなことを遣つとるわ。」

多磨太は言懸けて北叟笑み、

「貴様も覚えておいてちと慰みに覗いて見い。犬川でぶらぶら散歩して歩いても何の興味もないで、私があの印を付けておく内はのこらず不残趣味があるわい。姦通かな、親々の目を盗んで密会するか、さもなけりや生命がけで惚れたとか、惚れられたとかいう奴等、そして男の方は私等構わんが、女どもはいずれも国色じやで、先生難有ありがたいじやろ。」

ぎろりとした眼で島野を見ると、紳士は苦笑して、

「変ったお慰なぐさみだね、よくそして見付けますなあ。」

「ははあ、なんぞ必ずしも多く勞するを用いん。国民皆墮落だらく、優

柔淫いんぼん奔ほんになつとるから、夜分なあ、暗い中へ足を突つ込んで見い。
 あつちからも、こつちからも、ばさばさと遁にげ出すわ、二足ずつの、
 まるでもつてぼったかまきり 蠩螂かまきりが草の中から飛ぶようじゃ。其そ奴いつの、目
 星ほしい処えりを選えり取とつて、縦横じゆうけいに跡あとを跟つけるわい。ここぞという極ごくめが
 着きいた処えりで、印いんを付つけておくんじや。私わしも初手はつての内うちは二軒三軒と
 心覚こころえにしておいたが、蛇へびの道みちは蛇へびじや、段々だんだんその術じゆつに長ながずるに
 従したがうて、蔓つるを手繰つかるように、そら、そろそろ見付みづかるで。ああ遣遣
 つて印いんをして、それを目的めあてにまた、同好どうこうの士しな、手下てんどもを遣遣わ
 す、巡査じゆんさ、探偵たんていなどという奴やつが、その喜よろこぶことひととおり一通ひととおりでないぞ。
 中には夜行やこうをするのに、あの印いんばかり狙ねらいおる奴やつがある。ぐツす
 り寐ね込んでねこでもいようもんなら、盗賊どろぼうが遁にげ込んだようじゃから、

なぞというて、叩き起して周章あわてさせる。」

「酷ひどいことを！」

島野は今更のように多磨太の豪傑面づらみまもを瞻ぞんつた。

「何なに其等そいらはほんの前芸まへげいじゃわい。一体何じゃぞ、手下どもにも言つて聞かせるが、野郎と女と両方夢中になつとる時は常識を欠いて社会の事を顧みぬじゃから、脱落ぬかりがあつてな、知らず知らず罪を犯しおるじゃ。私わしはな、ただ秘密ひみつということばかりでも一種立派な罪悪と断ずるで、勿論市役所へ届けた夫婦には関係せぬ。人の目を忍ぶほどの中の奴なら、何か後暗いことをしおるに相違ないでの。仔細しさいに觀察くわんさつすると、こいつ禁錮きんこするほどのことはもうても、説諭位はして差支えないことを遣つとるから、掴つかみ出して

警察で発あばかすわい。」

「大變だね。」

「発くとの、それ親に知れるか、亭主に知れるか、近所へ聞える。何でも花火を焚たくようなもので、その途端に光輝天に燦さんらん爛するじゃ。すでにこないだも東の紙屋の若い奴が、桜木町である女と出来合つて、意氣事を極きめるちゆうから、癩しやくに障つてな、いろいろ験しらべたが何事もなくて、為しかた方がない、内に居る母おふくろ親が寺参まいりをするのに木綿を着せて、汝うぬが傾城じよろうかい買をするのに絹を纏まとうのは何たることじゃ、という廉かどをもつて、説論をくらわした。」

「それで何かね、警察へ呼出しかね。」

「ははあ、幾ら俺が手下を廻すとつて、まさかそれほどの事では

交番へも引張り出せないで、一名制服を着けて、洋刀を佩びた
ひっぱ
 奴を従えて店前へ喚き込んだ。
みせさき
わめ

「おやおや、」

「何、喧嘩をするようにして言つて聞かせても、母親は昔氣質
おふくろ
かたぎ
 で、有るものを着んのじやツて。そんなことを構うもんか、こつ
 ちはそのせいで藁草履を穿いて歩いてる位じやもの。」
わらぞうり
は
 さなり、多磨太君の藁草履は、人の跡を跟けるのに躑音を立
あしおと
 てぬ用意である。

「それからの、山田下の植木屋の娘がある、美人じや。貴様知つてるだろう、あれがな、次助というて、近所の鋳物師の倅と出来た。先月の末、闇の晩でな、例のごとく密行したが、かねて目印の付いてる部じやで、密と裏口へ廻ると、木戸が開いていたから、庭へ入った。」

「構わず？」

「なに咎めりや私が名乗つて聞かせる、雀部といえはひとちぢみ一縮じや。貴様もジャムを連れて堂々濶歩するではないか、親の光は七光じやよ。こうやって二人並んで歩けばみんな途を除けるわい。」

島野は微笑して黙つて頷いた。

「はははは、愉快じやな。勿論、淫魔を駆つて風紀を振肅し、且

つ国民の遊惰ゆうだを喝破する事業じゃから、父爺おやじも黙諾の形じゃで、
 手下は自在に動くよ。既にその時もあれじゃ、植木屋の庭へこの
 藁草履を入れて搔廻かきまわすと、果せるかな、
 ばった、
 蠘かまきり螂。」

「まさか、」

「うむ、植木屋の娘と其奴そいつと、貴様、植込の暗い中に何か知らん
 歎いておるわい。地面の上で密会なんぞ、立山と神通川とあつて
 存する富山の体面けがを汚すじゃから、
 ひきずりだ
 引摺出した。」

「南無三寶、はははは。」

「挙動が奇怪じゃ、胡乱うろんな奴等、来い！
 と言うてな、角の交番
 ひっぱ
 へ引張つて行つて、吐せと、
 ぬか
 二ツ三ツ
 よこつつら
 横面をくらわしてから、
 親どもを呼出して引渡した。ははは、元来東洋の形勢日に非なる

の時に当って、植込の下で密会するなんぎ、不埒ふらち至極いたずらじゃからな
 。

「罪なこツたね、悪い悪いたずら戯いたずらだ、」と言懸いたずらけて島野は前後を見て、
 ステッキ
 杖ステッキを突いた、辻の角で歩を停とどめたので。

「どこへ行ゆこうかね。」

榎こずえの梢こずえは人の家の物干の上に、ここからも仰いで見らるる。

「総曲輪へ出て素見ひやかそうか。まあ来いあそこの小間物屋の女房に
 も、ちよいと印が付いておるじゃ。」

「行き届いたもんですな。」

「まだまだこれからじゃわい。」

「さよう、君のは夜が更けてからがおかしいだろうが、私は、そ

の晩おそくなると家うちが妙でないから失敬しよう。」

「ははあ、どこぞ行くんかい。」

「ちよいと。」

「そんなら行ゆけ。だが島野、」と言いなから紳士の顔を、皮の下まで見透かすごとくじろりと見遣つて、多磨太はにやり。

くすぐ
擦こすられるのを耐こらえるごとく、極めて真ま面目じめで、

「何かね、」

「注意せい、貴様の体にも印が着いたぞ。」

「え！」と吃びつくり驚して慌あわてて見ると、上衣うわぎの裾すそに白墨で丸いもの。

「どうじゃ。」

「失敬な、」とばかり苦い顔をして、また手ハンケチ巾ケチを引出した。島

野はそそくさと払い落して、

「止したまえ。」

「ははは、構わん、遣れ。あの花売は未曾有の尤物じゃ、また貴様が不可なければ私が占めよう。」

「大分、御意見とは違えますように存じますが。」

「英雄色を好むさ。」と傲然として言つた。二人が気の合うのはすなわちここで、藁草履と猟犬と用いる手段は異なるけれども、その目的は等しいのである。

島野は氣遣わしそうに見えて、

「まさか、君、花売が処へは、用いまいね、何を、その白墨を。」

「可いわい、一ツぐらい貴様に譲ろう。油断をするな、那奴また

白墨いちまつ 一いち 抹まつに価するんじやから。」

十六

「貴方あなた御存じでございますか。」

「ああ、今のその話の花か。知ってはいない、見たことはないけれどもあるそうだ。いや、有るに違いはないんだよ。」

萱かやの軒端のきばに鳥の声、という侘わびしいのであるが、お雪が、朝、晩、花売かぎに市へ行く、出際と、帰ってからと、二度ずつ襷たすき懸かいで拭ふ込きこむので、朽目くちめに埃ほこりも溜たまらず、冷ひやひや々と濡色ひらくわすらいを見せて涼しげな縁ふさに端居はしいして、柱せなに背せを持たしたのは若山拓ひらくわすらい、煩わづらいのある双ふたの目を塞ふさ

いだまま。

生うまれは東京で、氏素性は明かでない。父も母も誰も知らず、諸国漫遊の途次、一昨年うまれの秋、この富山に来て、旅籠町の青柳あおやぎという旅店に一泊した。その夜賊よのためのにのこらず金子きんすを奪われて、明るあく日の宿料もない始末。七日十日とうりゆう逗留して故郷へ手紙を出した処で、仔細しさいあつて送金の見込はないので、進退谷きわまつたのを、宜よろしゆうがすというような気前の好い商あきんど人はここにはない。ただし地方裁判所の検事に朝野あさのにながしというのが、その為ひととなり人に見る所があつて、世話をして、足を留とどめさせたということを、かつて教おしえを受けた学生は皆知しっている。若山は、昔なら浪人の手習たつき師匠、由緒ある土さむらいがしばし世を忍ぶ生計たつきによくある私塾を開い

た。温厚篤実とくじつ、今の世には珍らしい人物で、且つ博学で、恐らく大学に業を修したのであろうと、中学校の生意気なのが渡りものと侮って冷かしに行つて舌を巻いたことさえあるから、教子おしえこも多く、皆敬い、懐なすいていたが、日も経たたず目を煩いつて久しく癒いえないので、英書けみを閲し、数字を書くことが出来なくなつたので、弟子は皆断つた。直ちに収入がなくなつたのである。

先生むぐら葎ではございますが、庭も少々、裏が山つづき続で風も佳よし、市まちにも隔つて気楽でもございますから御保養かたがたと、たつて勧めてくれたのが、同じ教子の内に頭角を抜いて、代だい稽古げいこも勤こまつた力松という、すなわちお雪の兄で、傍ら家計を支えながら学問をしていたが、適齡に合格して金沢の兵營に入ったのは去年の十

月。

後はこの侘住居わびすまいに、拓たつと阿雪あせつとの二人のみ。拓は見るがごとく目を煩たよりつて、何をする便たよりもないので、うら若い身で病人を達引たてひいて、兄の留守を支えている。お雪は相馬氏の孤児みなしごで、父はかつて地方裁判所に、明決、快断ほまれの誉ある名士であつたが、かつて死刑を宣告した罪囚むすめの女を、心着かず入れて妾しやうとして、それがために暗殺された。この住居すまいは父が静を養うために古屋こおくを購あがなつた別業の荒れたのである。近所に、癩病かつたい医者だと人はいうが、漢方医のある、その隣家となりの荒物屋で駄菓子、油、蚊遣香かやりこうまでも商つている婆さんが来て、瓦鉢かわらばちの欠けた中へ、杉の枯葉を突込つっこんで燻いぶしながら、庭先に屈かがんでいるが、これはまたお雪というといふと、

孫も子も一所にして、乳で育てたもののように可愛くてならない
ので。

一体、ここは旧山の裾の温泉宿の一廓であつた、今も湯の谷と
いう名が残っている。元治年間立山に山崩があつて洪水の時から
はたと湧かなくなつた。温泉の口は、お雪が花を貯えておく庭の
奥の藪やぶのやぶ置だたみの蔭にある洞ほら穴あなであることまで、忘れぬ夢のよう
に覚えている、谷の主とも謂いいつべき居てつきの媼おうな、いつもその
昔の繁華を語つて落涙する。今はただ蚊が名物で、湯の谷といえ
ば、市まちの者は蚊だと思ふ。木屑きくずなどを焼いた位で追着かぬと、売
物の蚊遣香は買わさないで、杉葉すぎつばを搔かいてくれる深切さ。縁側
に両人ふたり並んだのを見て嬉しそうに、

「へい、旦那様知ってるだね。」

十七

「百合には種類が沢山あるそうだよ。」

ささめ、ためとも為朝、はかた博多、鬼百合、姫百合は歌俳諧にも詠よんで、

誰も知つたる花。ほしなし、すけ、てんもく、たけしま、きひめ、

という珍らしい名なるがあり。そめいろ染色は、くれない紅、すかししほり黄透、絞、白百

合は潔く、たもと袂、か鹿の子は愛々しい。さつま薩摩、りゆうきゆう琉球、朝鮮、吉野、

花の名の八重百合というのものもある。と若山は数えて、また紅絹もみの

切きれで美しく目をおさ圧え、おうな媼を見、お雪を見て、楽しげに、且つ語る

よう、

「話の様子では西洋で学問をなすつたそうだし、植物のことにそういう趣味を持つてるなら、私よりは、お前のお花主とくいの、知事の嬢さんが、よく知ってお在いでだろうが、黒百合というのもやつぱりその百合の中の一ツで、花が黒いというけれども、私が聞いたのでは、真まつくろ黒な花というものはないそうさ。」

「はい、」しばらくして、「はい、」媼は返事ばかりでは気が済まぬか、団扇持つ手と顔とを動かして、笑えみかたむ傾むけては打うちうなず領ずく。

「それでは、あの本当はないのでございますか。」とお雪は拓ななめの座を避けて、斜ななめに縁側に掛けている。

「いえ、無いというのじゃあないよ。黒い色はあるまいと思うけれども、その黒百合というのは帯紫暗緑色で、そうさ、ごくごく濃い紫に緑が交まじった、まあ黒いといつても可いのだろう。花は夏咲く、丈一尺ばかり、梢こずえの処つぼみへ荅ほかを持つのは他の百合も違いない。花はな弁びらは六つだ、蕊しべも六つあつて、黄色い粉の袋くつつが附着くつついてる。私が聞いたのはそれだけなんだ。西洋の書物には無いそう
で、日本にも珍めづらしいから。書いたものには、ただ北ほっ国こくの高山
で、人跡ひとあとの到いたらない処ところに在あるといふんだから、昔はまあ、仙人か
神様ばかり眺ながめるものだと思おもった位くらいだろうよ。東京理科大学の標
本室ほんむろには、加賀かかの白はく山さんで取とつたのと、信州しんしゅうの駒こまヶ嶽たけと御おん嶽たけと、
もう一ひと色いろ、北海道ほっかいどうの札幌さっぽろで見み出したのと、四通よっぺんり黒百合くろひゃくごうがある

そうだが、私はまだ見たことはなかった。

お雪さん、そしてその花を欲しいというお嬢さんは、どういう考えで居るんだね。」

「はい、あのこないだからいつでもお頼みなさいますんでございますが、そういう風に御存じのではないのですよ。やっぱり私達が、名を聞いております通、^{とおり}芝居でいたします早百合^{さゆり}姫のことで、富山には黒百合があるツていうから、欲しい、どんな珍しい花かも知れぬ。そして仏蘭西^{フランス}にいらした時、大層御懇意に遊ばした、その方もああいうことに凝っていらつしやるお友達に、由緒を書いて贈りたいといつてお騒^{さわ}ぎなごさいます。お請^{うけあ}合はしませんけれども、黒百合のある処は解っておりますからとそう

言つて参りましたが、太閤記に書いてあります草双紙のお話のうな、それより外当地ここでもまだ誰も見たものはないのでございませうから、どうかしら、怪しいと存じました。それでは、あの、貴あ方なた、処あたに因つて、在る処には、きつと有るのでございますね。」

とお雪は膝に手を置いて、ものを思うごとく、じつと気を沈めて、念を入れて尋ねたのである。その時、白地の浴衣を着た、髪もやや乱れていたお雪の窈やつれた姿は、蚊遣の中に悄しやうぜん然ぜんとして見えたが、面おもてには一種不可言の勇氣よろこびと喜の色かすかが微かすかに動いた。

「おお、燻くすぶる燻くすぶる、これは耐たまりませぬ、お目の悪いに。」

一団の烟けぶりが急うづまに渦うづまいて出るのを、掴つかんで投げんと欲ほつするごとく、婆ばあさんは手を掉ふつた。風があたつて、※とする下火の影かげに、その

髪は白く、顔は赤い。黄昏の色は一面に裏山を籠めて庭に懸れり。

若山は半面に団扇を翳して、

「当地で黒百合のあるのはどこだとか言つたつげな。」

十八

「ねえ、お婆さん。」

お雪は、黒百合が富山にある、場所の答を、婆さんに譲つて、
其方を見た。

湯の谷の主は習わずして自から這般の問に応ずべき、経験と

知識とを有しているので、

「はい、石^{いわたき}滝の奥には咲くそうでござります。」

若山は静かに目を眠つたまま、

「どんな処ですか。」

「蛍の名所なのね。」とお雪は引取る。

「ええ、その入口迄は女子供も参りまする、夏の遊山場でな、お前様。お茶屋も懸^{かか}っておりまするで、素^{そうめん}麵、白玉、心^{ところてん}太な^ど冷^{ひやしもの}物もござりますが、一坂越えると、滝がござります。そ

こまでも夜分参るものは少い位で、その奥山と申しますと、今身を投げようとするものでも恐がつて入りませぬ。その中でなければ無いと申しますもの、とても見られますものではござりますま

い。」婆さんは言つて、蚊遣を煽ぐ団扇の手を留めて、その柄を据つた膝の上にする。

「それでは滝があつて螢の名所、石滝という処は湿地だと見えるね。」

「それはもう昼も夜も真暗でござります。いかいこと樹が茂つて、満月の時も光が射すのじゃござりませぬ。

一体いつでも小雨が降つておりますような、この上もない陰気な所で、お城の真北まつきたに当りますそうな。ちようどこの湯の谷とは両方の端で、こつちは南、田※たんぼも広々としていつも明うあかるござりますほど、石滝は陰気じやで、そのせいでもござりましようか、評判の魔所で、お前様、ついしか入つたものの無事に帰りました

例はためしござりませぬよ。」

「その奥に黒百合があるんですツて、」お雪は婆さんの言を取つて、ことば確めてこれを男に告げた。

若山はややあつて、

「そりやきつとあるな、その色といい、形といい、それからその昔からの言い伝つたえで、何か黒百合といえは因縁事の絡まつた、美しい、黒い、艶つやを持った、紫色の、物凄ものすごい、堅い花のように思われるのに、石滝という処は、今の談はなしでは、場処も、様子もその花があつて差支えないと考える。もつとも有ることはあるのだから、大方黒百合が咲いてるだろう。夏かげつ月花ありという時節もちょうど今なんだけれども、何かね、本当にあるものなら、お前さん、そ

の嬢さんに頼まれたから、取りにでも行こうというのか。」と落
着いて尋ねて、渠かれは氣遣わしく傾いた。

「……………」お雪はふとその答に支つかえたが、婆さんはかえって猶た
予めらわぬ。

「滅相な、お前様、この湯の谷の神様が使わつしやる、白い鳥が
守ればといつて、若い女が、どうして滝まで行ゆかれますものか。

取りにでも行く気かなぞと、問わつしやるさえ気が知れませぬて
や。プツ、」と、おどけたような顔をして婆ばばは消えかかった蚊遣
を吹いた。杉葉の瓦かわらばち鉢ばちの底に赤く残つて、烟けぶりも立たず燃え尽
しぬ。

「お婆さん、御深切ありがとに難有ありがとう。」

とうっかり物思おもいに沈んでいたお雪は、心着いて礼をいう。

「あいあい、何の。もう、お大事になされませ、今にまたあの犬を連れられた可いや厭らしいお客がござって迷惑なら、私わし家とこへ来て、屈かがんで居いつさい。どれ、店を開けておいて、いかいこと油を売ったぞ、いや、どつこいな。」と立つ。

十九

帰りたくなると委細ぼぼは構あわず、庭口から、とぼとぼと戸外おもてへ出て行く。荒物屋の婆ばあはこの時分せわから忙せわしい商売がある、隣の医者いしやが家うちばかり昔の温泉宿ゆやどの名残なごりを留とどめて、徒いたらに大おお構がまえの癖くせに、

昼も夜も寂莫^{せきばく}として物音も聞えず、その細君が図抜けて美しい
 といつて、滅多に外へ出たこともないが、向うも、隣も、筋向い
 も、いずれ浅間で、豆洋燈^{まめランプ}の灯が一ツあれば、襖^{ふすま}も、壁も、飯^め
^{しびつ}櫃^{びつ}の底まで、戸外^{おもて}から一目に見透かされる。花売の娘も同じこ
 と、いずれも夜が明けると富山の町へ稼ぎに出る、下駄の齒入、
 氷売、団扇売、土方、日傭^{ひやとい}取などが、一廓^なを作した貧乏町。思い
 思い、町々八方へ散^{ちら}ばつてるのが、日暮になれば総曲輪から一筋
 道を、順繰りに帰つて来るので、それから一時騒^{ひとしきり}がしい。水を汲^くむ、
^{きゆうり}胡瓜^{きゅうり}を刻む。俎^{まないた}板^{いた}とんとん庖丁^{ほうちょう}チヨキチヨキ、出放題^{でうた}な、生^な
^{まあくび}欠伸^{あぐら}をして大歎息^{たいたんそく}を発する。翌^{あくるひ}日の天気^{あま}の噂^{うわさ}をする、お題目
 を唱える、小児^{こども}を叱る、わツという。戸外^{おもて}では幼い声で、——蛍

来い、山見て来い、行燈あんどんの光をちよいと見て来い！

「これこれ暗くなつた。天狗様が攫さらわつしやるに寝つしやい。」
と帰途かえりがけに門かどぐち口で小児おどを威しながら、婆さんは留守にした己おのれの店の、草鞋わらじの下を潜くぐつて入つた。

草履を土間に脱いで、ひとわたり渡店の売物に目を配ると、真中まんなかに釣つるした古いブリキの笠の洋燈は暗いが、駄菓子にも飴あめにも、鼠は着かなかつた、がたりという音もなし、納戸の暗がりあかりは細流のような蚊の声で、耳の底に響くばかりなり。

「可恐おそろしい唸うなりじやな。」と呟つぶやいて、一間けんぐち口の隔へだての障子の中へ、腰を曲げて天窓あたまから入ると、

「おう、帰つたのか。」

「おや。」

「酷い蚊ひどだなあ。」

「まあ、お前様めえさま。まあ、こんな中に先刻さつきにからござらせえたか

。」

「今しがた。」

「暗いから、はや、なお耐たまりましねえ。いかなこツても、勝手に分らねえけりや、店の洋燈でも引外ひっぱずしてござれば可よいに。」

深切こごとを叱言こごとのごとくぶつぶつ言つて、納戸の隅の方をかさかさごそりごそりと遣る。

「可いいから、可いいから。」といつて、しばらくすると膝を立直した氣勢けはいがした。

「近所の静まるまで、もうちつと灯あかしを点けないでおけよ。」

「へい。」

「覗のぞくと煩うるさいや。」

「それでは蚊帳を釣つて進ぜましょ。」

「何、おいら、直ぐ出掛けようかとも思つてるんだ。」

「可いようにさっしやりませ。」

「ああ、それから待ちねえこうだと、今に一人此家ここへ尋ねて来るものがあるんだから、頼むぜ。」

「お友達かね。お前様は物事ものずきじゃで可よいけれど、お前様のような方のお附合なさる人は、から、入つてしばらくでも居られます所じゃあござりませぬが。」

言いも終らず、快活に、

「気扱いがいる奴じやねえ、きたね汚おんなえ婦人よ。」

「おや！」と頓興とんきよにいった、婆ばばの声の下にくすすくと笑うのが

聞える。

「婆ちゃん、おくんな。」と店先で小児こどもの声、繰返して、

「おくんな。」

「おい。」

「しずか静に………」といて、暗中の客は寝転んだ様子である。

婆ばばが帰かえつた後あと、縁側えんがわに身をみ開ひらいて、一人は柱はしらに凭よつて仰向あおむき、

一人は膝ひざに手を置いて俯向うつむいて、涼しい暗い処ところに、白地の浴衣ゆいで居た、お雪は、突然驚おどいたようにいつた。

「あれ星が飛びましたよ。」

湯の谷もここは山の方はたへ尽はずれの家で、奥庭おくにわが深いから、傍はたの騒さわしいのにもかかわらず、森しんとした藪やぶ蔭かげに、細い、青い光物ひかりものが見えたので。

「ああ、これから先はよくあるが、淋しいもんだよ。」

と力ちからなげに団扇うちあし持もつた手を下くだげて、

「今も婆さんが深切しんせつに言いつてくれたが、お雪さん、人が悪いとい
う処ところへ推おして行くのは不可いけ。何も、妖物ばけものが出るの、魔まが掴つか

むのということ、目の前にあるとも思わないが、昔からまるで手も足も入れない処じゃあ、人の知らない毒虫が居て刺そうも知れず、地の工合で踏むと崩れるようなことがないとも限らないから。」

「はい、」

「行く気じゃあるまいね。」とやや力を籠めて確めた。

「はい、」と言懸けて、お雪は心に濟まない様子で後を言い残して黙ったが、慌しく、

「蛭です。」

衝と立った庭の空を、つらつらと青い糸を引いて、二筋に見えて、一つ飛んだ。

「まあ、珍らしい、石滝から参りました。」

この辺あたりに螢は珍らしいものであつた、一つ一つ市中へ出て来るのは皆石滝から迷うて来るのだといひ習わす。人に狩り取られて、親がないか、夫がないか、孤みなしご、孀婦やもめ、あわれなのが、そことも分さまよかず彷徨つて来たのであろう。人可懐なつかしげにも見えて近々と寄つて来る。お雪は細い音ねに立てて唇を吸つて招きながら、つかつかと出て袂たもとを振つた、横よこぎる光の螢の火に、細い姿は園生そのうにちらちら、髪も見えた、灰ほのかに雪なす顔を向けて、

「団扇を下さいなちよいと、あれ、」と打つ。螢は逸それて、若山が上の廂ひさしに生えた一八いちはつの中に軽かろく留まつた。

「さあ、団扇、それ、ははは……大きな女の嬰兒あかさんだな。」と

立ちも上らず坐つたまま、縁側から柄ばかり庭の中へ差向けたが、
 交際つきあい際さいにも蛍かといつて発奮はつぜんみはせず、動悸どうきのするまで立廻つて、
 手をすべ迂まがらした、蛍は、かえつてその頭の上を飛ぶものを、振仰い
 で見ようとせぬ、男ひややの冷かさ。見当違いに団扇を出して、大き
 な嬰兒あかんぼだといつて笑つたが、声も何となくもの淋しい。お雪は草
 の中にすつくと立つて、じつと男の方を視ながめたが、爪つまさき先を軽く、
 するすると縁側に引返ひっかえして、ものありげに——こうつんとした
 事は今までにはなかつたが——黙つて柄の方から団扇を受取り、
 手を返して、爪つまだ立つて、廂を払うと、ふツと消えた、光ひるがえは翻した
 団扇の絵の、滝の上を這ほうてその流ながれも動く風情。

お雪みまもは瞻ほつつて、吻ほつと息を吐ついて、また腰を懸けて、黙つて見て

いた、目を上げて、そと男の顔を透かしながら、腰を捻^ねじて、斜^{ななめ}に身を寄せて、件^{くだん}の団扇を、触らぬように、男の胸の辺りへ出して、

「可愛いでしょう、」といった声も尋^た常^だならず。

「何か、石滝の蛍か、そうか。」と行って若山は何ともなしに微^ほ笑^{ほえ}んだが、顔は園生の方を向いて、あらぬ処を見た。涼しい目はぱつちりと開いていたので、蛍は動いた。団扇は揺れて、お雪の細い手は震えたのである。

「歩きますわ、御覧なさいな。」と沈んだ声でいいながら、お雪は打動かす団扇の蔭から、儂はかない一点の青い灯ともしで、しばしば男の顔を透かして差さ覗しのぞく。

男はこの時もう黙ってしまい、顔を背けて避けようとするのを、また、

「御覧なさいな、」と、人知れずお雪は涙なみだぐ含んで、見る見る、男の顔の色は動いた。はツと思うと、

「止せ！」

若山は掌てのひらをもてはたと払ったが、端はしなく団扇を打って、柄は力のない手を抜けて、庭に落ちた。

「あれ、」といってお雪は顔を見ながら、と胸を衝ついて背後うしろに退すさ

る。

渠は膝を立直して、

「見えやあしない。」

「えええ！」

「僕の目が潰れたんだ。」

言いさま整然として坐り直る、怒気満面に溢れて男性の意気熾に、また仰ぎ見ることが出来なかつたのであろう、お雪は袖で顔を蔽うて俯伏になった。

「どうしたならどうしたと聞かき、容体はどうです目が見えない

か、と打出して言えば可い。何だつて、人を試みるようなことをして困らせるんだい、見えない目前めまきへ蛍なんか突出して、綺麗だ、動く、見ろ、とは何だ。残酷だな、無慈悲じゃあないか、星が飛んだの、蛍が歩くのと、まるでなぶ颯るようなもんじゃあないか。女の癖に、第一失敬ださ。」

と、声を鋭く判然はつきりと言い放つ。言葉の端には自おのずから、かかる田舎にこうして、女の手てに養われていらるべき身分ではないことが、響いて聞える。

「そんな心こころ懸がけじゃあ盲目めくらの夫の前で、情郎いろおとこと巫山ふざけ戯かねはしないだろう。厭いやになつたらさつぱりと突出すが可いじゃあないか、あわれな情なさけないものを捕つかまえて、苛いじめるなあ残酷だ。また僕

も苛められるようなものになったんだ、全くのこツた、僕はこんな所にお前様まえさんほどの女が居ようとは思わなんだ。気の毒なほど深切にされる上に、打明けていえば迷わされて、疾はやく身を立てよう、行末を考えようと思いながら、右を見ても左を見ても、薬屋の金持か、せいぜいが知事か書記官の居る所で、しかも荒物屋の婆さんや近所の日傭取ひやといにばかり口を利いて暮すもんだからいつの間にか奮発気がなくなつて、引込思案になる所へ、目の煩わづらいを持込んで、我ながら意気地はない。口へ出すのも見みともないや。お前さんに優しくされて朝晩にや顔を見て、一所に居るのが嬉しくツて、恥も義理も忘れたそうだ。そつちじやあ親あにはなし、兄あにさんは兵に取られてゐるしよ、こういつちやあ可笑おかしいけれども、ただ僕たよりを頼

にしている。僕はまた實際杖つえとも柱とも頼まれてやる気だもんだから、今日が見えなくなつたといつちやあ、どんなに力を落すだろう。お前さんばかりじゃない、人のことより僕だつて大變だ。死んでも取返しをつかないほど口惜しいから、心にだけでも盲目めくらになつたと思うまい、目が見えないたあいうまいと、手探てさぐりの真似もしないで、苦しい、切ない思おもいをするのに、何が面白くツてそんな真似をするんだな。されるのはこつちが悪い、意気地なしのしみつたれじゃアあるけれども。」

お雪の泣声が耳に入ると、若山は、口に蓋ふたをされたようになつて黙つた。

「お雪さん。」

ややあつて男は改めて言つて、この時はもう、声も常の優しい落着いた調子に復し、

「お雪さん、泣いてるんですか。悪かった、悪かった。真まことを言え
ばお前さんに心配を懸けるのが気の毒で、無暗むやみと隠していたのを、
つい見透かされたもんだから、罪なことをすると思つて、一刻に
訳も分らないで、悪いことをいった。知つてる、僕は自分極ぎめか
も知らないが、お前さんの心は知つてる意つもりだ。情無い、もう不かたわ
具根性こんじょうになつたのか、僻ひがみも出て、我儘わがままか知らぬが、くさく

さするので飛んだことをした、悪く思わないでおくれ。」

その平生ふだんおこないの行は、蓋し無言にして男の心を解くべきものがあつたのである。お雪は声を呑んで袂に食着いていたのであるが、優しくされて気も弛ゆるんで、わつと嗚咽おえつして崩折くずおれたのを、慰められ、賺すかされてか、節も砕けるほど身に染みて、夢中に躪にじり寄る男の傍そば思わずすが継る手を取られて、団扇は庭に落ちたまま、お雪は、潤んだ髪あなたの濡れた、恍惚うっとりした顔を上げた。

「貴方、」

「可いよ。」

「あの、こう申しますと、生意気だとお思いなさいましょうが、」
「何、」

「お気に障りましたことは堪忍して下さいまし、お隠しなさいませ
 お心を察しますから、つい口へ出してお尋ね申すことも出来ま
 せんし、それに、あの、こないだ総曲輪でお転びなすった時、ど
 うも御様子が解りません、お湯にお入りなさいましたとは受取り
 難にくうございますもの、往来ですから黙って帰りました。が、それ
 から氣を着けて、お知合のお医者様へいらつしやるといふのは嘘
 で、石滝のこちらのお不動様の巖窟いわやの清水へ、お頭つむりひやを冷しにおい
 でなさいますのも、存じております。不自由な中でございますか
 ら、お怨み申しました処で、唯ただいま今はお薬を思うように差上げま
 すことも出来ませんが、あの……」

と言懸けて身を正しく、お雪はあたかも誓うがごとくに、

「きつとあの私が生命いのちに掛けましても、お目の治るようになして上げますよ。」と仇気あどけなく、しかも頼母たのもしくいつたが、神の宣託でもあるように、若山の耳には響いたのである。

「気張っておくれ、手を合わして拜むといつても構わんな。実に、何だ、僕は望のぞみがある、惜おしい体だ。」といつて深く溜息を吐ついたのが、ひしひしと胸こたに応えた。お雪は疑わず、勇ましげに、

「ええ、もう治りますとも。そして目が開いて立派な方におなりなさいましても、貴方、」

「何だ。」

「見棄てちゃあ、私は厭いや。」

「こんな世話になつた上、まだ心配を懸けさせる、僕のような

ものを、何だつて、また、そういうことを言うんだらう。」

「ふ、」と泣くでもなし、笑うでもなし、きまり極悪げに、面を背けて、目が見えないのも忘れたらしい。

「お雪さん。」

「はい。」

「どうしてこんなになつたらう、僕は自分に解らないよ。」

「私にも分りません。」

「なぜだろう、」

莞爾にっこりして、

「なぜでしょうねえ。」

表の戸をがたりと開けて、横柄に、澄して、

「おい、」

二十三

声を聞くとお雪は身を窘めて小さくなった。

「居るか、おい、暗いじゃないか。」

「唯今、」

「真暗まつくらだな。」

例の洋杖ステッキをこつこつ突いて、土間に突立つったつたのは島野紳士。

今めかしくいうまでもない、富山の市まちで花を売る評判の娘に首つ丈であったのが、勇美姫おん目を懸けさせたまうので、毎日のよ

うに館やかたに来る、近々と顔を見る、口も利くというので、思おもいが可おそ恐ろしくなると、この男、自分では業なり平ひらなんだから耐たまらない。

花屋の庭は美しかろう、散歩の時は寄つてみるよ、情いろ郎おとこは居いないか、その節邪魔にすると棄置かんよ、などと大上段おおに斬きり込んで、臆おく面めんもなく遊あそびに来て、最初は娘の謂いうごとく、若山を兄だと思つていた。

それ芸げい妓しやの兄あにさん、後家の後見、和尚めいの姪ひにて候ものは、油断ゆだんがならぬと知つていたが、花売の娘だから、本当の兄もあるだろうと、この紳士大ぬかり。段々ふら様子が解つてみると、瞋しん恚いが燃ゆるようなことになつたので、不埒ふらちでも働はたらかれたかのごとく憤り、この二三日は来るごとに、皮肉を言つたり、当あて擦こすつたり、つん

と拗ねてみたりしていたが、今夜の暗いのはまた格別、大變、吃驚、畜生、殺生なことであつた。

かつてまた、白墨狂士多磨太君の説もあるのだから、肉が動くばかりしばしも耐らず、洋杖を握占めて、島野は、

「暗いじゃあないか、おい、おい。」とただ忙る。

「はい、」と潤んだ含声の優しいのが聞えると、※と摺附木を摺る。小さな松火は真暗な中に、火鉢の前に、壁の隅に、手拭の懸つた下に、中腰で洋燈の火屋を持つたお雪の姿を鮮麗に照し出した。その名残に奥の部屋の古びた油団が冷々と見えて、突抜けの縁の柱には、男の薄暗い形が顕われる。

島野は睨み見て、洋杖と共に真直に動かず突立つ。お雪は

小洋燈に灯を移して、摺附木を火鉢の中へ棄てた手で鬢びんの後毛おくれげを搔か上げざま、向直ると、はや上あがり櫃がまち、そのまま忙せわしく出迎え
た。

ちよいと手を支たいて、

「まあ、どうも。」

「……………」島野は目の色も尋常ただならず、尖とがった鼻を横に向けて、
ふんと呼吸いきをしたばかり。

「失礼、さあ、お上りなさいまし、取散らかしまして、汚穢むそうご
ざいますが、」と極きまり悪わるげに四辺あたりをみまわすのを、後うしろの男に心を取ら
れてするように悪わる推ずいする、島野はますます憤いらって、口も利かず。

(無言なり。)

「お晩おそうございしましたのね。」と何やらつかぬことを言つて、為し方かたなしにお雪は微笑ほほえむ。

「お邪魔をしましたな。」という声ぎつすりとして、車の輪きの軌きむがごとく、島野は決する処あつて洋杖ステッキを持換えた。

「お前ねえ、」

邪氣おのず自はだえから膚を襲うて、ただは濟みそうにもない、物ありげに

思い取られるので、お雪は薄気味悪く、易やすからぬ色をして、

「はい。」

「あのな、」と重々しく言い懸けて、じろじろと顔を見る。

「どうぞ、まあ、」

「入っちゃあおられん。」

「どちらへか。」

「なあに。」

「お急ぎでございますか。」と畳に着く手も定まらない。

「ちよつと出てもらおう。」

「え、え。」

「用があるんだ。」

二十四

「後を頼むとつて、お前めえさま様、どこさ行ゆかつしやる。」

ちよいとどうぞと店みせさき前から声を懸けられたので、荒物屋の婆ばば

は急いで蚊帳を捲つて、店へ出て、一枚着物を着換えたお雪を見た。繻子の帯もきりりとして、胸をしつかと下メ《したじめ》に女扇子を差し、余所行の装、顔も丸顔で派手だけれども、気が済まぬか悄然しよんぼりしているのであつた。

「お婆さん、私は直帰じきるんですが、」

「あい、」

「どうぞねえ、」と何やら心細そうさとで気に懸かかると、老人の目も敏さとく、

「内方にや御病気なり、夜分、また、どうしてじゃ。総曲輪へ芝居にでも誘われさつせえたか。はての、」

と目を遣やると、片蔭に洋服の長い姿、貧乏町の埃ほこりが懸るといっ

たように、四辺あたりを払つて島野たたりがイむ。南無三悪なむさんい奴と婆おばさんは察したから、

「何にせい、夜分出歩で行くのは、若い人に良くないてや、留守の氣を着けるのが面倒めんどうなではないけれども、大概たいていなら止よにさつしやるが可よかろうに。」

と目で知らせながら、さあらず言う。

「いえ、お召めいなんでしょう。四十物町あえものちようのお邸やしから、用があるツて、そう有おっしや仰おんるのでございますから。」

「四十物町のお花主とくいというと、何、知事様のお邸やしだツけや。」

「お嬢様お嬢様が急に、御用ごようがおあんなさいますツて。」

「うんや、善よくないてや。お前まへ様さまが行く氣きでも、私わしが留とどめます。」

お嬢様の御用とつて、お前、医者じゃあなし、駕籠屋じゃあなし、差迫つた夜の用はありそうもない。大概の事は夜が明けてからする方が仕損じが無いものじゃ。若いものは、なおさら、女じゃでの、はて、月夜に歩いてさえ、美しい女の子は色が黒くなるとい
う。」

「はい、ですけれども。」

「殊に闇^{やみ}じゃ、狼^{あつ}が後^{あと}を跟^つけるでの、たつて止^やめにさつせえよ。」
と委細は飲込んだ上、そこらへ見当を付けたので、婆さんは聞えよがし。

島野は耐えかねてずつと出て、老人^{としより}には目も遣らず、

「さあ、」

「……………」黙って俯向く。

「おい、」とちと大きくいつて、洋杖ステツキでこと、こと、こと。

お雪は覚悟をした顔を上げて、

「それじゃあお婆さん。」

「待たつせえ、いや、もし、お前様、もし、旦那様。」

顧みもせず島野は、己おれほどのものが、へん、愚民にお言葉を遣

わさりようや！

婆さんも躍気やつきになって、

「旦那様、もし。」

「おれか。」

「へい、婆ばばが願ねがいでござります、お雪が用は明日のことになされ

下さりませ。内には目の不自由な人もござりますし、四十物町までは道も大分でござりますで。」

「何だ、お前は。」

「へい、」

「さあ、行こう。」

お雪は黙って婆さんの顔を見たが、詮せんかた方なたなげで哀あわれである。

「お前様、何といつても、」と空しく手を掉ふつて、伸上った、婆は縫すがりつ着ついても放したくない。

「知事様のお使だ。」と島野が舌打して言った。

これが代官様より可恐おそろしく婆の耳には響いたので、目を睜みはつて押黙る。

その時、花屋の奥で、凜りんとして澄あんで、うら悲しく、

くもはしんれいによこたわつていえいづくにかある

雲 横 秦 嶺 家 何 在

ゆきはらんかんをようしてうますすまず

雪 擁 藍 関 馬 不 前

と、韓かん湘しやうが道術をもつて牡丹花ぼたんかの中に金字あらわで躪あしたという、
一聯れんの句を口吟くちずさむ若山の声が聞えて止やんだ。

お雪はほろりとしたが、打仰いで、淋しげに笑つて、

「どうぞ、ねえ。」

二十五

恩になる姫様ひいさま、勇美子が急な用さというに悖さい得ないで、島野

に連出されたお雪は、屠所としよの羊あゆみの歩あゆみ。

「どういう御用なんでしょう。いつも御鼻ごひいき尻しりになりますけれども、つい、お使なんぞ下さいましたことはございませんのに、何でしょうね、馴なれませんこツてすから、胸がどきどきして仕様がありません。」

島野は澄ひややまして冷ひややかに、

「そうですか。」

「貴下あなた御存じじやあないのですか。」

「知らないね。」と氣取った代だいまやく脉みやくが病症をいわぬに齊ひとしい。

わざと打解けて、底氣味の悪い紳士の胸中を試みようとしたお雪は、取とりつく附島もなく悄しおれて黙った。

二人は顔を背け合つて、それから総曲輪へ出て、四十物町へ行くこうとする、杉垣が挟さしはさんで、樹が押被おつかぶさつた径こみちを四五間。

「兄さんに聞いたら可よかろう。」島野は突然こう言つて、ずつと寄つて、肩を並べ、

「何もそんなに胸までどきつかせるには当らない、大した用でもなからうよ。たかがお前この頃情いひと人が出来たそうだね、お目出度いことよ位なことを謂いわれるばかりさ。」

「厭いやでございます。」

「厭だつて仕方がない、何も情人が出来たのに御祝儀をいわれたつて、弱ることはないじゃあないか。ふん、結構なことさね、ふん、」

と呼吸いきがはずむ。

「ほんとうでございますか。」

「まったくよ。」

「あら、それでは、あの私わたくしは御免蒙こうむりますよ。」

お雪は思切たちどつて立停たちどまった、短くさし込んだ胸の扇もきりりとする。

「御免蒙こうむるツて、来ないつもりか。おい、お嬢様お嬢様が御用ごようがあるツて、僕わががわざわざ迎むかいに来たんだが、御免蒙こうむる、ふん、それで可いいのか。——御免蒙こうむる——」

「それでも、おなぶり遊ばすんですもの、私わたくしは辛わづうございます。」

「可いいさ、来なけりや可いいさ、そのかわり、お前まへ、知事様のお邸

とは縁切だよ。宜^よかろう、毎日の米の代といつても差支えない、大切なお花主^{とくい}を無くする上に、この間から相談のある、黒百合の話も徒^ふ為^いになりやしないかね。仏蘭西^{フランス}の友達に贈るのならばつて、奥様も張込んで、勇美さんの小遣にうんと足して、ものの百円ぐらいは出そうという、お前その金子^{かね}は生命^{いのち}がけでも欲^{ほし}いのだろう、どうだね、やつぱり御免を蒙りまするかね。」といって、にやにやと笑いきり。

お雪は深い溜^{ため}息^{いき}して、

「困^こつちまいました、私はもうどうしたら可いのでございませうねえ。」

詮^す方^がなげに見えて島野に継^つぎ^がるようにいった。お雪は止^やむことを

得ず、その懐に入つて救われんとしたのであろう。

紳士は殊の外その意を得た趣で、

「まあ、一所に來たまえ。だから僕が悪いようにやしないというんだ。え、どこかちよつと人目に着かない処で道寄をしようじやあないか、そしていろいろ相談をするとしよう。またどんな旨い話があるかも知れない。ははは、まずまあ毎日汗みずくになつて、お花は五厘なんていつて歩かないでも暮しのつくこつた。それに何さ、兄さんとかいう人に存分療治をさせたい、金子かねも自おのずから欲ほしくなくなるよといったような、ね、まあまあ心配をすることはないよ、來たまえ！」といつて、さつさつと歩ある行き出す。お雪は驚いて、追継るよ用にしてい、

「貴下、どちらへ参るんでございます。」

二十六

「心得てるさ、ちつとも気あつかいのいらないうちに万事取計らうから可いよ。向うが空屋あきやで両隣はたけが畠つんぼでな、聾つんぼの婆さんが一人で居るといふ家が一軒、……どうだね、」と物凄ものすごいいことをいう。この紳士は権柄けんぺいづくにおためごかしを兼ねて、且つ色男なんだから極めて計らいにくいのであります。

勇美子の用でも何でもない。大方こんなこととは様子にも悟っていたが、打着けに言われたので、お雪も今更ぎよつとした。

「路みちも遠うございますから、晩おそくなりましょう、直ぐあの、お邸の方へ参つちやあ不可いけませんか。」

「何、遠慮することはないさ。」

これだもの。……………

「いいえ、」といったばかり。お雪は遁にげ帰かえる機きつ掛かけもなし、声を立てる数すうでもなし、理窟わけをいう分ゆにも行かず、急なかにお腹が痛むでもない。手もつけられねば、ものも言われず。

径こみちややその半なかばを過ぎて、総曲輪なまこに近くなると、島野しまのは莞爾にこやかに見返つて、

「どうだ、御飯でも食べて、それからその家うちへ行くとしようか。」
お雪はものもいい得ない。背後うしろから大きな声で、

「奢おごれ奢おごれ、やあ、棄置あきらかれん。」と無遠慮むゑんりょに喚わめいてぬいと出た、この野面のづらを誰たれとかする。白薩摩びやくさかもの汚ひとえれた単衣ひとえ、紺染こんぞめの兵へこ子おび帯び、いが栗ぐり天窓あたま、団栗どんぐり目め、ころころと肥あにえて丈たけの低ひきが、藁わら草履ぞうりを穿うがちたる、

豈あにそれ多磨太たまごにあらざらんや。
島野しまのは悪い処ところへ、という思おも入いれあり。

「おや、どちらへ。」

「ははあ、貴公きこうと美人びじんとが趣おもく処ところへどこへなと行くで。奢おごれ！

大分おほいほツついたで、夕飯ゆふめしの腹はらも、ちようど北山きたやまとやらじゃわい。」

「いいえさ、どこへ行くんです。」と島野しまのは生真面目きまじめになつて押おえようとする、と肩かたを揺ゆつて、

「知事ちじが処ところじゃ。」

「今ツからね。」

「うむ、勇美子さんが来てくれいと言うものじゃでの。」

「へい、」と妙な顔をする。

多磨太、大得意。

「何よ、^{なん}また道寄も遣らかすわい。向うが空屋で両隣は畠だ、聾^{ばあ}の婆が留守をしとる、ちつとも氣遣^{きづかい}はいらんのじゃ、万事私^{わし}が心得た。」

「驚いたね。」

「どうじゃ、恐入ったか。うむ、好事魔多し、月に村雲じゃろ。」

「はははは、感多少かい、先生。」

「何もその、だからそういったじゃアありませんか。君、僕だけ

は格別で。」

「豈あにしからん、この美肉をよ、貴様一人で賞しょう 翫がんしてみい、たちまち食傷して生命かかわに係るぞ。じゃから私わしが注意して、あらかじめ後つを尾けて、好意一足の藁草履もたを齎きたらし来つた訳じゃ、感謝して可いな。」

島野は苦々しい顔かおつき色で、

「奢ります、いずれ奢るから、まあ、君、君だつて、分つてましよう。それ、だから奢りますよ、奢りますよ。」

「豚とんにく肉は不可いかんぞ。」

「ええ、もうずっとそこん処はね。」

「何、貴様のずつとはずつと見当が違ちがうわい。そのいわゆるずつ

とというのは軍鶏しやもなんじやろ、しからずんば鰻うなぎか。」

「はあ、何でも、」と頷うなずくのを、見向みむかもしないで。

「非あらず、私わしが欲ほする処ところはの、熊ゆうにあらず、羆ひにあらず、牛ぎゆう豚とん、

軍鶏しやもにあらず、鰻うなぎにあらず。」

「おやおや、」

「小羊こやぎの肉にくよ！」

「何なにですつて、」

「どうだ、ぼった、かまきり 蝸かまきり 螂らう、」いいながら、お雪ゆきと島野しまのを交かわる交がわ

る、笑顔みまわで、みまわしても豪傑ごうていだから睨にらむがごとし。

島野は持余した様子で、苦り切つて、ただ四辺あたりを見廻すばかり。

多磨太は藁草履の片足を脱いで、砂だらけなので毛脛けすねを擦こすつた。

「蚋ぶよが螫さす、蚋ぶよが螫さすわ。どうじゃ、歩き出そうでないか。堪たまらん、こりや、立つとツちやあ埒明らちかん、さあ前さきへ行いね、貴公。美人は真まんなか中よ、私は殿わししんがりを打うつじや、早うせい。」

島野は堪たまりかねて、五六歩かたわらよ傍へ避けて目で知らせて、

「ちよいと、君、雀部さん、ちよいと。」

「何じゃ、」と裾つかを掴み上げて、多磨太はずかずかと寄る。

島野は真顔になつて、口説くように、

「かねて承知なんじゃあないか、君、ここは一番ひとつ粹を通して、ず

つと大目に見てくれないじゃあ困りますね。」と情ななさけそうにいった。

「どうするんかい、」

「何さ、どうするツて。」

「貴公、どこへしよびくんじや、あの美人をよ、巧く遣りおるのうう、」と団栗目を細うして、変な声で、えへ、えへ、えへ。

「しよびくたつて何も君、まったくさ、お嬢さんが用があるそう
だ。」

「嘘を吐けい、誰じやと思うか、ああ。貴公目下のこの行為は、
公の目から見ると拐かどわか帯かしじやよ、詐偽さぎじやな。我輩警察のため
に棄置かん、直ちに貴公のその額へ、白墨で、輪を付けて、交番

へ引張^{ひっぱ}るでな、左様^{さよ}思え、はははは。」

「串^{じょうだん} 戯^ごをいっつちやあ不可^{いけ}ません。」

「何、構わず遣^{しやく}るぞ。癪^{しやく}じゃ、第一、あの美人は、私^{わし}が前^{さき}へ目を着^くけて、その一挙一動を探^{たづ}つて、兄^{あに}じゃというのが情^{いろおとこ}男^{おとこ}なこ

とまで貴公^{きこう}にいうてやつた位^{くらい}でないかい。考^{かん}えてみい、いかに慇^{いん}懃^{ぎん}を通^とじようといつて、貴公^{きこう}ではと思^{おも}うで、なぶる氣^きで打^う棄^{ちや}

つておいたわ。今夜^{こんや}のように連^{れん}出^{しゅ}されては、こりやならんわい。

向^{むこうづら} 面^{めん}へ廻^{まわ}つて断^た乎^ずとして妨^{たが}害^{がい}を試^しみる、汝^{なんじ}にジヤムあれば我^{われ}

に交^{まじ}番^{ばん}ありよ。来^きるか、対^{あいて}手^てになるか、来^きい、さあ来^きい。両^{りやう}雄^{ゆう}並^びび立た^たず、一^{いっ}番^{ぱん}勝^{しょう}敗^{ぱい}を決^{けつ}すべい。」

と腕^{うで}まくりをして大^{だい}乗^{じやう}氣^き、手^てがつけられたものではない。島^{しま}野^の

もここに至つて、あきらめて、ぐツと碎け、

「どうです、一ツ両雄並び立とうではありませんか、ものは相談だ。」と思切つていう。多磨太は目を睜みはつて耳そばだを聳そてた。

「ふむ、立つか、見事両雄がな。」

「耳を、」肩を取つて、口をつけ、二人は木この下蔭ささやきに囁ささを交え、手を組んで、短いのと、長いのと、四脚を揃かすえたのが仄かすかに見える。お雪は少し離れて立つて、身を切裂かるる思いである。

当座の花だ、むずかしい事はない、安やすどまり泊ひきずりこへでも引摺ひきずりこ込ひきずりこんで、裂くことは出来ないが、美人たほの身体からだを半分ずつよ、の、の、の令息むすこと、の、の親類とで慰むのだ。土民の一少婦、美なりといえどもあえて物の数とするには足らぬ。

「ね、」

(笑つて答えず。)

多磨太は頷うなずいて身を退のいて、両雄いい合わせたように屹きつとお雪を見返つた。

こみちかぶ
徑みちに被かぶさつた樹々の葉に、さらさらと渡つて、裙すそから、袂たもとから
ひやひや
冷々ひやひやと膚はだに染み入る夜の風は、以心伝心二人の囁ささやを伝えて、お
雪は思わず戦慄ぞつとした。もう前後あとしきも弁わえず、しばらくも傍そばには
居たたまらなくなつて、そのまま、

「島野さん、お連つれ様もお見え遊あそばしたし、失礼いたしますから、
お嬢様にはどうぞ、」も震え声で口の裡うち、返事は聞きつけ
ひつかえ
引返ひつかえそうとする。

「待ちなさい、」

「待て、おい、おい、おい、待て！」といいさま追すがいすが追すがいて、多磨太は警部長の令息であるから傍若無人。

「あれ、」と遁にげにかかる、小腕こがいなをむずと取られた。形なりも、振ふりも、紅くれない、白脛しらはぎ。

二十八

「躓もがくない、ぼった、わはは、はは、」多磨太は容赦なくそのいわゆる小羊ひつたを引立てた。

「あれ、放して、」

た。

「さあ、行こう、何も冥途めいどへ連れて行くんじやあないよ。謂わばまあ殿様のお手が着くといったようなものさ。どうして雀部わしや私を望んだって、花売なんぞが、口も利かれるもんじやあない、難ありがたなく思うが可いさ。」

法学生の墮落したのが、上部を繕つてる衣を脱いだ狼と、虎とで引ひっぱさ挟み、縛つて宙に釣つたよりは恐い手籠てごめの仕方。そのまま歩き出した、一筋路わか。少い女を真まんなか中に、漢おのこが二人要こそあれと、総曲輪の方から来かかつて歩を停め、間あわいを置いて前まえ屈みにかがなつて透かしたが、縷子しゆすの帯をぎゆうと押えて吞込んだという風で、立直つて片蔭に忍んだのは、前夜榎えのきの下で、銀ぎんながし流の粉を

売つた婦人おんなであつた。

お雪は呼吸いきさえ高うはせず、氣を詰めて、汗になつて、

「まあ、この手を放して、ねえ、手を放して、」と漫そぞろである。

「可いわ、放すから遁にげちやあならんぞ、」

「何、逃げれば、捕つかまえる分のことさ、」

あらかじめ因果を含めたからと、高を括くくつて、手を放すと半ば

夢中、身を返して湯の谷の方へ走ろうとする。

「やい、汝うぬ！」

藁草履を蹴立てて飛着いて、多磨太が暗まぎれに搔か掴つかむ、鉄か

拳なこぶしに握らせて、自若として、少しも騒さわがず、

「色男！」といつて呵から々からと笑つたのは、男の声。呆れて棒立に

なつた多磨太は、余りのことにその手を持ったまま動かず、ほとんど無意識に窘すくんだ。

「島野か、そこに居るのは。島野、おい、島野じゃないか。」

紳士はぎよつとして、思わず調子はずれに、

「誰だ、誰です。」

「己おいらだ、滝だよ。おい、ちよいと誰だか手を握った奴があるぜ。

串じょうだん 戯 じゃあない、気味が悪いや、そういつてお前放さしてく

んな。おう、後生大事と握つてやがらあ。」

先刻さつき荒物屋の納戸で、媼おうなと蚊の声の中に言ことばを交えた客はすなわ

ちこれである。媼は、誰とも、いかなる氏素性の少年とも弁えぬ

が、去年秋銃獵の途みちすがら次、渋茶を呑みに立寄つて以来、婆や、

家は窮屈うちで為方しかたがねえ、と言つては、夜昼くつろ寛ぎに来るので、里の乳母のように心安くなつた。ただ風変りな貴公子だとばかり思つてはいるが、——その時お雪が島野に引出されたのを見て、納戸へ転ころげこ込んで胸を打つて歎くので、一人の婦人おんなを待つといつて居合わせたのが、笑いながら駆出して湯の谷から救すくいに来たのであつた。

二十九

子爵千破矢滝太郎は、今年が十九で、十一の時まで浅草たわらま俵町ちの質屋の赤煉瓦あかれんがと、屑屋くずやの横窓との間の狭い路地を入つた

突当りの貧乏長家に育つて、納豆を食い、水を飲み、夜はお稲荷いなりさんの声を聞いて、番太の菓子かしを嚙かつた江戸児えどっこである。

母親と祖父じいとがあつて、はじめは、湯島三丁目に名高い銀杏いちょう

の樹に近い処に、立派な旅籠屋兼帯はたごやの上等下宿、三階造づくりの館やかたの内

に、地方から出て来る代議士、大商人おおあきんどなどを宿して華美はでに消光くら

していたが、滝太郎が生れて三歳みつになつた頃から、年紀としはまだ二

十四であつた、若い母親が、にわかにわかに田舎ものは嫌いだ、虫が好

かぬ、一所の内に居ると頭痛がすると言ひ出して、地方の客の宿

泊をことごとく断つた。神田の兄哥あにい、深川の親方が本郷へ来て旅

籠を取る数すうではないから、家業はそれつきりである上に、俳優やくしや

狂くるいを始めて茶屋小屋入ばいりをする、角力取すもうとり、芸人を引張込ひっぱりこんで

雲井を吹かす、酒を飲む、骨牌かるたをもてあそぶ、爪弾つまびきを遣る、洗髪あらいがみの意気な半纏はんてんぎ着で、晩方からふいと家うちを出ては帰らないという風。

滝太郎の祖父じいは母親には継父であつたが、目を閉じ、口を塞ふさいでもの言わず、するがままにさせておくと、瞬く内に家も地所も人手に渡つた。謂いうまでもなく四人の口を過くごしかねるようになつたので、大根畠に借家して半歳ばかり居食いぐいをしたが、見す見す体に鉤かんなを懸けて削り失なくすようなものであるから、近所では人目がある、浅草へ行つて蔵前辺に屋台店でも出してみよう、煮込おでんの汁つゆを吸つても、渴かつえて死ぬには増ましだという、祖父の繰廻まわしで、わずか残つた手廻てまわりの道具を売つて動うごきをつけて、その俵町の

裏長屋へ越して、祖父は着馴きなれぬ半纏はんてんぎ被かに身を窶やつして、孫の手を引きながら佐竹ヶ原から御徒町おかちまちあたり辺の古道具屋を見歩いたが、いずれも高直たかねで力及ばず、ようよう竹町の路地の角に、黒板塀くっつに附着くっつけて売物という札を貼はつてあつた、屋台を一個ひとつ、持主の慈悲で負けてもらつて、それから小道具を買揃えて、いそいそ俵町に曳ひいて帰ると、馴れないことで、その辺の見計いはしておかなかつた、件くだんの赤煉瓦と横窓との間の路地は、入口が狭いので、どうしても借家まで屋台を曳ひきこ込むことが出来ないのです、そのまま夜よ一ひ夜置とよいたために、三晩とは措おかず盗まれてしまったので、祖父は最後の目的の水の泡になつたのに、落胆して煩わづい着いたが、滝太郎の舌が廻まつて、祖父ちゃん祖父ちゃん、というのを聞いて、そ

れを思出に世を去つた。

後は母親が手一ツで、細い乳を含めて遣る、幼児が玉のよう
な顔を見ては、世に何等かの大不平あつてしかりしがごとき母親
が我慢の角も折れたかして、涙で半襟の紫の色の褪せるのも、汗
で美しい襦袢じゆばんの汚れるのも厭いとわず、意とせず、些々ささたる内職を
して苦勞をし抜いて育てたが、六ツ七ツ八ツにもなれば、膳ぜんも別
にして食べさせたいので、手内職では追お着ツかないから、世話をす
るものがあつて、毎日吾妻橋を越して一製糸場あるに通つていた。

留守になると、橋手前には腕わん白盛ぱくざかりの滝太一人、行儀をしつ
けるものもなし、居まわりが居まわりなんで、鼻緒を切らすと跣は
足だしで駆歩かけある行く、袖が切れれば素す裸ばで躍つ出る。砂を掴つかむ、小砂

利を投げる、溝泥どぶどろを搔廻かきまわす、喧嘩けんかはするが誰も味方をするものはない。日が暮れなければ母親は帰らぬから、昼の内は孤みなしご児同様。親が居ないと侮あやつて、ちよいと小遣てあいでもある徒あは、除物のけものにして苛いじめるのを、太腹ふとツばらの勝気あつめでもものともせず、愚あにい図々々いうと、まわらぬ舌で、自分が仰向あおむいて見るほどの兄あにい哥いに向つて、べらぼうめ！

三十

その悪いたずら戯ざといつたらない、長屋内は言うに及ばず、横町裏町まで匆はね廻まわつて、片時の間も手足を静しづとしてはいないから、余り

その乱暴を憎らしがる女房達は、金魚だ金魚だとそういつた。蓋けだし美しいが食えないという意だこころそうな。

滝太はその可愛い、品のある容子ようすに似ず、また極めて殺さつ伐ばつで、ものの生命いのちを取とることを事ことともしない。蝶とんぼ、蜻蛉あひ、蟻みみず、蚯蚓みみず、目を遮おさるに任まかせてこれを屠殺とこつしたが、馴なるるに従したがうて生類せいりゆうを捕獲とらするすさみに熟じやくして、蝙蝠こうもりなどは一たび干棹ほしざおを揮ふるえば、立たちどこ処ろに落ちたのである。虫も蛙となり、蛇となつて、九ツ十ウに及ぶ頃は、薪雜棒まきざつぼうで猫を撃うつて殺すようになった。あのね、ぶん撲なぐるとね、飛着ひくよ。その時は何でもないので、もうちツと酷ひどくくらわすと、丸ツこくなつてね、フツてんだ。呻うなつておつかねえ目をするよ、恐おそいよ。そこをも一ツ打ぶつところりと死ぬしぬさ。でも

ね、坊はね、あのはじめの内は手が震えてね、そこで止しちやツたい。今じゃ、化猫わけなしだと、心得澄したもので。あれさ妄も念うねんが可恐おそろしい、化けて出るからお止しよといえば、だから坊はね、おいらのせいじゃあないぞツて、そう言わあ。滝太郎はもの命を取る時に限らず、するな、止せ、不可いけないと人のいうことをあえてする時は、手を動かしながら、幾たびも俺おいらのせいじゃないぞと、口癖のようにいつも言う。

井戸端で水を浴びたり、合長屋の障子を、ト唾つばで破いて、その穴から舌を出したり、路地の木戸を石碓いしころでこつこつやつたり、柱を釘で疵きずをつけたり、階子はしごを担いで駆出すやら、地踏鞴じだんだを踏ふんで唱歌を唄うやら、物真似は真ま先つさきに覚えて来る、喧嘩あいての対手は

泣かせて帰る。ある時も裏町の人数八九名に取占められて路地内へ遁げ込むのを、容赦なく追詰めると、滝は廂を足場にある長屋の屋根へ這上つて、瓦を捲くつて投出した。やんちゃんもここに至つては棄置かれず、言付け口をするも大人げないと、始終蔭言ばかり言つていた女房達、耐りかねて、ちと滝太郎を窘なめるようにと、夜に入つてから帰る母親に告げた事がある。

しかるに、近所では美しいと、しおらしいで評判の誉物だつた母親が、毫もこれを真とはしない。ただそうですか済みませんとばかり、人前では当らず障らずに挨拶をして、滝や、滝やと不断の通り優しい声。

それもその筈、滝は他に向つて乱暴狼藉を極め、憚らず乳

こ
 虎の威を揮うふるにもかかわらず、母親の前では大おおな声おきでもものも言
 わず、灯ひともしころ頃ひともしころ辻の方に母親の姿が見えると、駆出して行って迎
 えて帰る。それからあるは畳を歩行くあしおと音もしない位、以前のおもかげ梯の
しの俣ひきだしばるる鏡台の引出の隅に残った猿屋の小楊枝こようじの尖さきで字をつい
 て、膝も崩さず母親の前にかしこま畏かしこまつて、二年級のおさらいをするのが
 聞える。あれだから母親は本当おつかさんにしないのだと、隣近所では切齒はがみ
 をしてもどかしがった。

学校は私立だったが、先生はまたなく滝太郎を可愛がって、一
 度同級の者とつかみあい掴つかみあい合あひをして遁にげて帰って、それツきり、登校し
 ないのを、先生がわざわざ母親の留守むかいに迎むかいに来て連れて行って、
 そのために先生は他ほかの生徒ほかの父兄等に信用を失って、席札くしは櫛くしの

齒の折れるように透いて無くなつたが、あえて意にも留めないで、ますます滝太郎を愛育した。いかにか見処みどころがあつたのであろう。

三十一

しかるに先生は教うるにいかなる事をもつてしたのであるか、まさかに悪智慧わるぢえを着けはしまい。前年その長屋の表町に道普請があつて、向側へ砂利を装もり上げたから、この町を通る腕車荷車は不の残路地口こらずの際を曳ひいて通ることがあつた。雨が續いて泥濘ぬかるみになつたのを見澄して、滝太が手で掬すくい、丸太で掘つて、地面を窪くぼめておき、木戸に立つて車の来るのを待つていと、窪くぼみは雨あめだま

溜り^りで探りが入らず、来るほどの車は皆輪が喰い込んで、がたりとなる。さらぬだに持余すのにこの 陥^{おとしわな} 罊^なに懸^{かか}つては、後へも前^{さき}へも行くのではないから、汗になって弱るのを見ると、会心の笑^{えみ}を洩^もらして滝太、おじさん押してやろう、幾干^{いくら}かくんねえ、と遣^はつたのである。自から頼む所がなくなつてはさる計^{はかりごと}もしはせまい、憎まれものの殺生^{ずき}好はまた相応した力もあつた。それはともかく、あの悪智慧のほどが可恐^{おそろ}しい、行末が思い遣られると、見るもの聞くもの舌を巻いた。滝太郎がその挙動を、鋭い目で角の屑屋の物置みたような二階の格子窓に、世^{はよ}を憚^{おそ}る監視中の顔をあてて、匍^{はらばい}匍^いになつて見ていた、窃^{せつとう}盗、万引、詐^{さぎ}偽もその時^は二^は十^はま^ちでに数^{すう}を知らず、ちようと先月までくらい込んでいた、巢^は鴨

が十たび目だという凄^{すご}い女、渾^{あだな}名を白魚のお兼^{ひなた}といつて、日向^{ひなた}で
 は消えそうな華^{きやしや}奢^{しや}姿。島田が黒いばかり、透通^{とおと}るような雪の肌
 の、骨も見え透いた美しいのに、可恐^{おそろ}しい悪党。すべて滝太郎の
 立居^{ふるまい}拳^{こぶし}動^{うご}に心を留めて、人が爪^{つま}弾^{はじ}をするのを、独り遮^{かざ}って賞^ほめ
 ちぎっていたが、滝ちゃん滝ちゃんといつて可愛^{かわい}がること^{ひととお}一
 通^りでなかつた処^{ところ}。……

滝太郎が、その後^{のち}十一の秋、母親^{みまか}が歿^ぬると、双葉^{ふたば}にして莨^からざ
 ればなどと、差配^{さばい}佐次兵衛、講釈^{こうしゃく}に聞いて来たことをそのまま言
 出して、合^あ長屋^{ちやうや}が協議^{ぎぎ}の上、欠けた火鉢^{ひばち}の灰^{あし}までをお錢^{あし}にして、
 それで出^{だし}合^あの涙^{なみだ}金を添^そえて持^もたせ、道^{みち}で鳶^{とび}にでも攫^{さら}われたら、
 世^よの中^{なか}が無^な事^じで好^い位^{くらい}な考^くえで、俵^{はた}町^{まち}から滝太郎^{たきたろう}を。

おととい
 一昨日来るぜい、おさらばだいと、高慢な毒口を利いて、ふいと小さなものが威張つて出る。見え隠れにあとを跟けて、その夜金竜山の奥山で、滝さん餓別せんべつをしようと言つて、お兼が無名指べにさしからすつと抜いて、滝太郎に与えたのが今も身を離さず、勇美子ゆうみこが顔を赤らめてまで迫つたのを、頑として肯きかなかつた指環ゆびわなのである。

その時、奥山おくやまで餓はなむけした時、時ならぬ深夜の人影を吠ほえる黒犬があつた。滝さんちよいとつかまえて御覽とお兼がいうから、もとより俵町界限かいはいの犬は、声を聞いて逃げた程の悪戯いたずら小憎。御意は可よしで、飛鳥のごとく、逃げるのを追懸おっかけて、引捕ひつとらえ、手もなく頸うなじの斑ふちをつかつかいで、いつか継父が兎こを縊くびり殺した死骸しがいの紫色の

頬が附着くつついていた処だといつて今でも人は寄附かない、口ハ台の
 際まで引摺ひきずつて来ると、お兼は心得いて粹いな浴衣に半纏ひつを引かけた
 姿でちよいと屈かがみ、掌てのひらで黒斑なを撫なでた、指環ひらめが閃ひらめいたと見ると、
 犬の耳が片一方、お兼の掌てのひらの上へ血だらけになつて乗つたのであ
 る。人間でもわけなしだよ、と目前奇特を見せ、仕方を教え、針
 のごとく細く、しかも爪ほどの大おおきの恐るべき鋭利なヒ首ナイフを仕懸
 けた、純金の指環を取つて、これを滝太郎の手に置くと、かつて
 少年の喜ぶべき品、食物なり、何等のものを与えてもついで嬉し
 がつた験ためしのない、一つはそれも長屋中うちに憎まれる基もとであつた滝太
 郎が、さも嬉しげに見て、じつと瞶みめた、星のような一まなこ双の眼まなこの
 異かがや様な輝きは、お兼が黒い目で睨にらんでおいた。滝太郎は生れながら

にして賊性を亨けたのである。諸君は渠がモウセンゴケに見惚れた勇美子の黒髪から、その薔薇の薫のある蝦茶のりボン飾を掏取って、総曲輪の横町の黄昏に、これを掌中に弄んだのを記憶せらるるであろう。

三十二

「滝さん、滝さん、おい、おい。」

「私かい、」と滝太歩を停めて振り返ると、木蔭を径へずツと出たのは、先刻から様子を伺っていた婦人である。透かして見るより懐しげに、

「おう来たのか、おいら約束の処へ行ってお前の来るのを待つて
 たんだけれども、ちよいと係かかり合あいで歩ぶに取られて出て来たんだ。
 路みちは一筋だから大丈夫だとは思つたが、逢い違わなければ可いと
 思つての。」

「そう、私わたしは先刻さつきからここに居たんだよ。路先を切つて何か始
 まつたから、田舎は田舎だけに古風なことをすると思つてね、旅
 稼びかせぎの積つもりでぐツとお安やすく真ま中なかへ入つてやろうかと思つてる処
 へ、お前さんがお出いでだから見ていたの。あい、おかしくツて可よう
 ござんした。ここいらじゃあ尾おひれ鰭ひれを振つて、肩かた肱ひじを怒いからしそう
 な年上としうへなのを二人まで、手もなく追お帰かえしたなあ大出来だ、ちよ
 いと煽あおいでやりたいわねえ、滝さんお手柄。」

「馬鹿なことを謂つてらあ、何もこつちが豪いんじやあねえ。島野ツてね、あのひよる長え奴が意気地なしで、知事を恐がつていやあがるから、そこが附目よ。つけめ俺おいらに何か言われちやあ、後で始末が悪いもんだから、同類の芋虫まで、自分で宥なだめて連れて行つたまでのこつた。むこう敵が使つてる道具を反あべこべ対にこつちで使われたんだね、別なこたあねえ、知事様がお豪いのでござりますだ。」といつて事も無げに笑つた。

「それじやあ滝さん、毒をもつて毒を制するとやらいうのかい。」

「姉ねえや、お前めえ学者めえだなあ、」

「旦那ごじやうだん、御串戯ごじやうだんもんですよ。」と齊ひとしく笑つた。

身装みなりは構かまわず、絞しぼりのなえたので見すばらしいが、鼻筋の通つた、

めじり
 眈の上つた、意気の壮さかんなることその眉宇びうの間に溢あふれて、ちつとも
 めげぬ立振舞。わざと身を窶やつしてさるもののように見らるるのは、
 前さきの日総曲輪ぼけえのきの化ばけえのき 榎えのきの下で、銀流しを売つていた婦人おんなであつ
 て——且わかつ少わかかりし時、浅草で滝太郎に指環を与えた女賊白魚の
 お兼である。もとより掏すり賊の用に供するため、自分の持物だつ
 た風変りな指環であるから、銀流を懸けろといつて滝太が差出し
 たのを、お兼は何条見免みのがすべき。
 はじめは怪あやしみ、中なかは驚あやいて、果はてはその顔を見定めると、幼おさな
 立ちに覚えのある、裏長屋の悪いたずら戯小憎、かつてその黒い目で睨にら
 んでおいだ少年の懐しさに、取つた手を放さないでいたのであつ
 たが。十年ばかりも前のこと、場所も意外なり、境遇も変つてい

るから、滝太郎の方では見忘れて、何とも覚ええず、底気味が悪かつた。

横町の小児が足捌の縄を切払うごときは愚なこと、引外して逃るはずみに、指が切れて血が流れたのを、立合の衆が怪んで目を着けるから、場所を心得て声も懸けなかつたほど、思慮の深い女賊は、滝太郎の秘密を守るために、仰いでその怪みを化榎に帰して、即時人の目を瞞めたので。

越えて明くる夜、宵のほどさえ、分けて初更を過ぎて、商人の灯がまばらになる頃は、人の氣勢も近寄らない榎の下、お兼が店を片附ける所へ、突然と顕れ出で、いま巻納めようとする莫塵の上へ、一束の紙幣を投げて、黙っててくんねえ、人に言っ

ちや悪いぜとばかり、たちまち暗澹たる夜色は黒い布の中へ、機敏迅速な姿を隠そうとしたのは昨夜の少年。四辺に人がないから、滝さんといって呼留めて、お兼は久ぶりでめぐりあったが、いずれも世を憚って心置のない湯の谷で、今夜の会合をあらかじめ約したのであった。

三十三

二人は語らい合つて、湯の谷の媪が方へ歩き出した。

お兼は四辺を、あたりみまわして、

「そりやそうと、酷い目に逢いそうだった姉さんはどうしたの。

「なんだかお前さんと、あの肥ふとった、」

「芋虫か、」

「え、じゃあ細長い方は蚯蚓みみずかい。おほほほ、おかしいねえ、

まあ、その芋虫と、蚯蚓とお前さんと。」

「厭いやだぜ、おいら虫じゃあねえよ。」と円つぶらに目を睜みはつてわぎと真

顔になる。

「御免なさいまし、三人巴ともえになつてごたごたしてるので、つい見

はぐしたよ、どうしたろう。」

「何か、あの花売の別嬪べっぴんか。」

「高慢なことをいうねえ、花売だか何だか。」

「うむ、ありやもう疾とつくに歸つた。俺おいら可いいてことよと受合つて

来たけれども、不安心だと見えてあとからついて来たそうで、老と人しよりは苦勞性だ。挨拶あいさつだの、礼だの、誰方どなただのと、面倒臭くせえから、ちようど可よい、連立つれだたして、さっさと歸かえりちまった。」

「何しろ可よかったねえ。喧嘩けんかになつて、また指環ゆびわでも揮ふりまわ廻まわしはしないかと、私ははらはらして見ていたんだよ。ほんとお前まへさん、あれを滅多めったに使つかつちやあ悪わるうござんす。」

「蠅まむしの針はりだ、大事だいじなものだ。人に見みせて堪たまるもんか、そんなどじなこたあしやしないよ。」

「いかがですか、こないだ店みせ前まへへ突出とつしゅつしたお手際てまへでは怪あやしいもんだよ。多勢たせい居ゐる処ところじゃあないかね。」

「誰たれがまた姉あねや、お前まへだと思おもうもんか。あの時はどきりとした、

ほんとうだ、縛られるかと思つた。」

「だからさ、私に限らず、どこにどんな者が居ないとも限らないからね、うっかりしちやあ危険けんのおんだよ。」

「あい、いいえ、それが何だ、知事のお嬢さんがね、いやに目をつけて指環を取換とっかえようなんて言うんだ。何だか機からくり関を見られるようで、気がさすから、目立たないのが可かろう、銀流でもかけておけど、訳はありやしねえ、出来心で遣つたんだ、相済みせん。」といつて、莞爾かんじとして戯たわむれにその頭つむりを下くだげた。

「沢山たんとお辞儀をなさい、お前さん怪けしからないねえ。そりや惚ほれてるんだらう、恐入おそつた？」

「おお、惚れたんだか何だか知らねえが、姫ひいさま様の野郎が血道を

ないんだってこツた。弱虫ばかり、喧嘩の対あいて手にするほどのものも居ねえ処だから、その中へ踏込んで、骨のある妖物ばけものにでも、たんかを切つてやろうと、おいら何なんするけれども、つい忙せわいもんだから思つたばかり。」

「まあ、大層お前さん、むずかしいのね、忙あいって何の事だい。」

「だから待ちねえ、見せるてこツた、うんと一ひとつ番喜ばせるものがあるんだぜ。」

「ああ、その滝さんが見せるというものは、何だか知らないが見たいものだよ。」

滝太郎はかつて勇美子に、微細なるモウセンゴケの不思議な作用を発見した視力を誉えられて、そのどこで採獲たかの土地を聞かれた時、言葉を濁して顔の色を変えたことを——前回に言った。

いでそのモウセンゴケを渠が採集したのは、湯の谷なる山の裾ひあたりの日ひあたり当に、雨の後ともなく常にじとじと、濡れた草が所々にある中においてした。しかもお雪が宿の庭続つづき、竹藪たけやぶで住居すまいを隔てた空地、直ちに山の裾が迫る処、その昔は温泉ゆが湧出たという、ほらあな洞穴のあたりであった。人は知らず、この温泉ゆの口の奥は驚くべき秘密を有して、滝太郎が富山において、随処その病的の賊心ほしいままを恣にした盗品を順序よく並べてある。されば、お雪が情人に貢

ぐために行商する四季折々の花、美しく薫かおりのあるのを、露も溢こぼさず、日ごとにこの洞穴の口浅く貯えておくのは、かえつて、滝太郎が盗利品に向つて投げた、花束であることを、あらかじめここに断つておかねばならぬ。

さて、滝太郎がその可恐おそろしい罪を隠蔽いんぺいしておく、温泉ゆの口の辺あたりで、精細かた式のごときモウセンゴケを見着けた目は、やがてまた自分がそこに出没する時、人目のありやなしやを熟じっと見定める眼まなこであるから、己おのれの視線の及ぶ限かぎりは、樹も草も、雲の形も、日の色も、従うて蟻の動くのも、露のこぼるるのも知らねばならないので、地平線上に異状を呈した、モウセンゴケの作用は、むしろ渠たやすがいまだかつて見も聞きもしなかつたほど一層心着くに容易たやすい

であった。あたかも可し、さる必用を要する渠が眼は、世に有数の異相と称せらるる重瞳ちようどうである。ただし一双ともにそうではない、左一つ瞳ひとみが重かさっている。

そのせいであつたらう。浅草で母親が病んで歿みまかる時、手を着いて枕まくら許もとに、衣帯を解かず看護した、滝太郎の頸うなじを抱いて、

（お前は何でもしたいことをおしよ、どんなことでもお前にはきつと出来るのだから、）といったツきり、もう咽喉のどがすすうと
なつた。

その上また母親はあらかじめ一封の書を認したためておいて、不断滝太郎から聞き取つて、その自分の信用を失うてまで、人の忌嫌う我児を愛育した先生に滝太郎の手から託さするように遺言して、

（私が亡くなった後で、もしも富山からだといつて人が尋ねて来たら、この手紙を渡して下さい。開けちやあ不可いけません、来なかつたらばそのまま破つて下さい、きつとお見懸け申してお頼み申します。）と言わせたのである。

やや一月ばかり経つと、その言こと違たがわず果して富山からだといつて尋ねて来たのが、すなわち当時の家令で、先代に託されて、その卒去のちの後、血統というものが絶えて無いので、三年間千破矢家を預あずかつていて今も滝太郎を守立ててる竜川守膳たつかわしゆぜんという漢学者。

守膳は学校の先生から滝太郎の母親の遺書を受取つたが、その時は早や滝太郎が俵町を去つて二月ばかり過ぎた後であつたので、

泰山のごとく動かず、風采ふうさい、千破矢家の傳ふたるに足る竜川守膳が、顔の色を変えて血眼になつて、その搜索を、府下における区々の警察に頼み聞えると、両国回向院えこういんのかの鼠小憎の墓はかのまゑ前に、居眠いねむりをしていた小憎があつた。巡行の巡查あやしが怪ひつたんで引立て、最寄の警察で取調べたのが、俵町の裏長屋に居たそれだと謂つて引渡された。

田舎は厭いやだと駄々を捏こねるのを、守膳が老功なだで宥すかめ賺し、道中土を踏ふまささず、動殿ゆるぎのお湯殿子調ゆどのこしらべひめ姫めという扱あいで、中仙道は近道だが、船でも陸おかでも親不知おやしらずを越さねばならぬからと、大事を取つて、大廻おおまわりに東海道、敦賀、福井、金沢、高岡、それから富山。

三十五

湯の谷の神の使だという白鳥しろからすは、朝月夜にばかり稀まれに見るものがあると伝えたり。

ものの音はそれではないか。時ならず、花屋が庭つづきの藪やぶの際に、かきこそ、かきこそと響ひびきを伝えて、ややありて一面に広々として草まばらな赤土の山の裾すそへ、残月の影に照らし出されたのは、小さい白い塊である。

その描けるがごとき人の姿は、薄うすりと影を引いて、地の上へ黒い線が流るるごとく、一文字に広場を横切つて、竹藪を離れたと

思うと、やがて吹流しに手拭を被^{かぶ}つた婦人^{おんな}の姿が顕^{あらわ}れて立つたが、
 先へ行く者^ゆのあとを拾^{ひろ}うて、足早^{あそ}に歩^{ある}行^いいて、一所^{いこ}になると、影
 は草の間に隠^{かく}れて、二人は山腹^{やまはら}に面^{むか}した件^{くだん}の温泉^ゆの口^{くち}の処^{ところ}で立^{たちど}
 停^まつた。夏の夜はまだ明^あけやらず、森^{しん}として、樹^{ねぐら}の枝^{えだ}に鳥^{とり}が埒^{らち}
 を踏^{ふみ}替^かえる音^ねもしない。

「跟^ついておいで、この中^{うち}だ。」と低^こ声^{こゑ}でいつた滝太郎^{たきだいらう}の声^{こゑ}も、四^あ
 辺^{あたり}の寂^{せき}莫^{ぼく}に包^かまれて、異^い様^{さま}に聞^きえる。

そのまま腰^{こし}を屈^{かが}めて、横^{よこ}穴^{あな}の中^{うち}へ消^きえるよう。

お兼^{かね}は抱^{かか}着^かくがごとくにして、山腹^{やまはら}の土^{つち}に手^てをかけながら、体^{てい}
 を横^{よこ}たえ、顔^{かほ}を斜^{ななめ}にして差^さ覗^{のぞ}いて猶^{なほ}予^よつた。

「滝^{たき}さん、暗^{くら}いじゃあないか。」

途端に紫の光一点、※と響いて、早附木を摺った。洞の中は広く、滝太郎はかえつて寛いで立っている。ほとんどその半身を蔽うまで、堆い草の葉活々として冷たそうに露を溢さぬ浅翠の中に、萌葱、紅、薄黄色、幻のような早咲の秋草が、色も鮮麗に映つて、今踏込むべき黒々とした土の色も見えたのである。

「花室かい、綺麗だね。」

「入口は花室だ、まだずつと奥があるよ。これからつき当つて曲るんだ、待つといで、暗いからな。」

燃え尽して赤い棒になつた早附木を棄てて、お兼を草花の中に残して、滝太郎は暗中に放れて去る。

お兼は気を鎮めて洞の口に立っていたが、たちまち慌しく呼ん

だ。

「ちよいと……ちよいと、ちよいと。」

音も聞えず。お兼は尋常ただならず声を揚げて、

「滝さん、おい、ちよいと、滝さん。」

「おう、」と応こたえて、洞穴の隅の一方に少年の顔は顛れた。早く既に一個角燈に類した、あらかじめそこに用意をしてあるらしい灯ともしを手ともしにしている。

お兼は走り寄つて、附くっ着いて、

「恐しい音がする、何だい、大変な響だね。地面を抉えぐり取るような音が聞えるじゃあないか。」

いかにも洞の中は、ただこれ一条の大瀑布ばくふあつて地の下に漲みなぎる

がごとき、すさま凄じい音が聞えるのである。

滝太郎は事もなげに、

「ああ、こりやね、神通川の音と、立山の地獄谷の音が一所になつて聞えるんだつて言うんだ。地底じぞこがそこらまで続いているんだつて、何でもないよ。」

神通は富山市の北端を流るる北陸ほくろく七大川の随一なるものである。立山の地獄谷はまた世に響いたもので、ここにその恐るべき山さん川せん大叫喚の声を聞くのは、さすがに一個婦人の身に何でもない事ではない。

お兼は顔の色も沈んで、滝太郎にひしと摺すり寄りながら、
「そうかい、川の音は可いいけれど地獄が聞えるなんざきざ気障ざだねえ。

ちよいと、これから奥へ入ってどうするのさ、お前さんやりやしないか。私や殺されそうな気がするよ、不気味だねえ。」

「馬鹿なことを！」

三十六

「いいえ、お前さん、何だかひととおり一通じやあないようだ、ひとごろ人殺あねごもしかねない様子じゃあないか。「さすがの姉御も洞中ほらなかの闇やみに処して轟ごうごう々たる音の凄すさまじさに、奥へ導かれるのを逡巡しりごみして言ったが、尋常ただならぬ光景に感ずる余り、半ばは滝太郎に戯れたので。」

「おいで、さあ、夜が明けると人が見るぜ。出後れた日にやあ一日逗留だ、」と言いながら、片手に燈を釣つて片手で袖を引くようにして連込んだ。お兼は身を任せて引かれ進むと、言うがごとく洞穴の突当りから左へ曲る真暗な処を通つて、身を細うして行くとたちまち広し。

「まだまだ深いのかい。」

「もう可い、ここはね、おい、誰も来る処じゃあねえよ。おいらだつて、余程の工面で見着け出したんだ。」

滝太郎はこう言いながら、手なる燈を上げて四辺を照らした。

と見ると、処々ところどころに筵むしろを敷き、藁わらを束つかね、あるいは紙を伸べ、布を拵ひしがたげて仕切つた上へ、四角、三角、菱形のもの、丸いもの。

紙入がある、たばこいれ 蓆入がある、時計がある。あるいは銀色のあお蒼く
 光るものあり、また銅のあかがねさび錆たるものあり、両手に抱えて余るほど
 な品は、ひとつ一個も見えないが、水晶の彫刻物、宝玉のかざりにしききれ飾、錦の切、
ひいなこうろ雛、香炉の類から、印のごときもの数えても尽されず、並べてあ
 った。その列の最も端の方に据えたのが、えびちゃ蝦茶のかざりリボン飾、か
 つて勇美子がかしら頭に頂いたのが、色もあせないでひ燈の影に黒ずんで
 見えた。かたわら傍にはマツチ早附木のもえ燃さしがちら散ばっていたのである。

ひびき地獄谷の響、ながれ神通の流の音は、ひとしきりひとしきり脈を打つ
とどろて鳴り轟いて、うずたか堆いばかりのぞうひん贓品は一個々々心あつて物を語ら
 んとするがごとく、響に触れ、ともし燈に映つて不のこらず残動くように見え
 て、一種言うべからざる陰惨の趣がある。お兼はじつと見て物を

も言わぬ、その一言も発しないのを、感に耐えたからだとも思つたろう。滝太郎は極めて得意な様子でお兼の顔を見遣りながら、
 件のリボン飾くだん かざりゆびさを指して、

「これがね、一番新しいんだぜ。ほら、こないだ総曲輪で、姉やにつか掴まった時ね、あの昼間だ、あの阿魔、知事の娘のせいでもあるまいが、何だか取難とりにくかつたよ、夜店をぶらついてる奴等かんざしの簪を抜くたあななぜか勝手が違うんだ。でもとうとう遣ツつけた、可い心持だった、それから、」

と言つてひるがえ翻つて向うへ廻つて、ひとつ一個の煙草入を照らして見せ、

「これが最初はじめだ、富山へ来てから一番前さきに遣つたのよ。それからね、見ねえ。」

甚しいかな、古色を帯びた観世音の仏像一体。

「これには弱つたんだ、清全寺ツて言う巨おおでら寺の秘仏だつき。去年の夏頃開帳があつて、これを何だ、本堂の真まんなか中へ持出して大変な騒ぎを遣るんだ。加賀からも、越後からもね、おい、泊とまり懸けの参詣さんけいで、旅籠町の宿屋はみんな泊とまりを断るといふじやあねえか。二十一日の間拜ませた。二十一日目だったかな、おいらも人出に浮かされて見に行つたつけ。寺の近所は八町ばかり往来の留まる程だったが、何が難有ありがてえか、まるで狂きちがい人だ。人の中を這は出して、片息になつてお前めえ、本尊の前へにじり出て、台に乗つて小さな堂を据えてよ、錦の帳を棒さきの尖さきで上げたり下げたりして、その度にわツと唸うならせちやあ、うんと御賽銭おさいせんをせしめてやがる。

そのお前、前へ伸上つて、帳の中を覗のぞこうとした媼ばばあがあつたさ。
 汝うぬ血迷つたかといつて、役僧め、媼を取つて突飛ばすと、人の天
 窓たまの上へ尻餅を搗ついた。あれ引摺ひきずり出せと講こうじゆう中、肩衣かたぎぬで三
 方にお捻ひねりを積んで、ずらりと並んでいやがつたが、七八人一時いつときに
 立上がる。忌々いまいましい、可哀そうに老人としよりをと思つて癩しやくに障つた
 から、おいらあな、」
 活気は少年の満面に溢あふれて、蒼然そうぜんたる暗がりの可恐おそろしい響ひびきの
 中ひとすじに、灯はやや一条の光を放つ。

「晩方で薄暗かったし、鼻と鼻と打つかつても誰だか分らねえよ
うな群衆だから難かしいこたあねえ。一番驚かしてやろうと思つ
て、お前めえ、真直まつすぐに出た。いきなり突立つたつて、その仏像を帳とばりの中
から引出したんだから乱暴なこたあ乱暴よ。媪ばあやゆつくり拝みね
えツて、掴つかみかかった坊主を一人引捻ひんねじつて転めらせたのに、片
膝を着いて、差つけて見せてやった。どうして耐たまつたもんじやあ
ねえ。戦争の最中に支那ちやんが小児こどもを殺したつてあんな騒さわぎをしやあし
まい。たちまち五六人血眼しごとしになつて武者振つくと、仏敵だ、殺せ
と言つて、固めている消防夫しごとしどもまで鳶とびぐち口くちを振つて駈かけ着けや
がつた。」

光景の陰惨なのに気を打たれて、姿も悄しやうぜん然ぜんとして淋しげに、

心細く見えた女賊は、滝太郎が勇しい既往の物語にやや色を直して、蒼あおしろ白い顔の片頬かたほに笑えみを湛たたえていたが、思わず声を放つて、

「危いねえ！」

「そんなこたあ心得てら。やい、おいらが手にやあ仏様持つてるぜ、手を懸けられるなら懸けてみろツて、大おおきな声で喚わめきつけた。」

「うむ、うむ、」とばかりお兼は嬉うなずしそうに頷うなずいて聞くのである。

「おいらが手で持つてさいその位騒ぐ奴等だ、それをお前こつちへ掴てだしんでるからうっかり手出てだしやならねえやな。堂の中は人間の黒山が崩れるばかり、潮が湧わいたようになってごツた返す中を、仏様を振廻しちやあ後へ後へと退さがつて、位牌堂いはいどうへ飛込んで、そこからお前壁の隅ン処を突き破つて、墓原へ出て田圃たんぼへ逃げたぜ。

その替り取れようとも思わねえ大変なものをヤツつけた。今でもお前、これを盗まれたとつてどの位探してるか知れねえよ。富山の家が五六百焼けたつてあんなじやあるめえと思う位、可い心持じやあねえか。姉や、それだがね、おらあこんなことを遣つてからはじめてだ、実は恐こわかった、殺されるだろうと思つたよ。へん、おいらアのせいじやないぜ、大丈夫知れツこなしだ、占めたもんだい、この分じやあ今に見ねえ、また大仕事をやらかしてやらあな。」

血も迸ほとばしらんばかりさかん壮だつた滝太郎の面を、つくづく見て、またその罪の数をみまわして、お兼はほつという息を吐ついた。

歎ためいき息して、力なげにほとんどよろめいたかと見えて、後うしろざま

に壁のごとき山腹の土に凭れかかり、

「滝さん、まあ、こうやって、どうする意だねえ。いいえ、知つてるさ。私だつて、そうだったが、殊にお前さんぜにかね銭金に不自由はなし、売つてどうしようというんじやあない、こりややまい疾なんだ。どうしても止められやしないだろうね。」

言うことは白魚のお兼である。滝太郎は可怪い目をして、

「誰がお前、これを止しちやつて何がつまるもんか。おらあ時とするとむしろ筵を敷いて、夜よッ一夜この中で寝て帰ることがある位だ。見ねえ、おい、可い心持じやあねえか、人にも見せてやりたくツてしようがねえんだけれど、下らない奴にかぎ嗅つけられた日にやぶちこ打破しただから、ああ、浅草で別れた姉やぐらいなのがあつたらと、

しよツちゆう思つていねえこたあなかつたよ。おいら一人も友達
は拵こせえねえんだ、総曲輪でお前に、滝やツて言われた時にやあ、
どんなに喜んだと思うんだ、よく見て誉ほめてくんねえな。」

ずツと寄ると袖を開いて、姉御は何と思つたか、滝太郎の頸うなじを
抱いて、仰向あおもむきの顔を、

「どれ、」

燈ともしは捧げられた、二人はつくづくと目を見合せたのであつた。

お兼は屹ぎっと打守つて、

「滝さん、お前さんは自分の目がどんなに立派なものだか知つて
るかね。」

三十八

「お前さんの母おつかさん様が亡なくなんなすった時も、お前にやあ何でもしたいことが出来るからつてとお言いだつたと聞いちやあいたがね、まあ、随分思切つたこつたね。何かい、ここで寝ることがあるのかい。」

「ああ、あの荒物屋の媼ばばつていうのが、それが、何よ、その清全寺で仏像の時の媼やしきなんだから、おいらにやあ自由が利くんだ。邸やしきからじやあ面倒だからね、荒物屋を足あしだまり溜ひにしちやあ働ひねきに出るのよ。それでも何かや彼かや出入ひとしなに面倒ひねだつたり、一ひと品しな々々ひね捨ひねくつちやあ離れられなくつて、面白い時はこの穴ひとン中しなで寝て行かあ。

寝てるとね、盗んで来たここに在る奴等が、自分が盗られた時の様子を、その道筋から、機会きっかけから、各々めいめいに話をするようで、楽たのしみツたらないんだぜ。」

「それでまあよくお前さん体が何ともないね。浅草に餓鬼大将をやってお在いでの時とは違つて、品もよくおなりだし、丸顔も長くなつてさ、争われない、どう見ても若殿様だ。立派なもんだ。どうして、お前さんのその不思議な左の目の瞳子どうしに見覚みおぼえがなかつた日にやあ、名告なのられたつて本当に出来るもんじやあない、その替り、こら、こんなに、」

と手を取つて、お兼は掌てのひらに据えて瞻みまもりながら、

「節もなくなつて細うなつたし、体も弱々しくつて、夜露に打た

れても毒そうではないか。」

「不景氣なことを言つてらあ。 麦むぎ 畠ばたけの中へ引ひくりかえつて、

青天井で寝た処で、天窓あたまが一つ重くなるようなんじやあないよ、

鍛えてあらあな。」と昂こう然ぜんたり。

「そうかい、体はそれで可いとした処で、お前さんのような御身分とじやあ、鎖じょうを下ろした御門もあろうし、お次にはお茶坊主、宿直のいの武士というのが控えてる位なもんじやあないか。よくこうやつて夜よ一いつ夜び出歩でかれるねえ。」

「何、そりやおいら整然ちゃんと旨うまくやつてるから、大概内の奴あ、今時分は御寝ぎよしなつていらつしやると思つてるんだ。何から何まで邸の事をすつかり取締つてるなあ、守山てつて、おいらを連れて来

た爺さんだがね、難かしい顔をしてる割にやあ解つてて、我儘わがままをさしてくれらあね。」

「成程ね、華族様の内をすつかり預つて、何のこたあない乞食からお前さんを拾上げたほどの人だから、そりやお前さんを扱うことあ、よく知つているんだろう。」

「ああ、ただもう家名を傷けないようにつて、耳懐うるさく言つて聞かせるのよ。堅い奴だが、おいら嫌いじゃあねえ。」

「ふむ、それでお前さん、盗賊どろぼうをすりや世話は無いじゃあないか。」と言つて、心ありげに淋しい笑えみを含んだのである。

「おいら何もこれを盗つて、儲けようというんじやあなし、ただ遊んで楽しむんだあな。犬猫を殺すのも狩をするのも同おんなじ一こツた。

何、知れりや華族だ、無断に品物を取つて来た、代価は幾千だ、
好^{すき}な程払つてやるまでの事じゃあねえか。」

「あんな気だから納まらないよ。ほんとに私もあの時分に心得違
いをしていたから、見処のあるお前さん、立派な悪党に仕立てて
みようよと、そう思ったんだがね。滝さんお聞き、蛇がその累^{つづつづ}々
した鱗^{うろこ}を立てるのを見ると気味が悪いだろう、何さ、恐^{こわ}くはない
までも、可い心持はしないもんだ。蟻でも蠅でも、あれがお前、
万と千と固^{かたま}つていてみな、厭^{いや}なもんだ。松の皮でもこう重り重り
して堆^{うずだか}い^かのを見るとね、あんまり難有^{ありがた}いもんじゃあない、景色の
可^こい樹立^{こだち}でも、あんまり茂ると物^{もの}凄^{すご}いさ。私やもう疾^{とつ}にからそ
こへ気が着いて厭になつて、今じゃ堅気になつてゐるよ。ね、お

前さん、厭な姿は、蛇が自分でも可い心持じやあなかりうではな
いか。蚊でも蚤のみでも食ったのが、ぶつぶつ一面に並んでみな、自
分の体でも打うっちゃ棄りたいやな。私やこうやってお前さんがここに
盗んだものを並べてあるのを見ると、一々動くように蛇の鱗だと
思つて、悚然ぞつとした。」

三十九

「野暮は言わない、私だつて何も素人じやあなし、お前さんの病
な事も知つてるから、今めかしい意見をするんじゃないが、世の
中にやもツと面白い盗どろぼう賊のしようがありそうなもんじやないか。

時計だの、金だの、お前さんが嬉しがつて手柄そうにここに並べて置くものは、こりや何だい！ 私に言わせると吝けちさ、端はしたのお鳥目でざら幾いくら干でもあるもんだ。金剛石ダイヤモンドだつて、高々人間が大事がつて秘しまつておくもんだよ、慾よくの固かたまりだね。金と灰吹は溜たまるほど汚いというが、その宝を盗んで来るのは、塵芥溜ごみためから食べ荒しをほじくり出す犬おんなじと同一だね、小汚ない。

そんなことより滝さん、もつと立派な、日本晴にっぽんばれの盜賊どろぼうがありやしないかしら。

主すの棲ふちむ淵ふちといえれば誰も入つたものはあるまい。昔から人の入らない処ところなら、中なかににまたどんな珍らしい不思議なものがあるかも知れない。譬たとえにも竜りゅうのあごには神様のような綺麗な珠たまがあるという

よ。何そんなものばかりじゃあない、世の中は広いんだ、富山にばかりも神通川も立山もあるじゃあないか。大海の中だの、人の行かない島などには、宝にしる景色にしる、どんな結構なものがあるかも知れぬ、そして見つければ大びらに盗んで可いのさ。

ただそれは難かしい。島へ行くには船もいろうし、山の奥へ入るには野宿だつてしなけりやならない。お前さんはお金子かねが自由だろう、我儘わがままが出来るじゃあないか。気象はその通とおだし、胆きもた玉たまは大いし、体は鍛えてある、まあ、第一、その目つきが容易じゃあない。火に焼やれず、水に溺なれずといったような好運があるようだ。好すなことが何でも出来るツて、母おつかさん様が折紙をつけて下すつた体だよ、私が見ても違いはないね。

金目の懸かかった宝なんぎ、人が大切がつて惜しむもので、歩くにも坐るにも腰こしぎんちやく巾着ちやくにつけていようが、鎖じようを下ろしておこうが、土の中へ埋めてあろうが、私等が手にやあお茶の子さ。考えて御覽、どんなに嚴重にして守ったつて、そりや人間の猿智慧ざるちえですることつた、現にお前さん、多勢黒山のような群集の中で、その観音様を一人で引揚げて来たじやあないか。人の大事にするものを取つて来るのは何でもないが、私がいう宝物は、山の靈、水の精、また天道様が大事に遊ばすものもあろう。人は誰も咎とがめないが、迂濶うかつにお寄越よこしはなさらない、大風で邪魔をするか、水で妨げるか、火で遮るか。恐けだものい獣けだものに守らしておきもしようし、真暗まつくらな森で包んであろうも知れず、地獄谷とやら、こんな恐い音のす

る、その立山の底に秘かくしてあるものもあるう。近い処が、お前さんが前刻さつきお話の、その黒百合というものだ、つい石滝とかの山を奥へ入るとあるツていうのに、そら、昔から人が足踏あしづみをしな
い処で、魔処だ。入っちゃあならない、真暗だ、天窓あたまが石のよう
な可恐おそろしい猿が居る、それが主だというじゃあないか。この国中さば掘
いてる知事の嬢さんが欲しくつても、金でも権柄けんべいづくでも叶かなわ
ないというだろう。滝さんどうだね、そんなものを取つて来ちや
あ。

一番何でもそういつたものを、どしどし私たちが頂戴ひとつをするこ
とにしようじゃないか。私ばかりでない、まだ同おんなじ一心の者が、
方々に隠れている、その苧環おだまきの糸を引張つてさ、縁のあるもの

へ結びつけて、人間の手で網を張ろうという意つもりでね、こうやって方々歩いている。何、私なんざ、ほんの手先の小使だ、幾らもお前さんの相談相手があるんだから、奮発をしてお前さん、連判状の筆頭につかないか。」

意気八荒を呑む女賊は、その花のごとき唇ひらめから閃いてのぼる毒炎を吐いた。洞ほらあな穴の中に、滝太郎が手なる燈ともしびの色はやや褪あせたと見ると、件くだんおそろしひびきの可恐い響は音絶とだえるがごとく、どうーどうーどうーと次第に遠ざかって、はたと聞えなくなつたようである。

「もう夜明だ、姉や、分つたい、うむ、早く出よう。そして、おいらもう、この穴へは入るまい。」

滝太郎は決然として答えた。お兼は嬉しげに手を取つて、

「滝さん、それでこそお前さんだ、ああ、富山じゃあ良い事をした、お庇かげ様さまで発程たちばえ栄えがする。」

「お前めえ、もうちつとこつちに居てくんねえな。おいら勝手に好すきな真似まねはしてるけれど、友達なんにも何もありませんやな。本当は心細くツて、一向つま詰まらないんだぜ。」

「気の弱いことをいうもんじゃあない、私はこれから加州へ行って、少し心当あたりがあるんだし、あそこへは先へ行つて待合まちわせている者がある。そうしちやあいられないんだから、また逢おうよ。」

そしてお前さんの話をして、仲間の者を喜ばせよう。何の、味方にしようと思えば、こつちのものなんざ皆味方さ。不残敵になつたつて難かしい事はないのだもの。」

「うむ、そんならそうよ。」と頷いて身を開いた、滝太郎は今森として響も止んだ洞穴の中に耳を澄したが、見る見る顔の色が動いて、目が光つた。

「や、山の上で蝸が鳴かあ、ちよツ、あいつが二三度鳴くと、直ぐに起きやあがる。花屋の女は早起だ、半日ここに居て耐るもんかい。」

ふツと燈を消すと同時に、再びお兼の手をしっかりと取つて、
「姉や、大丈夫だ、暗い内に、急いで。さあ、」

温泉ゆの口なる、花室の露を搔か潜いつて、山の裾へ出ると前後あとさきになり、藪やぶについて曲る時、透かすと、花屋が裏庭に、お雪がまだ色も見え分かぬ、朝まだき、草花の中に、折取るべき一個ひとつの籠かごを抱いて、しよんぼりとして立っていた。髪つや艶やかに姿白く、袖もなえて、露に濡れたような風情。推するに渠かれは若山の医療のため、に百金を得まく、一輪の黒百合を欲して、思い悩んでいるのであろう。南天の下に手水鉢ちようずばちが見えるあたりから、雨戸を三枚ばかり繰った、奥が真ま四角しかくに黒々と見えて、蚊帳の片端の裾が縁側へ溢あふれて出ている。ト見る時、また高らかに蝸ひぐらしが鳴いた。

「そらね、あれだから。」

と苦笑する。滝太郎と囁ささやき合い、かかることに馴なれて忍しのびの術じゆつを

得たるごとき兩個の人物は、ものおもうお雪が寝起ねおきの目にも留まらず、垣を潜くぐつて外へ出ると、まだ閉切つてある、荒物屋の小店の、燻くすぶつた、破目やれめや節穴の多い板戸の前を抜けて、総井戸の釣瓶つるべがしとしとと落つる短夜の雫しずくもまだ切果きれはてず、小家がちなる軒に蚊の声のあわただしい湯の谷を出て、総曲輪まで一ひとすじ条の径こみちにかかり、空を包んだ木の下に隠れて見えなくなつた。

「それじゃあ滝さん、もう、ここから帰つておくれ、ちようど人目にもかからないで済んだ。」

あさまだき

早朝 町はずれへ来て、お兼は神通川に架した神通橋の袂たもとで

たちどま

立停つたのである。雲のごときは前途ゆくての山、煙けぶりのようなは、市

ちなか

中の最高処にあつて、ここにも見らるる城址しろあとの森である。名

にし負う神通二百八間の橋を、真まんなか中頃から吹断ふきたつて、隣国の方
 へ山道をかけて深々と包んだ朝靄あさもやは、高く揚つて旭あさひを遮り、低
 く垂れて水を隠した。色も一様の東雲しののめに、流ながれの音はただどうど
 うと、足許あしもとに沈んで響く。

お兼は立去りあえず頭かしらを垂れたが、つと擬宝珠ぎぼうしのついた、ひとか
 抱かえに余る古びた橋の欄干に目をつけて、媽然えんぜんとして、振返つ
 て、

「ちよいと滝さん、見せるものがある。ね、この欄干を御覧、種い
 々な四角いものだの、丸いものだの、削った爪の跡だの、朱だ
 の、墨だので印がつけてあるだろう、どうだい、これを記念かたみに置
 いて行こうか。」

四十一

折から白髪しらがあたま天窓すげに菅おがさの小笠、腰の曲つたのが、蚊かほそ細い渋茶けた足わらじに草鞋はを穿はき、豊島としまござ莫おとが崖がいをくるくると巻ななめいて斜しよに背負さきい、竹の杖おとがを両手に二本突おとがいて、頤おとがを突出はだしして気ばかり前さきへ立つ、婆ばあの旅客はだしが通はつた。七十にもなつて、跣はだし足はだしで西京ひだの本願寺やまなかへ詣もうでるのが、この辺りの信者に多いので、これは飛驒ひだの山やまなか中あたりから出て来たのが、富山に一泊して、朝がけに、これから加州を指ゆして行くのである。

お兼は黙やつて遣過やりすごして、再び欄干の爪の跡を教えた。

「これはね、皆仲間の者が、道中の暗号だよ。中にやあ今真盛な商売人のもあるが、ほらここにこの四角な印をつけてあるのが、私が行つてこれから逢おうという人だ、旧海軍に居た官だね。それからこうあつちに、畝々した線が引張つてあるだろう、これはね、ここから飛驒の高山の方へ行つたんだよ。今は止めていても兇状持で随分人相書の廻つてるのがあるか、迂濶な事が出来ないからさ。御覧よ、今本願寺参が一人通つたろう。たしかあれは十四五人ばかり一群なんだがね、その中でも二三人、体の暗い奴等が紛れ込んで富山から放れる筈だよ。俱利伽羅辺で一所になろう、どれ私もここへ、」

と言懸けて、お兼は、銀煙管を抜くと、逆に取つて、欄干の

木の目を割って、吸口の輪を横に並べて、三つ圧おした。そのまま筒に入れて帯に差し、呆みれて見惚とれている滝太郎を見て、莞爾にこりとして、

「どうだい、こりや吃びっくり驚おどろだろう。方々の、祠ほくらの扉かだの、地藏堂の羽目だの、路みち傍ばたの傍ぼう示じ杭くいだの、気をつけて御覧みんな、皆みなこの印いんがつけてあるから。人の知らない、楽書がくしよの中にこの位くらいなことが籠こもってるから、不思議ふしぎだわね。だから世の中は面白いものだよ。滝さん、お前さんの目つきと、その心なら、ここにある印いんは不ふ残ざんお前さんの手下てんかになります、頼たのもしいじゃあないか。」

「うむ、」といつて、重ちゆう瞳どう異相いさうの悪少あくせうは眠ねくないその左ひだりの目を擦こすった。

「加州は百万石の城下だからまた面白い事もあるう、素晴らしい事が始まつたら風の便たよりにお聞きなさいよ。それじゃあ、あの随分ねえ。」

「気をつけて行きねえ。」

「あい、」

「……………」

「おさらばだよ。」

その効かいがい々々しい、きりりとして裾すそ短みじかに、縷しゆす子の帯を引結んで、低下駄ひくげたを穿はいた、商売あきないものの銀流を一包にして桐油合羽とうゆがっばを小さく畳んで掛けて、浅葱あさぎの切きれで胴中どうなかを結えた風呂敷包を手に提げて、片手に蝙蝠傘こうもりがさを持った後姿。飄ひようぜん然として橋を渡り

去つたが、やがて中ほどでちよつと振返つて、滝太郎を見返つて、そのまゝ片褌かたづまを取つて引上げた、白い太脛ふくらはぎが見えると思うと、朝靄あさもやの中に見えなくなつた。

やがて、夜が明け放れた時、お兼は新庄しんじよの山の頂を越えた、その時は、裾からを繋げ、荷を担ぎ、蝙蝠傘をさして、木賃宿から出たらしい貧しげな旅の客。破毛布やふれげつとを纏まとつたり、頬ほおかぶり被かぶりで顔を隠したり、中には汚れた洋服を着たのなどがあつた、四五人と道みちちづれ連ちづれになつて、笑いさざめき興ていずる体で、高岡を指して峠を下りたとのことである。

お兼が越えた新庄というのは、加州の方へ趣く道で、別にまたまちなか市中ちゆうじゆうの北のはずれから、飛驒へ通ずる一筋の間道がある。すな

わち石滝のある処で、旅客は岸伝づたいに行くのであるが、ここを流るるのは神通の支流で、幅は十間に足りないけれども、わずかの雨にもたちまち暴溢あふれで、しばしば堤防どてを崩す名代の荒河。橋の詰つめには向い合つて二軒、蔵屋、鍵屋かぎと名ばかり厳いかめしい、蛍狩すずみ、涼をあての出茶屋でぢややが二軒、十八になる同一年紀おないどしの評判娘が両方に居て、負けじと意気張つて競争する、声も鶯うぐいす、時ほととぎす鳥。

「お休みなさいまし、お懸けなさいまし。」

四十二

その蔵屋という方の床几しょうぎに、腰を懸けたのは島野紳士、ここ

に名物の吹上の水に対し、上衣コウトを取つて涼を納いれながら、硝子盃コップを手にして、

「ああ、涼しいが風が止やんだ、何だか曇やつて来たじやあないか、雨はどうだろうな。」

客の人柄を見て招まねきの女、お倉くらという丸ぼちやが、片かた襷だすきで塗ぬり盆ぼんを手にして出ている。

「はい、大抵持ちましようかと存じます。それとも急にこうやつて雲が出て参りましたから、ふとすると石滝でお荒れ遊ばすかも分りません。」

「何だね、石滝でお荒れというのは。」

「それはあの、少しでも滝から先へ足踏をする者がございますと、

暴風雨あらしになるツて、昔から申しますのでございませうが。」

島野は硝子盃を下に置いた。

「うむ、そして誰か入ったものがあるのかね。」

「今朝ほど、背負しよいあげ上を高くいたして、草鞋わらじを穿はきましてね、花は籃なかごを担かぎました、容子ようすの佳いい、美しい姉さんが、あの小さなお

扇子を手に持つて、」と言い懸いかると、何と心得たものか、紳士は衣袋かかしの間から一本平骨ひらぼねの扇子を拔出して、胸の辺りを、ささやさや。

「はあ、それが入ったのか。」

「さようでございます。その姉さんは貴方あなた、こないだから、昼間参りましたり、晩方来ましたりいたしましては、この辺を胡乱うろうう々々

々して、行ったり来たりしていたのでございますがね。今日は七日目でございます。まさかそんなことはと存じておりますと、今朝ほどこの前を通りましてね、滝の方へ行つたきり帰りません、きつと入りましたのでございましょう。」

「何かね、全くそんな不思議な処かね。」

「貴方、お疑り遊ばすと暴風雨になりますよ。」といつて、塗盆を片頬かたほにあてて吻々ほほと笑つた、聞えた愛嬌あいきようもの者である。島野は顔の皮を弛ゆるめて、眉をびりびり、目を細うしたのは謂いうまでもない。

「それは可いいが姉さん、心ところてん太を一ツ出しておくれな。」

「はい、はい。」

「待ちたまえ、いや、それともまた降られない内に帰るとするかね。」

「どういたしましたして、降りませんでも、貴方川留かわどめでございませよ。」

方二坪ばかり杉葉の暗い中にむくむくと湧わきあが上る、清水に浸したのを突つきにかけてずツと押すと、心ところてん太の糸は白魚のごときその手に搦からんだ。皿もに装つて、はいと来る。島野は口も着けず下に置いて、

「そうして何かい、ついぞまだそこへ行つた者を見たことはないのか。」

「いいえ、私が生まれましてから始めてでございませが、貴方どう

でございましょう、つい少しばかり前にいらつしやいました、太った乱暴な、書生さんが、何ですか、その姉さんがここへ参りましたことを御存じの様子で、どうだとお聞きなさいますから、それそれ申しますと、うむといったツきり駈出^{かけだ}して、その方もまだお帰^{かえり}になりません。」

「え、そりや何か、目の丸い、」

「はい、お色の黒い、いがぐり天窓^{あたま}の。もうもう貴方のようじゃあございせんよ、おほほほ。」

「いや!」とばかりでこの紳士、何か早や、にたりとしたが、急に真面目になつて、

「ちよツ、しようがないな。」

「貴方御存じの方なんですか。」

「うむ、何だよ、その娘の跡を跟^つけまわしてな、から厭^{いや}がられ切つてる癖に、狂^{やまいぬ}犬のような奴だ、来たかい！ 弱^{うぬ}つたな、どうも、汝^{うぬ}一人で。」

「何でございます。」

「いえさ、連^{つれ}は無^なかつたのか。」

四十三

「ただお一人でございましたよ、豪^{えら}そうなお方なんです。それに仕^{しこみづえ}込杖^{づえ}なんぞ持っていらつしやいましたから、私達^{わたし}がかれこれ

申上げた処で、とてもお肯入れきぎいはなさりますまいと、そう思いまして黙つて見ておりましたが、無事にお帰りなされば可ようございますがね。」

島野は冷然として、

「何、犬に食われて死にやあ可いんだ。」

「だって、姉さんはお可哀そうじゃございませんか。」

「そりやお互様よ。」

「あれ、お安くごさいませんのね。でも、あの、二度あることは三度とやら申しますから、今日の内また誰かお入りなさりはしまいかと言つて、内の父おとっさん様も案じておりますから、貴方またその姉さんをお助けなさろうの何のツて、あすこへいらっしやるの

はお止し遊ばしまし。」

「だが、その滝の傍^{そば}までは行つても差^{さしつかえ}支^{かえ}が無いそうじやないか。」

「そこまでなら偶^{たま}に行く人もございますが、貴方何しろ真^ま暗^{くら}だ
 そうですよ。もうそこへ参りました者でも、帰ると熱を煩^{わづ}つて、
 七日も十日も寝る人があるのでございます。」

「熱はお前さんを見て帰つたつて同^{おんなじ}一^{いっ}だ、何暗^{くら}いたツて日^ひ中^{なか}よ、
 構^{かま}やしない。きつとそこらにうろついているに違^{ちが}ひない、ちよつ
 と僕は。おい、姉さん歸りに寄^よろう。」

「お気をお着^きけ遊^{あそ}ばしていらつしやいましよ。」

島野は多磨太^{たまた}が先^{さき}じたりと聞^きくより、胸の内安^{やす}からず、あたふ

た床しょうぎ几ぎを離れて立つたが、いざとなると、さて容易な処ではな
 い。ほぼ一町もあるという、森の彼方かなたにどうどうと響く滝の音は、
 大河さかしまを倒さかしまに懸けたように聞えて、その毛穴はここに居る身にもぞ
 ツと立つた。島野は逡巡して立っている。

折つづみづたから堤防つづみづた伝ひづめいに蹄ひづめの音、一人砂すなけぶり烟けむりを立てて、斜ななめに小こさ
 く、空くうを駆けるかと思える見る見る近づき、懸かけ茶屋ちややの彼方かなたから歩ゆるを緩
 めて、悠然と打って来た。茶屋の際の葉柳しずえの下枝くぐを潜くぐって、ぬつ
 くりと黒く頭あはわれたのは、鬣たてがみから尾おしりに至るまで六尺、長たけの高きこ
 と三尺、全身墨のごとくにして夜眼やがん一点の白はくあり、名を夕立とい
 って知事の君が秘蔵の愛馬。島野は一目見て驚いて呆れた。しつ
 くりと西洋鞍ぐら置いたるに胸を張またがって跨またがったのは、美髯びぜん広額ひろがくの君で

はなく、一個白面の美少年。頭髮柔かにやや乱れた額少しく汗ばんで、玉洗えるがごとき頬のあたりを、さらさらと払った葉柳の枝を、一掴み馬上に搔遣り、片手に手綱を控えながら、一蹄三歩、懸茶屋の前に来ると、件の異彩ある目に逸疾く島野を見着けた。

「島野、」と呼懸げざま、飜然と下立ったのは滝太郎である。

常にジヤムを領するをもつて、自家の光彩を發揮する紳士は、この名馬夕立に対して恐入らざるを得ないので、

「おや、千破矢様、どうして貴方、」と洩面を造つて頭を下げる。その時、駿足しゅんそくに流汗を被りながら、呼吸はあえて荒からぬ夕立の鼻面を取つて、滝太郎は、自分も掌てのひらで額の髪を上げた。

「おい、姉や。」

「はい、」

「水を一杯、つめた冷いのを大急おおいそぎだ。島野、可い処でお前めえに逢つた

い。おいら、お前とこン処の義作の来るまで、あすこの柳にでも繋つない

でおこうと思つたんだけれど、お前が居りやあ世話はねえ。この

馬返すからな、四十物町あえものちようまで持つて行つてくんねえ、頼むぜ、

おい。」

呆れたものいいと、唐突だしぬけの珍客に、茶屋の女どもは茫ぼんやり乎。

四十四

島野は、時というところの苦手が顕れるのを、前世の因縁とでも
いいたげな、弱り果てて、

「へい、その馬を持って帰れとおっしゃるんですか。」
と不平らしい顔をした。

「そうよ。」

「一体その何でございますが、私はどうも一向馬の方は心得ませ
んもんですから。」

「大丈夫だ。こう、お前めえ一ツ内端うちわじゃあねえか、知ちかづ己きだろう、
暴れてくれるなって頼みねえ、どうもしやあしねえやな。そして
乗られなかったら曳ひいて行くさ。だからちつたア馬に乗ることも
心懸けておくこつた、女にかかり合っているばかりが芸じゃあね

えぜ。どうだ、色男。」と高慢なことを罪もなくいつて、滝太郎は微笑んだ。
ほほえ

「失敬な。」も口の裡で、島野は顔を見らるると極悪そうに四辺あたりをきよろきよろ。茶店の女は、目の前にほっかりと黒毛の駒が汗こまばんで立ってるのを憚はばかつて、密そと洋盃を齎もたらした。右手をのべて滝太郎が受ける時、駒は鬣たてがみを颯と振った。あれと吃驚びっくりして女はあ後へ。若君は轡くつわを鳴らして、しっかとりつつ、冷水の洋盃を長く差伸べて、盆に返し、

「沢山だ。おい、可いか、島野、預けるぜ。」

屹きつと向直つて、早く手綱を棄てようとする。島野は狼狽うろたえて両手を上げて、

「若様どうぞ、そりや平に、」とばかり、荒馬をひとつしよ一頭背負わされて、庄司重忠にあらざるよりは、誰かこれを驚かざるべき。見得も外聞も無しに恐れ入り、

「平に御容赦てツたような訳なんです。へい、全くいけ不可ませぬ。それにちつと待合わせるものもあるんでございますから。」

と窮したる笑顔を造つて、かれ渠はほとんど哀を乞う。

滝太郎は黙つてうなず頷くとひと斉しく、駒の鼻頭を引廻ひきめぐらした。蹄の上ること一尺、夕立は手綱を柳の樹に結えられていなな嘶いた。

「島野、おい、島野。」

この声を聞くごとに、ほん実のこツた、紳士はぞツとする位で。

「へい、御用ですか。」

「お前、待合わせるものがあるツて、また別嬪べっぴんじゃあねえか、花売のよ。」

「御串戯ごじょうだんを、」と言ったが、内心えぐ抉られたように、ぎっくりして、おだやか穏ならず。

滝太郎は戯たわむれにいったばかり。そのまま茶屋の女むすめを見返り、

「何ぞ食べるものをくれねえか、多い方が可いぜ。」

「姉さんおいしいものを、早く、冷たくして上げるが可い。」と、島野はてれ隠しに世辞をいった。

「はい、西瓜すいかでも切りましようか。心ところてん太、真桑まくわ、何を召あがります。」

「そんな水ツぽいもんじゃあねえや、べらぼうめ、そこいらに在

る、有^{あるへい}平だの、餡^{あん}麵^{めん}麩^ぼだの、駄菓子で結構だ。懐^{ねじこ}へ捻^{ねじこ}込んで行くんだから紙にでも包んでくんな。」と並べた箱の中に指^{ゆびさ}しをする。

「どちらへいらつしやいます。」

「石滝よ。」

驚いたのは茶店の女^{むすめ}ばかりではない、島野も思わず顔^{なが}を視^{なが}める。

「兵^{ひょうろう}糧^{りやう}だ、奥^{おく}へ入^いつて黒百合を取^とつて来^こようというんだから、

日が暮れようも分らねえ。ひもじくなるとそいつを嚙^{かじ}らあ、どうだ、お前、勇美さんに言いねえ、土産を持って行^いつてやるからツてよ。」

「途方もない、若様。それを取ろうツて、実はつい先刻^{さつき}だそうで

す。あの花売むすめの女も石滝へ入ったんです。」

「うむ、」といった滝太郎の顔の色は動いた。滝の響ひびきを曇天に伝えて聞える、小川の彼方かなたの森の方かたを、屹きつと見て、すつくと立って、

「あの阿魔がかい、そいつあ危あぶねえ！」

先立って二度あることは三度とやら、見通みとおしの法印だった、蔵

屋の亭主は奥あわただから慌しく顔を出して、

「そりやこそ、また一人。」

四十五

「やあ、島野さん、千破矢の若様はどうしました。」

「義作じゃないか、一体ありやあどうしたんだね。お前、魔物が夕立に乗って降って来たから、驚いたろうじやあないか。」と半なかばは独ひとりごと言ことのようにぶつぶついう。

被かぶった帽も振落したか、駆附いきけの呼い吸きもまだはずむ、お館やかたの馬丁義作、大おお童わらわで汗あせを拭ふき、

「どうしたって、あれでさ、お前まえ様、私わたしや飛とんでもねえどじを行やったで。へい、今朝旦けさ那樣をお役所へ送まわってね、それからでさ、えて引張ひっぱって総曲輪そうまがわまで帰かえって来ると、何なにに驚おどいたんだか、評判へいばんの榎えのがあるって朝あつばらから化くけもしめえに、畜生ちくせい棹さお立たちになつて、ヒイン、え、ヒインでんで。」

「暴れたかね。」

「あばれたにも何も、一体名代の代物しろものでござえしよう、そいつがお前さんめくら、盲目滅法界に飛出したんで、はつと思う途端まうつに眞ま俯向むげに転のめつたでさ。」

「おやおや、道理で額を擦剥すりむいてら。」

義作は掌てのひらでべたべたと顔を撫なでて、

「串じょうだん戯あそじゃあがあせん、私わつしや一期いちごで、ダーだと思つたね、地つち

ん中へ顔を埋うずめてお前さんめくら、ずるずると引摺ひきずられたから、ぐらぐ

らと来て気が遠とほくなつたんで。しばらくして突立つたつて、わつてツ

て追い駆かけると、もうわいわいという騒さわぎで、砂すな煙なげが立たつて

まさ。あれから旅籠町へ抜けて、東四十物町を突切つっきつて、橋通り

へ懸かつて神通を飛越とそうてえ可恐おそろい逸それ方だ。南無三寶なむさんぼう、こりや

加州まで行くことかと息切がして蒼あおくなりましたね。鳥居前のお前さん、乱暴じゃあがあせんか、華族様だつてえのにどうです、もつともまああの方にやあ不思議じゃねえようなものの、空あきだる樽の腰掛だね、こちとらだつて夏向は恐れまさ、あのそら一膳飯屋から、横つちよに駆出したのが若様なんです。え、滝先生、滝公、滝坊、へん滝豪傑、こつちの大明神なんで。」とぐつと乗り、拳を握つて力を入れると、島野は横を向いて、

「ふむ。」

「どうです、威勢が可いじやがあせんか。突いきなり然畜生の前へ突立つったつたから、ほい、蹴飛ばされるまでもねえ、前足あたまが揃つて天窓の上を向うへ越すだろうと思うと、ひたりと留とまつたでさ。畜生、貧

乏動ゆるぎをしやあがる腮あごの下へ、体を入れて透間がねえようにくつつ
 いて立つが早いか、ぽんと乗りの、しやしやんさ。素人にやあ
 出来やせん。義作、貸しねえ貸しねえてつて例の我わが儘ままだから断
 りもされず、不断面倒臭くつて困つたこともありましたが、
 先刻さつきは真ほんのこつた、私わつしや手を合わせました。どうしてお前めさんな
 んぎ学者で先生だつていうけれど、からそんな時にやあ腰を抜か
 すね。へい。何だつて法律で馬にやあ乗れませんや、どうでげす
 。
 」

「はい、お茶を一ツ。」

大気焰きえんの馬丁は見たばかりで手にも取らず、

「おう、そんなもなあ、まだるツこしい。今に私わつしやそこに湧わいて

るのに口をつけて干しちまうから打棄うっちゃっておきねえ。はははは、ええ島野さん。おいらこれから石滝いしづへ行くから、お前めえあとから取りに来ねえ、夕立はちよいと借りるぜって、そのまま乗出したもんだからね、そこいら中騒いでた徒てええに相済みませんを百万だら並べたんで。転んだ奴あ随分あつたそうだけれど、大した怪我人もなし、持主が旦那様なんですから故障をいう奴もねえんで、そつちや安心をして追駈おいかけて来ましたが、何は若様はどちらへ行つたんで。」

「じゃあ、その何だろう、馬騒まさわぎで血逆上ちのぼせがしたんだろう、本気じゃあないな。兵糧だつて餡麵あんぱん麩ねじこを捻ね込んで、石滝の奥へ、今の前橋さきを渡つたんだ、ちようど一足違い位なもんだ。」

「やッ、」というて目を睜みはる義作と一所に吃驚びつくりしたのは、茶店の女で、向うの鍵屋の当かたきの敵、お米よねといつて美しいのが、この折しも店先からはたはたと堤防つつみへ駆出したことである。故こそあれ腕車うでぐるまが二台。

四十六

「もしもしちよいとどうぞ、どうぞちよいとお待ち遊ばして。」と路を遮ったので、威勢いきの可い腕車くるまが二台ともばったり停とまる。米は顔を赤らめて手を膝ひざに下げて、

「恐入おそります、御免ごめん下さいまし。どちらの姫様ひいさまですか存ぞんじませ

んが、どうぞあちらへいらつしやいましたら、私どもへお休み遊ばして下さいまし、後生でございます。」

先に腕車くるまに乗ったのは、新しい紺飛白こんがすりに縷子しゆすの帯を締めて、いちようがえしい銀杏返おんなに結った婦人。

「何だね、お前さん。」

「はい、鍵屋と申します御休憩所おやすみどころでございしますが、よそと張合あつておりますので。」

今朝むこうから向にばかりお客がございます処へ、またお馬に召した立派な若様がお立寄でございました。あのお倉さんというのが、それはもうこれ見よがしで、私わたくしは居ても立つてもいられません。あんまり悔しゆうございますから、どんなにお叱り遊ばしても宜よ

うございます、お見懸け申しましてお願い申します。助けると思召して後生でございます、私どもへ。」

とおろおろ声で泣くようにいう。

「おや、じゃああのお茶屋の姉さんかい。」

「はい、さようでございます。」

「それでは御馳走をしてくれませんか、」と背後の腕車で微笑みながらいったのは、米が姫様と申上げた、顔立も風采もそれに叶った気高いのが、思懸けず気軽である。

女はかえつて答もなし得ず、俯向いてただお辞儀をした。

「それじゃ若衆さん。」

「おう、鍵屋だぜ。」

「あい、遣^やんねえ。」

車夫は呼交わしてそのまま曳^ひ出す。米は前へ駆^ひ抜けて、初音^{はつね}はこの時にこそ聞えたれ。横^{よこ}着^づにした、楫^{かじ}棒^{ぼう}を越えて、前なるがまず下りると、石滝界隈^{かいわい}へ珍しい白芙蓉^{はくふよう}の花一輪。微風にそよそよとして下立った、片^{かた}辺^えに引^ひ添^そい、米は前へ立つてすらすらと入るのを、蔵屋の床^{しょう}几^ぎに居^いた兩人、島野と義作がこれを差^さし^{のぞ}覗^{のぞ}いて、慌^{あわ}た^だしくひよいと立つて、体と体が縊^よれるように並んで、急^{いそぎ}足^{あし}につかつかかと出た。

「お嬢様。」

「へい、お道どん、御苦労だね。」

「おや、義作さん、ここに。」

勇美子は店さきに入ろうとしたが、不意に会った内の者を顧みて、

「島野さんも来ていたの。」

「ええ、僕は十分久しい前からなんです。義作君はたった今、その馬が放れました一件で。」

「実は何でございます、飛んだ疎^そ匆^そをいたしやして、へい。ねえ、お道どん、こういう訳なんだ、実は、」

「はあ、そりやもう、路で聞きましたよ、飛んだことだったね、でもまあ可^いい塩^{あんばい}梅^{ばい}に。」

「御家来さん、危^{あぶ}うがしたな。」

「しかし怪我アしなさらなくて何よりだったよ。」と車夫ども

は口々なり。お道もまた、

「そうねえ。」

「ええ、もう私わっしや怪我けがなんぞ厭いとやしませんか、何、皆みんな千破矢ちんぱやの若様のお庇かげなんで、へい。」

「ちよいとどうなすつたの、滝太郎さんは。」と姫は四辺あたりを見て、御意遊ばす。

「お馬はあすこに居るじゃあないかね。」

「お嬢様、何ですか、その事でこちらへお越しなんでしょうか。」

「何あのお雪のことなの。」

「姉さん、花売なんだがね、十八九でちよつとそういつた風な女を見当りはしなかつたかい。」

お道に聞かれて米が答えようとするのを、ちやつと引取ったのは今両人が鍵屋の女客に引付けられて、店から出るのに気を揉んで、あとからついて出て立っている蔵屋の女むすめ。

「その人なら、存じております、今朝ほどでございました。」
「私だつて知ってます。」と、米はつんとして倉を流盼じろり。

四十七

「貴方あなたの黒百合を採りたいって、とうとう石滝へ入ったそうです。」と、島野が引取つて慎重にこれを伝える。

勇美子はその瞳を屹きつと凝らしたが、道は聞くと斉ひとしく、顔の色

を変えた。

「お嬢様、どういたしましょう。」

「困ったね、少しお待ち、あの、お前だち誰も中の様子を知らな
いかい。」

「はい、ちつとも。」

「あの、少しも存じません。」

「それはもう誰も知ったものはござりますまい。」
と車夫の一人。

「島野さん、義作さん、どうしたら可いでしょう。お嬢様が御褒
美をお賭けなすつたのを、旦那様がお聞遊ばすと、もつての外だ、
間違いに怪我でもさせたらどうする、外ほかの内うちの者とは違ちがうぞ、早

く留めろと有仰おっしゃるの。承わると実に御道理ごもつともな事だから、早速あの娘にそういうおうと思つて、昨日きのうのことなんです、またこないだからふつとお邸きゆうには来ないもんですから、昨日きのうその金子かねは只ただでお遣つかわしになることになつて、それを持つて私があそこへ、あの湯の谷うちの家ゆへ行くと居ゐないんです。荒物屋から婆さんが私の姿を見ると、駆けて出て、取次いで、その花のことについて相談をされたのは私ばかり、はじめは滅相こころなと思つたが、情を察すると無理なはないので、泣なきの涙で合点なしました。今日あたりはもう参つたかも知れませぬ、することが天道様の思おぼしめし召かなに叶かなつたら無事で帰つて参りましょう。内に居る書生さんの旦那にはごく内々だから黙つておいて、とこういうことです。実はと訳をいって、お金か

子は預けておこうとすると、それは本人へ直じかにといつて承知しません。無理もないと引返して、夜も寝ないで今朝、起きがけに行くともう居ないんです。また婆さんが出て、昨夜は帰りました、その事をいつて聞かせると、なおのことそのお情に預なさけあずかつては、きつと取つて来て差上げずにはと、留めるのも肯きかないで行つたといひます。

ええ、何の知事様から下さるものを、家一つ戴いて何どれほど程の事があるう、瘦やせがまん我慢な行過ぎだと、小腹が立つて帰りましたが、それといつて棄てておかれぬ、直ぐにといつてお嬢様が、ちようどまたお加減が悪い処、かれこれして遅くなりましたけれども、お体いとのお願いもなく遠方をお出懸けになつたのに、まあ飛んだこ

とをしちまつたんでございますねえ。」

と道は落着かず胡乱々々する。

一同顔を見合せた。

義作一名にやりやり

「可^ようがす、何、大概大丈夫でしょう、心配はありますまいぜ。

諺^{ことわざ}にも何でさ、案ずるより産むが易いつて謂^いいますさ。」

「何だね、お前さん。」とそこどころではない、道は窘^{たしな}めるがづ

とくにいった。

義作あえてその（にやり）なるものを止^やめず。

「いえ、女つてえものは、またこれがその柔よく剛を制すといつた形でね。喧嘩にも傍^{そばづえ}杖をくいません、それが証拠にやあ御覽^{ごらん}

じろ、人ごみの中でもそんなに足を踏ふみつけられはしねえもんだ。」

「ちよいとお黙り。高慢なことをお言いでない、お嬢様がいらつしやるよ。」

「ですからさ、そつちにお嬢様がいらつしやりや、こつちにやあまた滝公、へん、滝の野郎てえ豪傑がついてまさ。」

「あれだもの。」

「どうでえ阿魔、一言もあるめえ恐入ったか。」

「義作さん可加減いらいにおしな。お嬢様は御心配を遊ばしていらつしやるんですよ。」

「だから、その御心配には及びますめえツてこつた。難かしい事ことあない、娘あまさい無事なら可いんでしよう。そこは心得てまさ、義

作が心得たといつちやあ、馬に引摺ひきずられたからとあつて御信仰が薄いでしようが、滝大明神が心得てついでます。今も島野さんに承わりや、あとからついて入んなすつたそうで、何、またあの豪傑が行きさえすりや、」といいかけて、額を押え、

「や、天狗が礮つぶてを打ちやあがる。」

雨三粒降つて、雲間に響く滝の音が乱れた。風一陣！

四十八

「女中さん、降つて来そうでございます、姫様ひいさまにおつしやつて、まあ、お休みなさいましな」と米は程ほど合あいを見計らう。

「ああ、そういたしましたしよろしくねえ、お嬢様。」

黙つて敏活の氣の溢あふれた目に、大空を見ておわした姫様は、これに頷うなずいて御入おんいりがあるうとする。道はもとより、馬べつとう丁義作続いて島野まで、長いものに巻かれた形で、一ひと群むれになつて。米は鍵屋あつて以来の上客を得た上に、当の敵あいての蔵屋むすめの分二名まで取込んだ得意想うべく、わざと後を圧おさえて、周章あわてて胡乱うろ々々する蔵屋むすめの女うえしたに、上下四人をこれ見よがし。

「お懸けなさいまし、」と高らかに謂つた。

蔵屋の倉は堪たまりかねて、睨ねめながら米を摺すりぬ抜けて、島野に走り寄つた。

「旦那様、若衆わかいしさん様とお二方は、どうぞ私わたくしどもへお帰りを願いと

う存じます。」

「そうだ、忘れ物もあるし後で寄るよ。」

「はい、お忘物はこちらへ持って参りましても宜しゅうございませす。申兼ねますがどうぞいらっしやって下さいまし、拝むんでございます、あの、後生になるのでございます。」

「可いじやあないか、何も後にだつてよ。」

義作が仔細しさいを心得て、

「競争をしてるんでさ、評判なんで。おい、姉さん、御主人様がこちらへお褥しとねすわが据すわるから、あきらめねえ、仕方がねえやな。いえさ、気の毒だ、私わっしあ察するがね、まあ堪忍しなさい。」

「それでもどうぞ姫様ひめさまにお願い遊ばして。」

「何をいうんですよ、馬鹿におしなさいねえ。」

と米は傍かたわらから押隔おしてると、敵手あいてはこれなり、倉ぐらは先せんを取られた上に、今のお懸かけなさいましで赫かッとなつてゐる処。

「止してくれ、人、身体からだに手てなんぞ懸かけるのは、汚けがれますよ。」

「何を癩かッたが。」

はりはりつけ「磔つめ。」と角目つのめ立つてあられもない、手先ての突つきああいが腕うでの掴つか

かみあ

合あいとなつて、頬ほの引搔ひっか競き。やい、それと声こゑを懸かけるばかり

で、車夫べつとうも、馬丁ばちやうも、引張ひっぱり凧だこになつた艶福えんぷく家か島野しまの氏しも、女

だから手ても着きけられない。

「留とどめておやり。道みちや、」

「ちよいと、串じやうだん戲ぎじゃあないよ、お前まえ様さん方がたはどうしたもん

です。これお放し、あれさ、お放しというに、両方とも恐しい力だ。こつちはお嬢様がそれどころじゃあないのだのに、お前さんまでがお気を揉ませ申すんだよ。可加減におし、あれさ、可いやね、そんなら私が素裸になつて着物を地に敷いて、その上へ貴女を休ませ申すまでも、お前達の世話にやあならない、どちらへも休みはしないからそう思つておくれ。」とすつきりいった。兩人は左右に分れたが、そのまま左右から、道の袖を捉まえて、ひとと縋つて泣出したのである。道は弱つて手を束ねてぼんやりとするのを見て、勇美子は早やばらばらと音のする雨も構わず、手を兩人の背にかけて、蔵屋と、鍵屋と、路傍に二軒ならんだのを目を配つて、熟と見たまい、

「二人とも聞きな、可いことを教えてあげよう、しよツちゆうそんなことをしては、どちらにも好いいことはないよ。こうおし、お前の処のお客は注文のあつた食物をお前の処から持運ぶし、お前の処のお客はお前の店から持つて行くことにして、そして一月がわりにするの。可いかい、怨みうらみつこ無しに冥利みょうりの可い方が勝つんだよ。」

「おや、お嬢様、それでは客と食物を等分に、代り合つていただきます。それでいてお茶代が別にあつたり何かすると、どちらが何だか分らないで、怨うらみはいつの間にか忘れてしましましょう。なるほどその事ことだよ。さあ、二人とも、手を拍うつたり。」

「やあ、占めろ。」と行って、義作は景気よく手を拍うつた。女むすめは

兩人、晴やかな勇美子の面を拝んだ。

折柄荒増る風に連れて、石滝の森から思いも懸けず、橋の上へ真黒になつて、転けつ、まろびつ、人礫かと凄じい、物の姿。

四十九

あれはと見る間に早や近々^{ちかぢか}と人の形。橋の上を流るるごとく
 驀直^{まつしぐら}に、蔵屋へ駆込むと斉しく、床几^{しょうぎ}の上へ響^{ひびき}を打たせて、
 どたりと倒れたのは多磨太である。白墨狂士は何とかしけむ、その
 ままどたどたと足を挙げて、苦痛に堪えざる身悶^{みもだえ}して、呻吟^{うめ}く

声ほ吠ゆるがごとし。

鍵屋のひとむれ一群はこれを見て棄て置かれず、島野に義作がついて

みせさき

店前へ出向いて、と見ると、多磨太は半面べとり血になつて、

頬から咽喉のどへかけ、例の白薩摩しろさつまの襟を染めて韓紅からくれない。

「君、どうしたんです。」と島野は驚いたが、薄気味の悪さうに

密そつと手をとつて、眉ひそを顰めた。

鍵屋では及およびごし腰こしに向うを伺い、振返つて道が、

「あれ、怪我をしておりますようです、どうしたんでございませう。」

勇美子も夜会結びんずらびの鬢びんずらを吹かせ、雨に頬を打たせて厭いとわず、掛

茶屋の葦よしず簀すから半ば姿をあらわして、

「石滝から来たのじゃあなくって。滝さんとお雪はどうしたろうね、」とこれは心も心ならない。道はずつと出て手招てまねぎをした。

「義作さん、おおい、ちよいとお出いでよ、お出よ。」

「ハッ、」と云つて、威勢よく飛んで帰る。

「何だね、どうしたのさ、あれ大変呻吟うめくじやあないか。」

「え、雀部さんの多磨太なんで、から仕様が無ねえんです。何だそ

うで、全体心こころがけ懸おっかけが悪うがすよ。ありやね、しよツちゆう、あ

の花売を追懸廻おっかけしていたんで、今朝も、お前めえ、後を跟つけて石滝へ

入ったんだと。え何、力になろうの、助けてやろうという贅ぜいたく沢

なんじやあねえんでさ。お道どん、お前の前まいだけれどもう思い切

ってるんだからね、人へえの入らねえ処だし、お前、対あいて手はかよわい

や。そこでもってからに、」といいかけて、ちよつと姫様ひいさまを見上げたので声を密ひそめた。

「だね、それ、狼おつて奴だ。お前めえ、滝の処はやつぱり真暗まつくらだつさ。野郎とうとう、めんないちどりで、ふん捕づかえて、口説くわこうと、ええ、そうさ、長い奴を一本引提ひげて入へつたつて。大だ刀んびらを突着つけの、物凄ものくなつた背後うしろから、襟首えりくびを取とつてぐいと手繰てつけたものがあつたつさ。天狗てんこうだと思おもつて切きつてかかつたが、お前めえ、暗やみじ試合あひで盲目めくらなぐりだ。その内、痛いたえという声こゑがする、かすつたようだけれども、手て応こたがあつたから、占うらめたと、豪えらくなる途端とたんにお前めえ。」

義作は左の耳から頬へかけて掌てのひらですべりと撫なでて、仕方を見せ、

苦にが笑わらいをして、

「片耳うみみざくり、行いつて御覽ごらんじろ、鹿が角を折よつたように片一方ひとへま
 るで形かたちなしだ。呻うめ吟めくのはそのせいさ、そのせいであの通りだ。
 急所いそじやがあせんツて、私わがしもそう言いつたんで、島野しまのさんも、生命いのち
 にやあ別条べつじょうはないつていうけれどね、早く手当てあてをしてくれ、破やぶ、
 破やぶ、破傷風やぶきようふうになるつて騒さわぐんで、ずきりずきりと脈みやくを打うつちやあ
 血ちが湧わくのが肝きもにこたえるつて、いもが、真ま蒼さおです。それでも
 見得みえがあるから、お前まへ、松たいまつ明あきをつけて行いつて見みろ、天狗てんこうの片かた
 翼ばさを切きつて落おとした、血ちみどろになつた鳶とびの羽はねのよようなものが
 落おちてたら、それだと思おもえなんて、血ち迷まつてまさ。大方おほま滝太郎たきだいらう様
 にやられたんでしよう、可いい気味きみだ、ざまあ！ はははは。やあ、

苦しがりやあがつて、島野さんの首つ玉へ嚙かじりついた。あの人がまた、血を見ると癩てんかん癩を起すくらい臆おくびよう病だからね。や、慌ててら、慌ててら、それに一張羅だ、堪たまつたもんじやあねえ。躍こつてやあがる、畜生、おもしれえ！」とばかりで雨を潜くぐつて、此こ奴人いつの気も知らず 剽ひょうきん軽きんなり。

「道、滝さんが怪我をなさりやしないのか。」

「さようでございますね。」と、顔と顔。

五十

「小主わかだんな公お久振ひさびさでございますりしました、よく私わたくしの声にお覚えがござり

ますな。へい、貴方あなたがお目の悪いことも、そのために此家ここの女むすめが黒百合を取りに参りましたことも、早いもので、二日前のことだそうですが、もう市中で評判をいたしております。もつともことのついでに貴方のお噂うわさがござりませんと、三年越こしたお便たよりは遊ばさず、どこに隠れてお在いでなさりますか、分りませんのでござりました。目がお見えなさらないというだけは不吉じゃあござりましたが、東京の方だというし、お年の比ころなり御様子なり、てつきり貴方に違ちがいと、直ぐこちらへ飛んで参り、向うのあの荒物屋で聞いてお尋ね申しました。小主公わかだんな、何は措おきまして御機嫌よろ宜しく。」

「慶造、何につけても、お前達にもう逢いたくはなかつたよ。」

と若山は花屋の奥に端近く端座して、憂苦やっに窶やつれ、愁しゅう然ぜんと

して肩身が狭い。慶造と呼ばれたのは、三十五六の屈くつきよう 竟おのこな漢、火水きたに鍊きたえ上げた鉄くろがねづくり 造あおもむの体格で、見るからに頼たのもしいのが、沓くつぬぎ脱だつの上へ脱だついだ笠かさを仰あおもむ向けにして、両掛りょうかけの旅荷物りぼつもの、小造こづくりなのを縁のに載のせて、慇いんぎん懃かしずに斉眉せいめいく風あり。拓うちわの打伴うちわびたる言ことばを聞いて、憂慮きづかわしげにその顔を見上げたが、勇氣おのおもてあふは己おのが面に溢あふれつ

つ、

「御心中お察し申しますが、人間は四百四病やまいの器うつわ、病疾やまいには誰たれだつて勝かたれませぬ、そんなに氣を落おしなさいますな。小主わかだんな公きみ、良いいお音信たよりがござりますぜ、大旦那様おんなさまもちようどこの春、三月が満期まんきで無事に御出獄ごしゅつごくでござりました。こちらでも新聞しんぶんがござりますなら、疾とくに御存ごぞんじでござりましょう。」

若山は色を動かして、

「そうか、私はまた何も彼も思切つて、わざと新聞などは耳に入れないように勤めているから、そりやちつとも知らずに居た、御無事に。……そうかい、けれども慶造、私はお目にかかられまい。」と額に手を翳して目を蔽うたのである。

「なぜでございます、目をお損いになりましたせいでござりますか。」

「むむ、何それもあるけれども、私が考で、家を売り、邸を売り、おとっさん父様がいらつしやる処も失くなしたし。」

「それは御心配ござりません、貴下が放蕩でというではなし、御望がおり遊ばしたとはいえ、大旦那様が迷惑をお懸け遊ば

した方々の債主へ、少しずつお分けになったのでござりますもの、拓はよくしたとおっしゃったのを、わたくしじき私が直に承わりましてござります。」

「そして今どこにいらつしやるんだな。」

「へい、組合の方でお引取申しました。海でなり、陸でなり、一同旗上げをいたします迄はしばらくおかくれでござります。貴方もこういう処はたちのきお立退たのきになって、それへ合体がよろ宜しゅうござりましょう。ちようどこの国へ参りがけに加州を通りまして、あすこであの白魚の姉御にも逢いました。」

「何、お兼に逢った、加賀といえばつい近所へ来ているのか。」

「さようでござります、この頃盛さかんに工事を起しました、俱利伽羅

鉄道の工夫の中へ交り込まじんで、目星いのをまた二三人も引抜いて同志につけようツて働いておりますんで。一体富山でしばらく働いたそうでござりますに、貴方をお見掛け申さなんだのは、姉御が一代の大脱おおぬかり落でござりましょう。その代り素ばらしいのを一名、こりや、華族で盗賊どろぼうだと申しますから、味方には誂あつらえむ向むき、いざとなりや、船の一艘そうぐらい土蔵を開けて出来るんでござります。金主がつけば竜に翼だ、小主公わかだんな、そろそろ時節到来でござりましょうよ。「と慶造が勇むに引代え、若山は打うち悄しおれて、ありしその人とは思われず。渠かれは非職海軍大佐某氏の息、理学士の学位あつて、しかも父とともに社会の暗雲あんうんに蔽おほわれた、一座のきようせい兇星せいせいであるものを！」

五十一

慶造は言効いいがいなしとや、握にぎりこぶし拳こぶしを膝ひざに置き、面おもてを犯なさんず、

意氣組見えたり。

「小主公わかだんな、貴方あなたはなぜそう弱くおんなすつたね、病やめえなんざ氣

で勝つもんです。大方何でしょう、そんな引込思案をなさいます

のは、目のためじゃあござりますまい。かえつてその御病氣のた

めに、生命いのちも用いらないという女のあるせいでしょう。可ようがす、

何そりや好いた女やつのためにやあ世の中を打棄うっちゃるのも、時と場合

にや男の意地いぢでき、品しなに寄よつちやあ城しろをいっそくひとからげ一百一ひゃくいち束たばにして掌てのひらに

握るのと違わねえんでございませうが、何ですぜ、野郎の方で、
 はあと溜息ためいきをついて女児あまつこの膝すかに縋すがるようじやあ、大概たいげえの奴
 あそこで小首かを傾かしげまさ。汝てめえのためならばな、兜かぶとしころも何なちも用
 らない、そらよ持つて行きねえで、ほんと身体からだを投出なしてくれて
 やる場合あまもあります代りにや、女の達たてひ引く時なんざ、べらんめえ、
 これんばはしたかしの端はしたをどうする、手の内あ受けねえよ、かなんかで
 横つらツ面つらへ叩つきつけるくらいでなくツちやあ、不可いけませんや。|| 苦
 労あしもする、させもする|| ていのはそりやあ心意こころ気でさ。||
 慶造あは威勢いせいよくほんと一ツ胸むねを叩たたいた。

「ここにあるこツてす。顔かほへ済すまねえをあらわして、さも嬉うれしそ
 うに難ありがて、苦勞くろうさせるなんて弱ねい音ねを出だして御覽ごらんじろ、奴やつこさん

たちまちなめツちまいますぜ。殊に貴方だ、誰だと思つてるんだ、
 お言ことばの一ツも懸けられりや勿もつてえ体ねえと心得るが可い位の扱いで、
 結構でがす。もつとも、まあこうやって女の手一つで立過たてすぎして、
 そんな恐ねえ処へ貴方のために参つたんだ、憎くはありません、
 心中者だ。ですが、そりや私わつしどもはじめ世間で感心する事で、当
 の対手あいては何の女むすめツ子の生命いのちなんざ、幾つ貰つたつて髻屋かもじやにも売
 れやしねえ、そんな手間で気の利いた香こうの物でも拵こしらえろと、こう
 いった工合ぐあいでなくツちや色男は勤まりませんよ。何でも不便ふびんだ、
 可愛いと思ふほど、手荒く取扱つて、癩かんしやく癩癩を起してね、横よこ
 頬つらを撲はりのめしてやりさえすりや惚れた奴あ拝みまさ。貴方も
 江戸えど児こじゃあがあせんか。いえさ、若山さんの小主公わかだんなでしよう。

女あまの心しんじゆうだて中立ちゅうりつを物珍ものぢんらしそうに、世の中にやあ出いねえの、おいらこれツきりだのと、だらしのねえ、もう、情婦いろを拵しらえるのと、坊主ぼくしになるのとは同おんなじ一ひとものじやあございませんぜ。しかしまあめくら盲目めくらにおんなすつたから、按摩あんまにやあかけがえのねえ女めくらだと、拜まがんでるんでしよう。でれでれとするのはお金子かねのある分ぶんだ、貴方あなたのなんぎ、女あまにすが縋すがるんだから堪たまりませんや。え、もし、そんなこつちやあ女あまにだつて愛想あいさうをつかさねますぜ。貴方あなたほどの方がどういうもんです。いや、それとも按摩あんまさんにやあ相当ちやうたうか。」と、声を激げきましていいながら、慶造けいぞうは、目の見えぬ、窶やつれた若山わかしやまの面おもてを見守みまもつて、目には涙なみだを湛たえていた。

「慶造！」と一喝いっかくした、渠かれは蒼あおくなつて、屹きつと唇くちびるを結むすんだ。

「ええ、」

「用意が出来たらいつでも来い、同志の者の迎むかいなら、冥途めいどからだつて辞さないんだ。失敬なことをいう、盲人めくらがどうした、ものを見るのが私の役か、いざといって船出をする時、船を動かすのは父おとっさん 上の役、錨いかりを抜くのは慶造貴様の職だ。皆みんなに食事をさせるのはお兼じゃあないか。水先案内もあるだろう、医者もあろう、船の行く処は誰が知ってる、私だ、目が見えないでも勝手な処へ指揮さしずをしてやる、おい、星一ツない暗がりでも燈明台なんぞあてにするには及ばんから。」

と説き得て、拓は片手を背後うしろへついて、悠然として天井を仰いだ。

「難ありがと有うござります。おお、小主公わかだんな。」と、慶造は思わず縁側に額をつけた。

五十二

「いやもう久ひさしぶりで癩癩かんしゃくをお起しなすつて、こんな心持の可いことはござりません。わたくし私や変な癖で、大旦那と貴方の癩癩声さえ聞きや、ぐつとその溜飲りゆういんの下りますんで。へい、それわたくしでも安心でござります、ついお心持を丈夫にしようとして前まへのようさきに太平楽は並べましたものの、私わたくしも涙が出ます、実は耐こらえておりました。」

慶造は情なさけなさそうに笑いながら、

「大旦那様はそんなにも有仰おつしやりますまいが、貴方の御病氣の様子を奥様がお聞きなすつて御覧ごろうじろ、大旦那様の一件で氣病きやみでお亡なくなり遊ばしたようなお優しい、お心弱い方がどんなにお歎なげきでござりましょう。今じやあ仏様で、草葉の蔭から、かえつて小主わかだん公なをお守りなすつていらつしやるんで、その可愛い貴方のためにそういう処へ参りました娘なら、地獄だつて、魔所だつて、きつとお守りなさいませうから、御心配にやあ及びますまい。のぞみ望のぞみの黒百合の花を取つてやがて戻つて参りませうが、しかし打うつち遣やつちやあおかれません、貴方に御内縁の嬢さんなら、私わたくしにや新夫人様にいおくさま。いや話は別で、そうかといつて見ております訳ではご

ざりません。殊に千破矢様というのがその後へおいでなすつたという風説うわさ、白魚の姉御がいった若様なんで、味方の大将を見殺みころしにはされません。もつとも直ぐにその日、一昨日おとといでござりますな、少すくなからぬ係かかり合あいの知事様の嬢さんも、あすこの茶屋まで駈着かけつけましたそう。あれそれと小田原をやつてる処へ、また竜川とかいう千破矢の家の家老が貴方、参つたんだそうで、御主人の安否は拙者が何かで、昔取つた杵きねづ柄かだ、腕うでに覚えがありますから、こりや強うがす、覚悟をして石滝へ入ろうとすると、どうでございましょう。四五間しかないそうですが、泥水を装もつて川へ一時に推出して来た、見る間に杭くを浸して、早や橋板の上へちよろちよろと瀬せが着きく騒さわぎ。大変だという内に、水足が来て足を嘗なめたつ

ていうんです。それがために皆がみんな一雪崩ひとなだれに、引返ひっかえしたつています。が、もつとも何だそうで、その前さきから風が出て大降になりました様子でござりますな。」

「ああ、その事は昨日知事の内きのうから、道とかいう女中が来て私にいった。ちよいちよい見舞つてくれるんだ、今日もついにさき前に帰つたから聞いているよ。」

「それからはまるで三日、富山中は真暗まっくらで、止やむかと思つたと瀧のように降出します。いや神通が切れた、郷屋敷田圃たんぼの堤防つみみが崩れた、牛の淵ふちから桜木町へ突懸つっかる、四十物町が少し引くかと思つと、総曲輪うづみが湖うみだという。それに、間を置いちやあ大雨ですか、ら市中は戦いくさです。壁くずが壊れたり、材木が流れたりしますんですが、

幸いまだ家が流れる程じゃあないので、ちようど石滝の方は橋が出たという噂ですから、どうにか路は歩行あるかれましよう。お目に懸かつて、いよいよと貴方でございます日にやあ、こつちの嬢さんは御主人なり、一方にやあ姉御がいった若様もいらつしやる。どうぞごいませう、この辺は水は大丈夫でございませうか、もしそれが心配だと貴方ばかりではお目の御不自由、と打遣うっちゃつちやあ参られませんが。」

「慶造、六十年近くもここに居る荒物屋の婆さんがいうんだ、水には大丈夫だそうだから、私には構わんでも可い。」

心安く言つたので、慶造は雀躍こおどりをして、

「それじゃあ後髪を引かれねえで、可うがす。お二人の先途を見

届けて参りましょう。小主公わかだんなお氣を着けなすつて、後のちともいわず直ぐに、」

といった。折からの雨はまた篠しのを束つかねて、暗々たる空の、殊に黄昏たそがれを降静める。

慶造は眉を濡らす雫しずくを払つて、さし翳かざした笠を投出すと斉ひとしく、七分三分に裳もすそをぐい。

「してこいなと遣附やっつける、や、本雨だ、威勢が可いぜえ。」

五十三

開戸から慶造が躍出したのを、拓は縁に出て送つたが、繁吹しぶきを

浴びて身を退いて座に戻った、渠は茫然として手を束ぬるのみ。
 半は自分の体のごときお雪はあらず、余の大降に荒物屋の媪も見
 舞わないから、戸を閉め得ず、燈を点けることもしないで、渠は
 ただ滝のなかに穴あるごとく、雨の音に紛れて物の音もせぬ真
 暗な家の内に数時間を消した。夜も初更を過ぎつと覺しい時、
 わずかに一度やや膝を動かして、机の前に寄つたばかり。三日の
 内にもかばかり長い間降詰めたのは、この時ばかりであつた。お
 どろおどろしい雨の中に、遠く山を隔てた隣国の都と思うあたり、
 馳違う人の登音、ものの響、洪水の急を報ずる乱調の湿つた
 太鼓、人の叫声などがひとしきりひとしきり聞えるのを、奈
 落の底で聞くような思いをしながら、理学士は恐しい夢を見た。

こはいかに！
けんこんべつにてんあり 乾坤別有天。いずこともなく、天麗うららかに

晴れて、黄昏か、朝か、気清すずしくして、仲秋のごとく澄渡つた空
 に、日も月の形も見えない、たとえば深山みやまにして人跡ひとあとの絶えた
 る処と思うに、東西も分かず一筋およそ十四五町の間、雪のごと
 く、霞のごとく敷詰めた白い花。と見ると卵うの花のようで、よく
 山奥の溪たにあい間、流ながれに添なうて群生むれずる、のりうつぎ（サビタの一種）
 であることを認めた

時にそよとの風もなく、花はただ静かに咲満ちて、真白まっしろな中
 に、ここかしこ二ツ三ツ岩があつた。その岩の辺りで、折々花が
 揺れて、さらさらと靡なびくのは、下を流るる水の瀬が絡まるのであ
 ろう、一鳥声せず。

理学士は、それともなく石滝の奥ではないかと、ふと心着いて
 恍惚うっとりとなる処へ、吹落す疾風はやて一陣。蒼空あおぞらの半を蔽おほうた黒い鳥、
 片翼およそ一間余りもあるうと思う驚わしが、旋風つむじを起して輪になつ
 て、ぱつと落して、そのうつぎの花に翼を触れたと見ると、あつ
 という人の叫声。途端に翻つて舞上つた時に、粉吹雪こくぶきのごとくむ
 らむらと散つて立つ花片はなびらの中から、すつくと顛あらかれた一個の美少
 年があつた。捲まくり手での肱ひじを曲げて手首から、垂たらたらと血が流れる
 拳こぶしを握まなつて、眦まなじりの切上つた鋭い目にはツたと敵を睨にらんだが、打仰
 ぐ空次第に高く、驚は早や光のない星のようになつて消えた。

少年は、熟じつとその勁敵けいてきの逸せし去つたのを見定めた様子であつ
 たが、そのまま滑なめかな岩せなに背を支えて、仰あおむ向けに倒れて、力なげ

に手を垂れて、いた 太く疲れているものようである。

やや有つて、今少年が潜んでいた同じ花の下から密そつと出たのは
 お雪であつた。黒髪は乱れて頸えりに纏もつれ頬かかに懸り、ふツくりした頬
 も肉しし落ちて、裾すそも袂たもともところどころ破れ裂けて、岩すかに縋り草ふを踏
 み、荊棘いばらの中を潜り潜つた様子であるが、手を負うた少年の腕かいなに
 縋すがつて、懐紙ふところがみきずで疵きずを押えた、紅くれないはたちまちその幾枚かを通し
 て染まつたのである。

お雪は見るも痛々しく、目も眩くれたる様さまして、おろおろ声で、
 「痛みますか、痛みますか。」というのが判はつきり然聞える。

眠れるか、少年はわずかにその頭かしらを掉ふつたが、血とまは留とまらず、圧おさ
 えた懐紙たまは手にも耐たまらず染まつたので、花の上に棄てた。一点紅、

お雪は口を着けてその疵きずぐち口を吸ったのである。

唇が触れた時、少年は清すずしい目を睜みはつて屹きつと見たが、また閉じて身動きもせず、手は忘れたもののようにお雪がするままに任せていた。

兩人が姿を見ると、我にもあらず、理学士が肉しむらは動いたのである。

五十四

しばらくするとお雪は帯の端を折返して、いつも締めている桃色の下メ《したじめ》を解いて、一尺ばかり曳ひきだ出すと、手を掛け

た衣きぬは音がして裂けたのである。

その切きれで疵きずを巻まいて、放はなすと、少年はほとんど無意識のごとく手を曲まげて胸むねに齎もたらして咽喉のどのあたりへ乗せたが、疲つかれてすやすやと睡ねむった様子。顔のあたり、肩のあたり、はらはらと、来て、白く溜たまつて、また入い乱らんれて立つは、風かぜに花はな片びらが散ちるのではない、前まへに大驚おどろがうつぎの森の静肅しじゆを破やぶつて以来、絶たえず両人ふたりの身みの辺あたりに飛交とう、花の色いろと等しい、小さな、数知かずれぬ蝶々てつてつで。

お雪ゆきは双の袂たもとの真ま中なかを絞しぼつて持ち、留とどまれば美しい眉まゆを顰ひそめる少年の顔の前まへを、絶たえず払い退のけ、払い退のけする。その都度し死しる装束しょうぞくとして身装みなりを繕つくろつたらう、清きよい襦じゆ袢ばんの紅くれないの袂たもとは、ちらちらと蝶てつの中に交まつて、間まあれば、おのが肩かたを打ち、且かつつ胸むねのあ

たりを払つていたが、たちまち顔を顰めて唇を曲げた。二ツ三ツ体を振つたが慌しい、我を忘れて肌を脱いだ、単衣の背を溢れ出づる、雪なす膚にも纏るる紅、その乳のあたりからも袂からも、むらむらとして飛んだのは、件の白い蝶であつた。

我身半はその蝶に化したるかど、お雪は呆れ顔をして身内を見たが、にわかには色を染めて密と少年を見ると、目を開かず。

お雪は吻と息を吐いて、肌を納めようとした手を動かすに違なく、きやツといつて平伏した。声に応じて少年はかツぽと匆ね起きて押被さり、身をもつてお雪を庇う。娘の体は再び花の中に埋もれたが、やや有つて顕れた少年の背には、凄じい鉤形に曲つた喙が触れた。大鷲は虚を伺つて、ところの隙なく蒼空から襲

い来たきたつたのであつた。

倒れながら屹きつとその面おもてを上げると、翼で群蝶かきみだを搔乱かきみだして、白

い烟けぶりの立つ中で、驚は颯さつと舞い上るのを、血走つた目に瞶みつめなが

ら少年は衝つと立つた。思わず胸に縋るお雪の手を取つて扶たすけなが

ら、行方を睨にらむと、谷を隔はりて遙はるかに見えるのは、杉ともいわず、

栃とちともいわず、檜ひのきともいわず、一一ふたかかえ抱みかかえに余る大喬木だいきようぼく

がすすく天をさして枝を交えた、矢来のごとき木間このま々々には切

倒したと覚しき同じほどの材木が積重よこたなつて、横わつて、深森の

中うち自のから徑こみちを造るその上へ、一列になつて、一ツ去れば、また一

ツ、前なるが隠るれば、後なるが顕あれて、ほとんど間断なく牛が

歩いた。いずれも鼻頭はなづらにおよそ三間余あまりの長綱をつけて、姿形も

森の中に定かならず、牛曳うしひきと見えるのが飛々に現れて、のっそり悠々として通っていたのであるが、今件くだんの大鷲が、風を起して一翼に谷を越え、その峰ある処、件の森の中へあからさまに入つたと思うと、牛は宙に躍つて跳はねくる狂うのが、一ツならず、二ツならず、咄嗟とつさの間に眼かんまなこを遮つて七ツ数えると止やんだ。

「しつかりしねえ、もう可いぜ。」といつて、少年は手を放した。

お雪は血の氣を失つた顔を、恐る恐る上げて仰いだが、少年を見ると齊ひとしく身みを顛ふるわした。

「あらまたお背中を、ちよいと大変でございますよ。」

「可いつてことよ、こればかりが何だ。」といったが、あわれ身を支えかねたか、またどつさりと岩に腰を掛ける。

お雪は失心の体ていで姿を繕つくろうこともせず。両膝を折おつて少年の足あしもとひざまず許ゆるみに跪ひざまずいて、

「この足手纏あしてまといさえございませねば、貴方お一方はお助たすかり遊ばすのに訳わけはないのでございます。」
と、いう声も身も顫ふるえたのである。

五十五

「私はどういたしましょう、花も取とつて頂きました上に、この山に入りましてから貴方ばかり酷ひどい目にお逢あわせ申まして、今までに、生命いのちをお取とられ遊あそばすかと思おもいましたことが幾いくたびあつたでござ

いましよう。体も疵きずに遊ばして庇かばつて下さいますから、勿体ない、
 私は一ヶ所擦剥すりむきました処もございません。たとい前さきの世の約束
 事でも、これまでに御恩を受けますことはないのをごさいます。
 どうぞ私を打遣うちやつてお逃げなすつて下さいまし、お願いねがいでござい
 ます。貴方にこうして頂きますより殺されます方がどんなに心安
 いか分かりません。失礼ながらお可哀そうで、片時もこんな恐こわい処
 に貴方をお置き申したくはございませんから。」と、嗚咽おえつしてい
 う声も絶断たえだえ。

少年はかえつてつツけんどんに、

「生意気な講釈をするない、手前達てめえたちの知つたこツちやあねえや、
 見殺しにされるもんか。しかし、おい、おいらも、まさかこれほ

どとは思わなかつたが、随分手に余る上に、ものは食わずよ。どこへ出て可いか方角が分らねえし、弱つた。活きてる内や助けてやらあ、不可なかつたら覚悟しねえ。おいら父様はなし、母おつかさんはなしな様は失くなつたし、一人ぼつちで心細かつたつけが、こんな時にやあさつぱりだ、情なくも何ともねえが、汝は可哀そうだな。」といつて、さすがの少年が目に暗涙を湛えて、膝下に、うつぎの花に埋もれて蹲る清い膚と、美しい黒髪とが、わななくのを見た。この一雫が身に染みたら、荒鷲の嘴に貫かれぬお雪の五体も裂けるであらう。

一言の答えも出来ない風情。

少年も愁然として無言で居たが、心すともなく極めて平氣

な調子で、

「しようがねえやな、おい、そうしたら一所に死のうぜ。」と、
自からうなず頷くがごとく顔を傾けていった。

理学士は夢中ながら、おのが命をもつて与えんとして、三年の
間朝夕室を同じおなじゆうした自分の口からも、かほどまでに情の籠こもつ
た、しかも無邪気な、罪のないことをいい得なかつたことを思つ
て、ひしと胸を打たるるがごとくに感じたのである。

我にもあらず、最後を取乱したお雪の耳にも、かかる言は聞ことばえ
たのであろう。

「勿体のうございます。」と、神に謝するがごとくにいった。

「その意で諦つめあきらめねえ。おい、そう泣くのは止せ、弱虫だと見ると

馬鹿にするぜ、ももんががあ。」と行って大空を。

「はい、もう泣きはいたしません。私が先へ覚悟をしておりますしたものを、お可恥はずかしゆうございます。」と、手をつけて面を上げた。そして顔と顔を見合せた時、少年はほとんど友白髪まで添遂みようとげた夫婦のごとく、事もなげに冷い玉かと思えるお雪の肩に手を掛けて、

「助かったら何よ、おいらが邸やしきへ来ねえ、一所に楽をしようぜ、面白く暮そうな。」と、あたかも死かけものを賭にしたこの難境は、将来のその楽たのしみのために造られた階梯かいていであるように考えるらしく、絶望した窮厄きうあつの中に縷る々として一脈の靈光を認めたとく、嬉しげに且つ快げにいつて莞爾かんじとした。いまわの際に少年は、刻下無意

識になつた恋人に対して、ため為に生命を致すその報酬を求めたのではない。繊弱小心の人の、知死期ごの苦痛の幾分を慰めんとしたのである。

拓は夢に、我は棄てられるのであらうと思つた、お雪は自分を見棄てるであらうと思つた。少年がその時のその意氣、その姿、その風情は、たとい淑徳貞操の現化げんげした女神にょしんであつても、なお且つ、一糸蔽おほえる者なきその身を抱いだかれて遮おほぎり難く見えたから。

五十六

理学士はまた心から、十とおの我に百を加えても、なお遥はるかにその

少年に及ばないことを認めたのである。

たとえば己おのが目は盲しいたるに、少年の眼まなこは秋の水のごとく、清く澄んで星のごとく輝くのである。我はお雪の供給いに活きて、渠かれをして石滝の死地に陥おちいらしめたのに、少年はその優しき姿と、斗大の胆をもつて、渠を救うために目前荒鷲と戦っている。しかも事の行ゆき懸がりから察し、人の語る処に因れば、この美少年は未見の知己、千破矢滝太郎に相違ない。千破矢は華族だ、今渠きたが来れ、共にこの労を慰めんといったのは、すなわちお雪を高家の室となさんと、その容貌ようぼうと、その意気と、その容よう貌ぼうと、風采ふうさいと、その品位をもつてして誰がこれうけを諾がわざるべき。拓たくが身をもつてお雪と地位をかえたとすれば、直ちに我を棄てて渠に

愛を移すのは、世に最も公平なことであると思つて、満身の血が冷くなつた。けれどもあえて数の多量なるものが、愛を購あがない得るのではなかつた。お雪は少年が優しく懸けた、肩の手を静かに払つて、颯さっと赤らむ顔とともに、声の下で、

「はい、私はあのお邸へ上ります訳には参りませんのでございませぬ。」

恐る恐るいうおもはゆげな状さまを、少年は瞻みまもりながら、事もなげにいった。

「なぜだ。」

「内に拓さんという方がございます、花を欲しいと存じましたのも、皆みんなその人のためなんですから。」と死を極めたものの、かえ

つてかかることを憚はばからず言つて差俯さしうつむ向く。

少年は屹きつとなつて、たちまち顔色を変えたのである。

理学士はこの時少年のいうことを聞こうとして、思わず堅睡かたずを飲んだ。

夢中の美少年に憤つた色が見え、

「おいら、島野とは違ちがうぜ。今までな、おい、欲ほしい思つたものは取らねえこたあねえ、しようと思つたことをしねえこたあなかつたんだ。可いいじゃあないか、不可いけねえツて？ 不可いけねえか。うむ
 そうか、可いいや、へん、おいら詰つまらねえことをしたぜ。」

と投なげるようにいつて、大空を恍惚うつつとりと瞶みつめた風情。取留とどめの
 ない夢の想おもいで、拓ひらはこの時少年がお雪に向つてなす処は、一つ一ひとつ

つ皆思うことあつて、したかのごとく感じられて、快活かくのごとき者が、恋には恐るべき神秘を守つて、今までに秋毫しゅうごうも、さる気色のなかつたほど、一層大いなる力あることを感じて、愕が然くぜんとした。同時に今までは、お雪を救うために造られた、巖いわに倚よる一個白面、朱唇、年少、美貌びぼうの神将であるごとく見えたのが、たちまち清く麗しき娘を迷わすために姿を変じた、妄執わうしやくの蛇であるど心着いたが、手も足も動かず、叫ばんとする声も己おのが耳には入らなかつた。

鷲じゆがその三回目の襲撃を試みない瞬間、白い花も動かず、二人は熟じつとして石に化したもののように見えた。やがて少年は袂を探つて、一本ひともとの花を取出した。学識ある理学士が夢中の目は、直

ちにそれを黒百合の花と認めたのである。

これがためにこそ餓えたり、傷付いたれ、物怪もののけある山に迷うたれ。荒鷲には襲わるる、少年の身に添えて守つていたと覚ゆるのを、掴つかむがごとく引出して、やにわに手を懸けて撈むしり棄てようとした趣であつた。けれども、お雪が物いいたげに瞳を動かして、衝と胸を抱いて立つたのを、卑いやしむがごとく、嘲あざけるがごとく、憎むがごとく、はた憐あわれむがごとくに熟じつと見て、舌打して、そのまま黒百合をお雪の手に与えろと齊ひとしく、巖を放れてすつくと立つて、「不可いけねえや、お前良人めえたいしがあるんなら、おいら一所に死ぬのは厭いやだぜ。じゃあ、おい勝手にしねえ。」

といい棄てて、身を翻すとたちまち歩き去つた。

五十七

我が手働かず、足動かず、目はただ天涯の一方に、白き花に埋うづもれたお雪を見るばかり。片手をもつて抱き得るような、細い窠やつれた妻の体を、理学士はいかんともすることならず。

お雪は黒百合の花を捧げて、身に影も添わず、淋しく心細げにたたずゝんでいたが、およそ十歩を隔てて少年が一度振返つて見た時、糸をもて操らるるかと二足三足後を追うたが、そのまま素気なくそつけ向うを向いてしまったので、力無げに歩あゆみを停めた、目には暗涙をた湛たえたり。

やがて後姿に触れて、ゆさゆさと揺ぶられる、のりうつぎの花の梢は、少年を包んで見えなくなつた。

これをこそは待ち得たれ、黒い星一ツ遙か彼方の峰に現れたと見ると、風に乗つて矢のごとくに颯と寄せた。すわやと見る目の前の、鷲の翼は四辺を暗くした中に、娘の白い膚を包んで、はたと仰向に僵れた。

「あれえ、」

叫ぶに応じて少年は、再び猛然として顛れたが、宙を飛んで躍りかかった。拳を握つて高く上げると、大鷲の翼を踏んで、その頸を打つたのである。

「畜生、おれが目に見えねえように殺せやい！」

と怒気満面に溢れて叱咤した。少年はほとんど身を棄てて、その最後の力を尽したのであろう。

黒雲一団渦く中に、鷲は一双の金の瞳を怒らしたが、ぱつと音を立てて三たび虚空に退いた。二ツ三ツ四ツ五ツばかり羽は斑々として落ちて、戦の矢を白い花の上に残した。

少年が勇威凜々として今大鷲を搏った時の風采は、理学士をして思わず面を伏せて、僵れたる肉一団何かある、我が妻をもてこの神将に捧げんと思わしめたのである。

かくして少年ははた掌を拍つて塵を払ったが、吐息を吐いて、さすがに心弛み、力落ちて、よろよろと僵れようとして、息も絶えだえ、々なお雪を見て、眉を顰めて、

「ちよツ、しようのねえ女だな。」

やがて手をかけて、小脇に抱上げたが、お雪の黒髪は逆さかさまに乱れて、片手に黒百合を持ったのを胸にあてて、片手をぶらりと垂れていた。大鷲は今の一撃いかりに怒をなしたか、以前のごとく形も見えぬまでは遠く去らず、中空いかのぼりに凧のごとく居すわつて、やや動き且つ動くのを、屹きつと睨にらんでは仰いで見たが、衝つと走つては打仰ぎ、走つては打仰ぎ、ともすれば咲き満ちたうつぎの花の中に隠れ、顕れ、隠れ、顕れて、道を求めて駆けるのを、拓は追慕うともなく後を跟つけて、ややあつて一座の巖石、形墓ひきがえるあたまの天窗ゆくてに似たのが前途ふさぎを塞いで、白い花は、あたかも雪間の飛々に次第に消えて、このあたりでは路とともに尽きて見えなくなる処に來た。

もとより後は見も返らず、少年はお雪を抱いたまま、ひだを踏み、角に縋すがつて蝙蝠こうもりの攀よずるがごとく、ひらりひらりと巖いわの頂おに上った。この巖の頂は、渠かれを載せて且あゆみつ歩を巡らさしむるに余あまりあるものである。

時に少年の姿は、高く頭上の風に驚を漾ただよわせ、天を頂いて突立つったつたが、何とかしけむ、足踏あしづみをして、

「滝だ！ 滝だ！」と言つて喜びの色は面おもてに溢れた。ただ聞く、
 どうしようと水の音、巖もゆらぐ響ひびきである。

少年はいと忙せわしく瞳を動かして、下りるべき路を求めたが、衝つと端に臨んで、俯向うつむいて見る見る失望の色を顕あらわした。思わず嘆息をして口惜しそうに、

「どこまで崇たたるんだな、獣けだものめ。」

五十八

少年を載せた巖は枝に留とどまつた梟ふくろのようで、その天窓あたま大きく、尻しつツこけになつて幾いくせんじん千仞わきまとも弁わえぬ谷の上へ、蔽おおい被かぶさつて斜ななめに出いでいる。裾すそを踏ふんで頭あたまを叩たたけば、ただこの一座山いざなのごとき大奇巖おかしわは月界げつがいに飛とばんず形かたち。繁さかれる雑種ざつしゆの喬きようぼうく木こは、梢こずえを揃そろえて件くだんの巖いわの裾すそを包かんで、滝たきは音ねばかり森もりの中に聞きえるのであつた。頂たかなる少年せうねんは、これこれを俯ふし瞰みおろして、雲うみの棧かけはし橋はしのなきに失な望なした。しかるに倒さかさに伏ふして覗のぞかぬ目めには見みえないであらう、尻しつツこけに

なつた巖いわおの裾すそに居て、可怪あやしい喬木の梢しとねなる樹々の葉はを褥しとねとして、

大胡坐おおあぐらを組んだ、——何等なにかのもので。

面かお赭あかく、耳あお蒼あおく、馬うまばかりなる大ききもの、手足てあしに汚れた

薄樺色うすかばいろの産毛うぶげのようで、房々やわらとして柔かに長い毛けが一面いっぺんの生い

て、人けだものか獣けだものかを見分みわかぬが、朦朧もうろうとしてただ霧きりを束つかねて鑄い出し

たよう。真俯向まうつむきになつて面おもてを上げず、ものとも知らぬ濁だみたる声

で、

「猿の年の、猿の月の、猿の日に、猿の年の、猿の月の、猿の日

に、猿の年の、猿の月の、猿の日に、」と支干えとを数かずえて眩つぶやきなが

ら、八九寸伸びた蒼黒い十本の指ゆびの爪つめで、件くだんの細々こまごまとした、突つけ

ば折れるばかりの巖の裾すそをごしごしと搔かきむし撈むしる。時ときに手

を留めてその俯向いた鼻先と思う処を、爪をあつめて巖の欠を掘取ると見ると、また搔きはじめた。その爪の切入るごとに、巖はもろくぼろぼろと欠けて、喰い入り喰い入り、見る内に危く一重の皮を残して、まさに断切れて逆さまに飛ばんとする。

あれあれ、とばかりに学士は目も眩れ、心も消え、体に悪熱を感じざるばかり、血を絞つて急を告げようとする声は糸より細うして己が耳にも定かならず。可恐しきものの巖を切る音は、肝先を貫いて、滝の響は耳を聳るようであった。

羽撃聞えて、驚は颯と大空から落ちて来た。頂高く、天近く、仰げば遙かに小さな少年の立姿は、狂うがごとく位置を転じて、腕白く垂れたお雪の手が、空ざまに少年の頭に縋ると見た。途端

に巖は地を放れて山を覆えるがごとく、二人の姿はもんどり打つて空に舞い、滝の音する森の中へ足を空に陥おちいつたので、あつと絶叫したが、理学士は愕がくぜん然ぜんとして可おそろし恐い夢から覚めたのである。

拓は茫然自失して、前さきのまま机に頬杖を突いた、その手も支えかねて僵たおれようとしたが、ふと闇やみのままうとうとと居眠つたのに、いつ点ついたか、見えぬ目に燈ともが映しびるのに心着いた。

確かに傍かたわらに人の氣勢けはい。

五十九

「誰だ、」と極めて落着いて言ったが、声は我ながら異常なもの

であつた。

急に答がないので、更に、

「誰だ。」

「はい、」と幽かに応えた。

理学士が一生にただ一度目を開いて見たいのは、この時の姿であつた、今のは疑も無いお雪である。

これを聞いて渠は思わず手を差延べて、抱こうとしたが、触れば消失せるであらうと思つて、悚然として膝に置いたが、打戦く。

「遅くなりましたして済みませんでした、拓さん。」

と判然、それも一言ごとに切なく呼吸が切れる様子。あり

しがごとき艱難かんなんの中から蘇生よみがえつて来た者だということが、ほ
ぼ確かめらるると同時に、吃驚びっくりして、

「おお、お雪か、お前！　そして千破矢さんはどうした、」と数
分前、夢に渠と我とともにあつた少年の名をいった。

お雪はその時答えなかつた。

理学士は繰返してまた、

「千破矢さんはどうしたんだ、」と、これは何心なく安否を聞いたのであつたが、ふと夢の中の事に思い当つた。お雪の答が濁つたのを、さてはとばかり、胸を跳おどらして口を噤つぶむ。

しばらくして、

「送って来て下さいましたよ。」

「そして」

「あの、お向むこうの荒物屋に休んでいらつしやいます。」

「そうか、」といったが、我ながら素気そっけなく、その真心を謝するにも、怨うらみをいうにも、喜ぶにも、激して容易たやすくは語ことばも出でず。あまりのことに、生きて再び家に帰つて、現うつのごとき男を見ても直ぐにはものも言懸けなかつた、お雪も同じ心であろう。ものいう目にも、見えぬ目にも、二人ひと齊しく涙を湛たえて、差俯さしうつむ向いて黙然とした。人はかかる時、世に我あることを忘るるのである。

框かまちに人の登あしおと音がしたが、慌あわただしく奥に来て、壮さかんな激しい声は、

沈んで力強く、

「遁にげろ、遁げねえか、何をしとる！」

お雪は薄暗い燈ともしびの影に、濡れしおれた髪を振って、蒼白あおしろい顔を上げた。理学士の耳にも正に滝太郎の声である、と思うも疾としや！

「洪水みずだ、しっかりしろ。」

お雪は半ば膝を立てて、滝太郎の顔を見るばかり。

「早くしねえかい、べらぼうめ。」と叱るがごとくにいつて、衝つと縁側に出た、滝太郎はすつくと立った。しばらくして、あれといつたが、お雪は蹶はねお起きようとして燈ともしを消した。

「周章あわてるない、」といつて滝太郎は衝つと戻つて、やにわにお雪の手を取つた。

「助けてい！」と言いさまに、お雪は何を狼狽うろたえたか、扶たすけられ

た滝太郎の手を振放して、僵たおれかかつて拓の袖を千切れよと曳ひいた。

六十

お雪は曳いて、曳き動かして、

「どうしましょう、あれ、早く貴方あなた、貴方。」

拓は動じないで、磐石のごとく坐っているの、思わず手を放して、一人で縁側へ出たが、踏ふみすべ込んだのか腰を突いた。しばらくは起きも得なかつたが、むつくと立上ると柱に縋さつて、わなわなと顛ふるえた。ただ森しんとして縁板さつが颯と白くなつたと思うと、水は

ひたひたと畳に上った。

「ええ、」と行って学士も立った。

「おそろ可恐しい早さだ、放すな！」と滝太郎は背をせなかお雪に差向ける。

途端にすさま凄じい音がして、わつという声が沈んで聞える。

「お雪！ お雪。」

学士も我を忘れて助をたすけ呼んだのである。

「あれ、若様、拓さんは、拓さんは目が見えません。」

「うむ、」

「助けて下さい、拓さんは目が見えません。」

「二人じゃあ不可いけねえや、」

「内の人を、私の夫を。」

「おいら、お前でなくつちやあ、」

「厭いや、厭ですよ、厭ですよ、」と、捕うる滝太郎の手を摺抜ける。

「だって、おめえていしゆ汝の良人なら、おいらにやあ敵かたきだぜ。」

「私は死んでしまいます。」

「へへ、駄目だい、」と唾つばするがごとく叫んで、滝太郎は飛んで拓に來た。

「滝だ、大丈夫だ。」

「お雪には義理があるんです、私に構わず、」といって、学士は身すきを退つて壁にひたりと背せなをあてた。

「あれ、拓さん、」とばかり身を急あせるお雪が膝は、早や水に包まれているのである。

「いや、いけない、」と学士は決然として言放った。

滝太郎は真中まんなかに立つて、件の鋭い目くだんに左右をみまわして瞳を輝かした。

「ええ二人ともつかまんな。構うこたあねえ、可いけなけりや皆みんなで死しのう。」

雨は先刻さつきに止やんで、黒雲くろくもの絶間たえまに月が出ていた。湯の谷の屋根ところどころに処々とこ立てた高張あかりの明さが射して、眼まのあたりは赤く、四方へ黒い布を引ひいて漲みなぎる水は、随処きつこうがた、亀甲形うねに畝うねり畝うねり波を立てて、ざぶりざぶりと山の裾へ打当てる音がした。拓を背にし、お雪うなじを頸うなじに縋ならせて、滝太郎は面おもても触ふらず件くだんの洞穴ほらあなを差して渡つたが、縁あばらやを下りる時、破屋あばらやは左右に傾いた。行くことわずかに

して、水は既に肩を浸した。手を放すなどいって滝太郎が水を含んで吐いた時、お雪は洪水みずの上に乗上つて、乗着いて、滝太郎に頬摺ほすしたが、

「拓さん堪忍して。」

声を残して、魚うおの跳おどるがごとく、身ひるを翻がえして水に沈んだ。遙かにその姿の浮いた折から、荒物屋の媪ばばなど、五七人乗った小舟こぎよを漕寄こぎよせたが、流れて来る材木がくるりと廻ふつて舷ふなばたを突いたので、船は波に乗つて颯さつと退ひいた。同時に滝太郎の姿も水に沈んだが、たちまち水みず烟けぶりを立てて拔手を切つたのである。拓とともに助かったのは言うまでもない。

その夜湯よの谷で溺おぼれたのが十七人、……お雪はその中うちの一人で
あつた。

水は一晚で大方退ひいて、翌あくるひ日は天日快晴。四十物町はちよろ
ちよろ流れで、兵糧を積んだ船が往來ゆききする。勇美子は裾を引上げ
て濁水に脛はぎを浸しながら、物珍らしげに門の前を歩いていた。猫
犬ジャムはその袖の下を、ちやぶちやぶと泳ぎ、義作は夕立の背せな
を干して、傍かたわらに立っていた、水はやや駒ひづめの蹄ひづめを没するばかり。そ
れでも瀬を造つて、低い処へ落ちる中に、流れて来たものがある、
勇美子が目敏めざとく見て、腕捲うでまくりをして採上げたのは、不思議の花で
あつた。形は貝母ばいもに似て、暗緑帯紫の色、一つは咲いて花弁はなびらが
六つ、黄粉こうふんを包んだ薬しべが六つ、荅つぼみが一つ。

数年の後、いずこにも籍を置かぬ一艘の冒険船が、滝太郎を乗せて、拓お兼等が乗組んで、大洋の波に浮んだ時は、必ずこの黒百合をもつて船に号けるのであろう。

明治三十二（一八九九）年六く八月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成2」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年4月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第四卷」岩波書店

1941（昭和16）年12月25日第1刷発行

※底本の誤植は親本を参照して直しました。

入力：もんむー

校正：門田裕志

2005年3月16日作成

2007年9月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黒百合

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>